

---

# IS カオスに原作ブレイク

零崎哀識

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS カオスに原作ブレイク

### 【Nコード】

N0464T

### 【作者名】

零崎哀識

### 【あらすじ】

原作知識を持った転生者の零は一夏に巻き込まれてIS学園に入学した。

## 入学初日午前中（前書き）

『バカとカオスと原作ブレイク』がスランプです。  
そもそも勢いで書いていたのだからと思うていましたがなりました。  
今回も暴走で書いてます。

## 入学初日午前中

いきなりだが、俺には原作知識がある。

いわゆる転成者だ。

そのことに気付いたのは幼なじみの一夏と一緒にISを触って起動させた時だ。

ファースト幼なじみの称号は俺にあるぜ！

紹介での現実逃避はやめよう。

はっきり言おう。物凄く家に帰りたい。

ホームシックってわけじゃない。

視線が俺と一夏に集中してっからだよ！

俺と一夏以外女。

羨ましいと言った奴は前に出やがれ！

ストレスで死ねるぞ！

千冬「織斑！早く自己紹介をしろ！」

一夏の奴、千冬さんを怒らせちゃ駄目だろ。

出席簿アタックが来るぞ。

スパーン！

ほら来た。

って俺の頭が痛いのは何故？

千冬「織斑零！自己紹介をしろって言うてるだろ！そんなことも出来んのか貴様は！」

零「すみません」

そっぴや俺も織斑でした。

少し話そう。俺は千冬さんと束さんに拾われた。

篠ノ之だった頃もある。

育てて収穫とか言っていたが二人は野菜でも作ってるのだろうか？

クラスメートにも自己紹介しないとな。

零「織斑零です。よろしく頼む。名字が千冬さんと一夏と同じだが血は繋がっていない。義理の弟という訳だ」

『普通の姉弟っていいけど義理ってのも良いわね』

『私の義理の弟になって欲しい！』

何故に騒ぐ？

零「モットーは女尊男卑クソ食らえで、最後に一夏が危険な目に合わないように俺が守ります」

『一夏×零』

『一夏くんのヘタレ受け』

千冬「少し黙れ貴様ら！それと織斑は言動に気をつける！」

零「あの事件で何も出来なかった自分が嫌なんですよ。あと織斑女史。二人織斑がいるので紛らわしいです」

千冬「しょうがない。二人は名前で呼ぶか」

『ズルーい！』

『私達も名前で呼んでください』

『私も名前で呼ば』

また、千冬さんの雷落ちるぞ。

スパーン！

おかしい。音は一つなのにみんな頭押さえてるよ。

ショートホームルーム終了

一時間目

一夏「全部分かりません」

山田「全部ですか」

さすがに全部は酷いだろ！山田女史が困ってるだろ！

千冬「入学前に読むように言った参考書はどうした？」

一夏「捨てました」

スパーン！

一夏、お前が悪い。

一夏「いや、だって零の奴も捨ててたし」

千冬「それは本当か零？」

俺に振るの！？

零「内容全部理解してますから」

『『『えっ！？』『』『』

千冬「なら説明してみろ」

零「分かりました。まずISとは～～～」

キンコーンカーンコーン

零「~~~~~という訳です。時間なので終わりにします」

パチパチパチパチ

クラスから拍手が起こる。

山田「すごいですね。私なんてその半分しか理解してないのに」

それは教師としてどうだ？

一夏「勉強教えてくれ」

零「別に構わんが」

『私達もお願いします!』

山田「先生も」

果てしなく疲れることになりそうだ。

セシ「ちよつとよろしくて?」

零「よろしくないから帰れ」

セシ「まあなんですの!そのお返事!わたくしに声をかけられただけでも光栄なので、それ相応の態度を示すのではなくて?」

零「わーい!やったー!」



セシ「わたくしをおちよくってますの」

零「YES OF COURSE! (ベツニソンナコトナイヨ)」

一夏「本音と建前が逆だぞ。しかも、本音が英語で建前が片言って立ち悪いな」

零「しょうがないだろ。俺のモットーは女尊男卑クソ食らえ。その塊のようなこいつもクソ食らえ」

一夏「ははは。悪いな。えーっと名前なんて言うの？」

セシ「わたくしを知らない!? このセシリア・オルコットを? イギリス代表候補生で入学主席のわたくしを？」

一夏「零、代表候補生って？」

零「ISのオリンピック選手みたいなもんだ」

一夏「ヘースゴいんだな」

セシ「そうですわ! エリートなんですわ」

零「一夏。おだてるなウザいから」

一夏「悪い」

セシ「本来ならわたくしのような選ばれた人間と同じクラスになるだけでも奇跡! 幸運なことなんですよ。その現実を理解してらっし

やる？」

零・一夏「らっきー！」

ダブル棒読み

セシ「そっちの殿方もバカにしてらっしゃいますよね」

零「幸運って言うけどさ、千冬さんの弟と義理の弟にそれ言っても幸運でもなんでもないんだよ」

一夏「千冬ねえは天然チートだからしょうがないだろ」

セシ「くつ。まあいいですわ。わたくしは優しいのであなた達のような人間にも優しく接してあげますわ」

零「優しいって言葉を辞書で調べてこい」

セシ「泣いて頼めばISについて優しく教えてさしあげますわ。なんとって唯一教官を倒したエリートですから」

零・一夏「それなら俺も倒したぞ」

セシ「なんですって!？」

一夏「避けたら勝手に自爆した」

零「運が良かったな一夏。その人めっちゃ強かったと思うから」

セシ「わたくしだけと聞きましたが。まあ自爆なら」

一夏「女子の中ってオチだろ」

零「ちなみに俺が倒すのにかかった時間27秒。その対戦相手の教官は泣いていた」

セシ「どうせあなたも運が良かったのでしょ」

零「俺の場合は刀を投げつけ壁に張りつけマシンガンを0距離で乱射して勝った」

一夏「えげつないな」

零「その教官がこいつと同じ女尊男卑の人間だったからな。第一専用機持ちが倒せなかったら笑い者だろ」

一夏「確かに国の代表が他国の教官に負けるわけにいかないな」

セシ「こんな屈辱始めてですわ！」

一夏「少し落ち着けて」

セシ「これが落ち着いていられますか！」

キンコーンカーンコーン

セシ「っ！また後で来ますわ！逃げないことね！良くって!？」

零「良くねー」

## 二時間目

一夏に勉強を教えながら授業中

『愛しの束さんから電話だよ！零くんのお嫁さんさんの束さんから電話だよ！』

空気が死んだ

ハッハッハッハッ！

誰だよ。授業中はマナーモードにしとけよ！俺はちゃんとしてるから俺じゃないぞ。

『愛しの束さんから電話だよ！零くんのお嫁さんさんの束さんから電話だよ！』

うん。やっぱり俺のポケットから聞こえる。

零「織斑女史。俺はどうすればいいんですか？。」

千冬「相手が相手だ。電話に出ることを許可する」

零「ありがとうございます」

零「はい」

束「電話に出るの遅いよー！放置プレイかと思っちゃたじゃん！』

零「間違い電話か」

とりあえず電話をきる

『愛しの束さんから電話だよ！零くんのお嫁さんさんの束さんから電話だよ！』

零「はい」

束『勝手に切っちゃうなんて酷いよ！』

零「はあー。こっちは授業中です。そこんところを束さんは理解してますか？」

束『理解してるに決まってるじゃん！』

零「なおさら質が悪いわ！」

千冬「零。代われ」

零「了解しました」

束さんに絶賛雷落とし中

零「一夏。次の休み時間に箒に声かけとけよ」

一夏「零は？」

零「だから鈍感って言われるんだぞ」一夏「????」

千冬「はあ。零代われ」

零「はい」

束『零くん。零くんといっくんのISは私が作ったのをあげるから！』

零「それは嬉しいです」

束『良かった！零くんが喜んでくれて！』

零「あとあれもお願いします」

束『別にいいけど何に使うの？』

零「一夏を鍛える為に」

束『いっくんの為か。相変わらず過保護だねー！』

零「そんなわけではないです」

束『またまたー。じゃーね！』

零「今度は授業中は止めてくださいって切れてるし」

『束つてもしかして篠ノ之束！？』

『どつという関係なんだろ？』

『さつき嫁とか言つてたし夫婦！？』

千冬さんの出席簿アタック

お疲れ様です千冬さん。

休み時間

一夏は箒を連れて屋上に行った。

俺は質問攻め。

一夏がいない一人だから話しやすいから来たみたいだ。

『零くん趣味は？』

セシ「あなたは逃げなかつたみたいですね」

零「えーっと趣味は読書だ」

セシ「聞いてらっしゃるの？」

『そうなんだ。面白い本があつたら教えてね』

セシ「わたくしが話してるのに無視しないでくださる！」

零「基本的に小説しか読まないし、恋愛物は読まない方がいいのか？」

セシ「……………」

『全然いいよ』

セシ「もう1人のかれは逃げたみたいですね。臆病者みたいですわね」

零「なんだとコラ！」セシ「やっと返事しましたわね」

零「ちつ、何か用ですか？代表さん？」

セシ「あなたの義理の兄弟は逃げたみたいですよ」

零「あいにくてめえみたいな小物と会うより重要なことがあるからな」

セシ「こ、小物！」

零「わめくな。噛ませ犬キャラがスゲー立ってるよ。噛ませ犬代表」

セシ「噛ませ犬ですって！」

キンコーンカーンコーン

零「帰れ」

セシ「まだ話は終わってないですよ！」

スパーン

千冬「席に着け」

セシ「は、はい」

三時間目



千冬「授業の前にクラス代表を決める。クラス代表には対抗戦に出る他に様々な仕事をこなしてもらおう。まあクラス長だな。自他推薦は問わない。誰かいるか？」

『はい！一夏くんを推薦します！』

『私は零くんを推薦します！』

予想してはいたが。

一夏・零「遠慮したいんだが」

千冬「自他推薦と言っただろ。他にいないならこの2人の中から選ぶ」

零「悪いが少し話を聞いてくれ」

全員が俺に耳を向ける。

零「俺はやりたいことがあるんだ」

千冬「やりたいこと？」

零「生徒会長に喧嘩売る」

『『生徒会長に喧嘩売る！？』』

一夏「暴力はいけないぞ」

第「零が言ってることはそういう話ではない」

山田「IS学園の生徒会長になる為の条件というのは現生徒会長を倒すこと。つまり学園最強ということです。零くんは生徒会長になりたいんですか？」

零「生徒会長の席は興味ありません。最強の称号と生徒会長の席の代わりにいくつか権限が欲しいだけですよ」

一夏「また、なんでそんなことを？」

零「お前を守る為」

『『『キャーーーーー！！』』』

スパーン

千冬「零。言動に気をつけろと言っただろ」

『生徒会長の相手するっていうならクラス長やってる暇ないわね』

『じゃあ、一夏くんで決定ってことで』

零「一夏ガンバ」

一夏「こういう時に俺を守れ」

零「試練でことで」

セシ「待ってください！納得行きませんわ！」

零「立候補かー。今ごろってことは推薦してもらえんでも思ってたのかね」

セシ「っ！そういう訳ではありませんわ！」

零「じゃあどついう訳」

セシ「クラス代表が極東の猿でしかも男？珍しいという理由で選んでもらっては困ります！」

零「自意識過剰な噛ませ犬様がふさわしいですかね？」

セシ「大体、文化としても後進的な国で暮らすこと自体、わたくしには苦痛で」

カチン！ プチッ！

一夏「イギリスだって大した自慢無いだろ。世界一不味い料理何年チャンプだよ」

零「古いだけ取り柄の国がわめくな。黙ってそのまま化石になってもなりやがれ。自慢が増えるぞ」

セシ「わたくしの祖国をバカにしますの！？」

零「先にバカにしたのはそっちだろ。それともそんなことさえ分らないくらい脳ミソが化石化してるのか？」

セシ「くっ！決闘ですわ！」

零「一夏の練習相手に丁度いいな」

セシ「わたくしが練習相手!?!」

零「俺がやったらただの虐めだ」

セシ「ISを一回動かしただけの猿が」

零「5642194回でブルーティアーズは『打鉄』」

セシ「なんですかそれ?」

零「擬似IS起動プログラム。つまり、機体や操縦士のデータを使い頭の中でISを動かしたり対戦を行ったりするプログラムだ。それを使った回数とその中でブルーティアーズに対して使った機体だ」

クラスが騒めく。

セシ「なんでそんな物が」

零「俺は篠ノ之性だった頃に篠ノ之束の助手をしていた」

クラスが騒ぐ。

零「はつきり言って相手にならない。一夏に勝ったら相手してやる。クラス代表を決めるのに丁度いいしな」

セシ「分かりました。まず、そっちの猿から相手にしましょう」

零「一夏行けるな?」

一夏「お前が勝てるって言っなら勝てるんだろ？」

零「俺が勝たせてやる」

一夏「頼むぞ」

零「任せろ」

## 入学初日午後

昼休み

さつきの時間、俺達の専用機が届くと教えられたな。つーか、千冬さんめっちゃ面白いつて顔してたな。

零「昼飯行くぞ一夏」

『織斑兄弟食堂行くんだ。私達も行つていい？』

織斑兄弟とまとめられてしまった。

一夏「あつ、ちょっと待ってくれ」

一夏は筭の席に行く。

口論の後、筭を引っ張って連れてくる。

原作通り、モブキャラ退散。

俺、書き方酷いな。

さて、俺邪魔だな。

筭「一夏。本当に来週の試合大丈夫なのか？」

一夏「零がいるし、大丈夫だろ」

零「勝てるようにはしてやるが勝つかどうかはお前次第だ」

一夏「さっきの自信はどうしたんだよ？」

零「油断しそудもん。お前」

一夏「それはないだろ！ 箒も頷くな！」

零「後、お前は剣道部に入っておけ」

箒「なっ！？」

一夏「ISの勉強に専念したいんだけど」

零「ISの実施訓練だと思え。剣を握るのは重要だ。多分、一年じや剣で相手になるのは俺が箒しかないし」

一夏「箒はやっぱり剣道部か」

箒「まあな」

零「セシリアとの試合の前に2日ほど剣道部に回すから頼むぞ箒」

箒「任せとけ」

原作通り束さんのことから『白式』が届くのはギリギリだからな。

零「あと箒。一夏には剣道だけじゃなく剣術もたたき込んである。本気でやらないとケガするぞ」

箒「分かった」

零「食事が終わったから席を外す」  
一夏「相変わらず食べるの早いな」

零（時間作ってやってんだからなんとかしろよ）

第<sup>う</sup>三

アイコンタクト

束さんに電話

零「束さん」

束「零くんからかけてくるなんて珍しいね」

零「頼みたいことがあります」

束「いつくんの為でしょ？」

零「そうです。あれ、つまり擬似IS起動プログラムを送ってください。どうせ一夏の『白式』はギリギリに届くようにするつもりでしょう？」

束「送る機体どころか私の考えまで読むなんて天才だね！」

零「あなたほどでは」

束「それほどでもあるかな！いいよ。今日中に届くようにしとくよ」



零「ありがとうございます」

束「お礼にお姉ちゃんって呼んで！」

零「お断りします」

束「送らないよ」

零「束お姉ちゃん」

束「零くんは素直だね！過保護なんだから。一夏くんに嫉妬しちゃうよ」

零「それじゃ」

束「また仕事手伝ってね」

これで準備は完了だな。

キンコーンカーンコーン

放課後

山田「あ、零くん達まだ教室に居たんですね！良かったー！」

零「山田女史。どうしたんですか？」

山田「あ、はい。あのですね。零くん達の寮の部屋を伝えに来ました」

一夏「あの先生？俺達って1週間は自宅からの通学じゃ」

山田「そのう。実は政府の方から通達が来ちゃって」

保護ってことか。

自宅に来たマスコミや研究者を追い返すのも面倒だしな。

一夏「まあ大体の事情は理解しました。分かりました」

一夏も分かったみたいだな。

山田「そうですか。良かった」

零「荷物はどうなるんですか？」

千冬「お前達の部屋に送っておいた。着替えとケータイの充電器があれば平気だろ」

一夏「俺のマンガは？」

千冬「そんな物必要ないだろ」

零「俺のパソコン」

千冬「データは持ってきた。パソコンは寮のを使え」

零「ギリギリセーフ」

寮内

原作では箒とチャンバラするところだが、俺と同じ部屋だから起きない。

零「一夏。お前には近接オンリーで戦ってもらう」

映像を使った作戦会議中

一夏「大丈夫なのか？」

零「逆に聞くが銃を使った経験は？」

一夏「ない」

零「という訳だ。その分お前の剣は剣道の試合じゃ使えないがISなら生きる」

一夏「なるほど」

零「それにセシリアは近接系の武器はあまり使わない」

一夏「使わない？」

零「間合いを詰められても使わないことが多い。ここまでくると使えないと言った方がいいかもしれないな」

原作でもそうだったし。

零「ブルーティアーズの一番の武器は6つのピット。4つに見えるが自分の近くに2つ置いてある」

一夏「6つもあるのか」

零「だから避けることを重点的に覚えてもらう」

一夏「攻撃と防御は？」

零「防御は攻撃に当たらなければ必要ない。攻撃は剣の扱いで分かるはずだ」

一夏「分かった」

零「多分だがお前の武器は千冬さんと同じだ」

一夏「千冬ねえと！？」

零「ゲームに例えるとHPを消費して強い攻撃を与える刀とえばいい」

一夏「燃費が悪いな」

零「今から擬似IS起動プログラムで徹底的に練習してもらってから。いいな」

一夏「承知の上だ」

零「今日中に動かし方を覚えろ」

一夏「了解」



## 2日目（前書き）

抜けた場所があるので一旦消しました。  
すいません。

## 2日目

朝食

一夏「キツイ」

零「いつもお前が言ってただろ。朝食は沢山取ると」

一夏「昨日、あんなにやったのになんでそんなに元気なんだよ?」

零「束さん相手に慣れてるからな」

一夏「相変わらずチート臭いな」

零「天然チートの実の弟のセリフじゃないだろ」

スパーン

零「関羽」

ズドーン

零「それ、もう出席簿で出せる音じゃないだろ……」

バタッ

ブラックアウトしました。

3時間目

千冬「やつと気がついたか」

零「やった本人がそれを言いますか？」

千冬「私はからかわれるのが嫌いだ」

零「授業はいいのですか？」

千冬「山田さんに任せてある」

零「それはそれで大丈夫か？」

千冬「教師をバカにするな」

零「別にバカにはしてませんよ」

千冬「一つだけ質問に答えろ」

零「嫌です」

千冬「命令だ」

零「ズルいですね」

千冬「なんで避けないんだ？」

零「避けてよかったんですか？」

千冬「なら気絶してる時間が長いのはなんで？前のお前なら一時間で目覚めたはずだ」



零「質問は一つのはずです」

千冬「一夏の為だな？」

零「黙秘権を」

千冬「存在しない」

零「酷いです」

千冬「何故そこまでする？」

零「家族の為に努力するのは当たり前でしょ」

千冬「一夏は強いぞ」

零「確かに一夏は強いです。けど力が無いですよ」

千冬「力が無い？」

零「あいつはね、全てを守ろうとしてるんですよ。下手したら敵までも守ろうとしてる。だったら俺があいつを守るしかないじゃないですか」

千冬「そんなこと続けたら、お前が潰れるぞ」

零「別にいいですよ。それまでに一夏に力を与えます。そしたら一夏に守ってもらいますから」

千冬さんが抱きしてきた。

零「教師と生徒がマズいですよ」

千冬「姉弟としてだ」

零「千冬さん」

千冬「姉さんと呼べ」

零「多分だが、抱き締めた辺りから扉の前に一組生徒がいる」

千冬「!?!」

一夏「逃げろ!」

山田「お、織斑くん。待ってください!」

ダダダダダダダ!!

千冬「貴様ら全員校庭100周だ!」

零「お疲れ様です。姉さん」

千冬「さっき家族だから当たり前と言ったな?」

零「まあ」

千冬「なら姉の私からだ。自分を大切にしろ。一夏とお前を守るのを手助けする」

零「カッコいいですね」

千冬「お前らの姉だぞ」

零「でも、男よりカッコいいから婚期遅れますよ」

千冬「もう少し寝てろ」

ズドーン！

零「だからその音はおかしいだろ」

バタッ

ブラックアウト

千冬「それにお前がいるからな」

6時間目

結局、目が覚めたのは昼休み終了時。

昼飯食えなかった。

他の奴よりマシか。

昼休みに休憩が入ったみたいだけど現在進行形で走ってるし。

食ったら逆に吐くな。

俺は1人になってしまったのだが、やることはある。

『白式』より先に俺の専用機がついた。

束さん。それをやるなら一夏の送れ。

しかし、来ちゃった物はしょうがない。

最適化を行っている。

こいつの名前は『灰被り（シンデレラ）』

最適化完了

『灰被り』が俺の専用機になる。

機体の色のベースはグレー。

ヘッドパーツは目を隠す形になっているのと翼の羽が一枚一枚ひし形で別れてるのが特長。

武器は腰のガンブレード一つ。

この機体、『白式』と『紅椿』と同じ第四世代だ。

この機体ってあいつか！？

能力高いが一般人じゃ扱うの無理って言われたじゃじゃ馬か！？

そのせいで灰どころか埃被ってた。

零「誰か相手してくれる人居ないかな？」

千冬「私が相手してやろう」

零「お断りします」

千冬「安心しろ。使うのは『打鉄』だ」

零「はつきり言ってこいつの扱いってクソゲー並みき難しいんですよー！」

千冬「問答無用！」

――――――――――

キンコンカンコンコン

千冬「これで終了か」

零「一応、引き分けですね」

千冬「今度やる時は専用機を使わせてもらっ」

零「勘弁です」

千冬「貴様のことだ。そんなこと言って互角の勝負をするだろうが。私は強い奴と戦うのが好きなんだ」

零「この戦闘<sup>バトル</sup>マニア<sup>ニア</sup>が。それならナメック星にでも行ってください」

千冬「球を7つ全部集めてギャルのパンティーを貰ってきた」

零「まさかの返し!？」

千冬「他の者も走り終えただろう」

という訳でグランド

死体の山が出来てるよ。

俺はどっちかというと血の海派なんだが。

零「おい!一夏?」

返事が無いただの屍のようだ。

攻撃

魔法

道具

逃げる

零「ザラキーマ!」

全員『何故そこで全体即死魔法!?!』

零「ほら生き返った」

一夏「まあいいか」

いいんだ。

一夏「今まで何してたんだ？」

零「千冬さんと運動」

千冬「零の奴もなかなかやるぞ」

一夏「なっ」

零「俺は断ったんだけどさ」

千冬「何を言っている。途中から楽しんでいたじゃないか。あんなに激しくしおって」

零「誰のせいで激しくなったと思ったんですか。こっちの体力が持ちませんよ」

千冬「それは最後までやりきった者が言うセリフではないぞ」

山田「織斑先生と零くんがあんなことやこんなこと……………」

一夏「俺には同い年の兄が出来るのか……………」

第「私も一夏と……………」

なんか周りがトリップしてるし。

泣いてる奴や鼻血出してる奴、気絶してる奴もいるし。

そんなにキツかったのかグラウンド100周？

零「それにしても俺の専用機はキツイわ」

全員『はっ？』

千冬「久々に大会の気分を味わえたぞ」

第「あのーちよつといいですか？」

千冬「なんだ？」

第「なんの話してるんですか？」

千冬「ここはIS学園だぞ。ISについてに決まってるだろ」

セシ「オ、オホホホホ。わたくしはISのことだとはじめから分かっていましたわ」

一夏「良かった。零はまだ双子で親友だ」

山田「そうですか！私はてつきり、むぐっ！？」

クラスメートに口を抑えられ拘束。

うん。やっぱカオスに限るね！

一夏「零。お前の専用機が来たなら俺のも」



零「ない」

一夏「なんで!?!」

零「相手があのだから面白そうという理由でギリギリに送ってくる」

一夏「否定できない」

零「今日のメニューは道場でやるからな。一旦クールダウンしとけ」

一夏「今日くらいは」

零「勝ちたくないの?」

一夏「分かったよ」

零「夜までは延ばさないから安心しろ」

一夏「良かったー」

零「お前には防具無しで戦ってもらっからな」

一夏「は!?!」

零「剣で受けるのも無し」

一夏「マジかよ!」

零「マジ」

一夏「はぁー対戦相手は?」

零「今回は箒だけでいいや」

一夏「今回はつてことは次回はお前が参加するのか!？」

零「参加してほしいのか？」

一夏「一対一でいい勝負なのに箒と一緒にじゃ死ぬ」

零「冗談だ」

一夏「良かった」

零「剣道部からあと9人借りて10対1でやってもらう」

一夏「良くなー!」

## 一夏VSセシリア

遅い

『白式』がまだ届かない。

零「しょうがない。届くまでミーティングするぞ」

一夏「ああ」

零「この分だと試合中に最適化することになると思う。その間は攻撃に当たらなければいい。それだけ考えろ」

一夏「分かった」

零「最適化が完了したら、避けながら武器を使うタイミングを感じる。そうじゃないとエネルギー切れという間抜けな負けかたをするからな」

一夏「分かってる」

山田「一夏くん一夏くん一夏くん一夏くん一夏くん！」

零「慌てないでください。山田女史」

山田「届きました！一夏くんの専用機『白式』が！」

一夏「これが俺の専用機」

零「どうだ？」

一夏「すごく馴染む。こいつがなんの為にあるのか分かる」

千冬「気分はどうだ？」

一夏「大丈夫だ千冬ねえ。それじゃ行ってくる」

零「行つてこい」

箒「勝つてこい」

そして一夏は飛んだ。

一夏サイド

セシ「あら。逃げずに来たみたいですね」

一夏「零のプログラムのおかげで調子がいい」

セシ「最後のチャンスをあげます」

一夏「もし、一週間前から変わってないなら勝負しない方がいいぞ」

セシ「どういうことですか？」

一夏「俺の師は凄すぎるみたいだ」

セシ「あなたこそ泣いて謝れば許してあげますよ」

一夏「それがチャンスか？それはチャンスとは言わないし、チャンスだとしてもそれをするメリットが無い」

セシ「なら、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

一夏（見える）

ブルーティアーズの攻撃を紙一重でかわす。

セシ「ギリギリ避けましたわね」

一夏「武器を出すか」

《近接ブレード》

一夏（やっぱ近接オンリーか）

セシ「中距離射撃型の私に近接格闘装備で挑もうなんて………笑止ですわ」

零サイド

零「一夏、勝ったな」

山田「そうですか？私はオルコットさんの方が優勢に見えますけど。ほら、また当たりそう」

零「だったら賭けをしましょう。負けた方は次の休日にフルコース

を奢るのはどうですか？」

山田「良いですよ」

千冬「教師の前で賭け事か？」

零「さつき一夏が千冬ねえと呼んだ時に起こらなかったから今はプライベートでしょ。千冬さん」

千冬「くっ確かにそうか」

零「賭けはもう成立しましたし」

千冬「はあー、山田くん。こいつの言っているフルコースは給料の半分はかかるぞ」

山田「えっ！？でも、勝てば」

零「さつき当たりそうって言いましたけど、あれだけ攻撃してるのに当たらないのは何故でしょう？」

山田「運がいいから？」

零「答えはギリギリ避けてるのではなく、ギリギリで避けているからでした」山田「違うのですか？」

千冬「全然違う。一夏は攻撃を全部見切っている。零、お前何をした？」

零「防具無し10対1で剣道」

山田「!？」

千冬「お前が過保護なのかスパルタか分からなくなる」

零「10本の剣に比べたら6つのピットなんて紙飛行機同然。後はプログラムでブルーティーズはどんな物が体験させてやればいい」

山田「私のお給料が」

千冬「お前が教師をやった方がいいんじゃないか？」

一夏サイド

セシ「なんで当たりませんの!？」

一夏「零が言ってた通り、お前には足りない物が多すぎる!」

前日

零「戦いに重要なのは勝てる要素を揃えることだ」

一夏「普通のことじゃないか？」

零「なら、俺が居なかった場合にお前はセシリアにどうやって挑むつもりだった？」

一夏「筈通りにISの動かし方を教えてもらって」

零「それは自分の力を上げるだけだろ。自己の力も勝てる要素の一つだが、それだけじゃ足りない。少なくともセシリアの方がISの

実力と経験は上だ」

一夏「確かに」

零「そこで俺がお前に揃えたのはブルーティーズの情報、そこから考えた戦い方と作戦、それを行う為の力」

一夏「1週間で揃うのか普通？」

零「普通は無理だ。だが、俺が束さんの所から帰ってきてからお前に剣を握らせてただろ。それがあったから可能なんだよ」

一夏「なんか零がセシリアに勝つみたいだな」

零「違うよ。勝つのはお前だ。俺は手伝っただけだ。だから拗ねるな」

一夏「拗ねてねーよ」

零「なら良かった。最後になるがセシリアは準備を怠ると思うが、慢心するな。冷静になれ」

回想終了

一夏（あいつには情報、作戦が無い。しかも、慢心していた。だがそんなことで慢心はしない。冷静に戦う）

その時、《白式》が光る。

最適化完了



一夏「来た！」

セシ「ま、まさか………ファーストシフト一時移行！？あ、あなたまさか今まで初期設定であそこまで戦っていたの！？」

一夏「そうだよ。これでやっと俺専用になったみたいだな」

《近接ブレード 雪片二型》

一夏（これが千冬ねえの武器）

一夏「まったく俺は最高の家族を持ったよ」

ピットの一つをたたつ切る。

一夏「待たせたな。これからが本番だ」

零サイド

第「行ける行けるぞ！一夏！」

一夏が2機目を落とした。

千冬「あの馬鹿者」

零「あれだけ言ったのに」

山田「2人共どうしたんですか？」

千冬「良かったな山田くん。勝機が見えたぞ」

零「浮かれてやがる」

山田「どういうことですか？」

千冬「さっきから左手を開いたり閉じたりしてるだろ？」

零「あれはあいつのクセで簡単なミスをするんですよ」

山田「へえー。さすが御姉兄弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

千冬「ま、まあなんだ。あれでも私の弟だからな」

山田「照れてるんですかー？」

千冬のヘッドロック

山田「イダダダダー！」

千冬「私はからかわれるのが嫌いだ」

山田「は、はい！分かりましたから放しーーーあうううっ！」

零「負けたら賭けのフルコースの料金払ってもらっからな。一夏」

一夏サイド

一夏「四機目！」

一夏（残りはセシリアの横の二機。なら、セシリアを直接とる！）

一夏「いっけー！ー！」

セシリアの攻撃はレーザー。一夏の《雪片二型》は切ることが出来るので切りながら進む。

零サイド

零「あ、分かった」

千冬「何がだ？」

零「一夏がどんなミスをしたか」

第「分かったのか！？」

零「ああ。あの馬鹿はせっかく回避の訓練してやったのに《雪片二型》になってから攻撃を全て切ってる。しかも結構エネルギー使ってる」

山田「ということは」

一夏サイド

画面が赤くなった。

一夏（しまった！エネルギーが！）

セシリアの目の前に出る。

「夏」あと少しもちやがれ——！」

《試合終了 勝者 織斑一夏》

## 生徒会長VSオリキャラ（チート？）

はあー。ちゃんと原作が壊れたか。

それでは、俺も学園最強になりますか。

生徒会室

零「失礼します。生徒会長さんぶっ倒しに来ました」

楯無「織斑零くんだっけ？」

零「覚えていただき光栄です？生徒会長さん」

楯無「珍しい男子生徒だからね」

零「そりゃそうか」

本音「ゼロっちだ！」

零「ゼロじゃなくてれいだ。本音」

本音「ゼロっちはゼロっちだよ」

零「傑作だぜ。それより相手してもらえます？」

楯無「良いわ。かかって来なさい」

零「ここでやるんですか？」

楯無「ええ。仕事があるし」

零「別にいいですけど」

スパン！

楯無の後ろのカーテンが切れる。

楯無「躊躇なく首を狙ったわね」

零「相手は学園最強様ですから」

楯無「今、何やったの？」

零「分からないで避けたんですか？」

楯無「殺気を感じたから」

零「凄いですね。でも教えません」

本音「今、ゼロっちはねー。居合いのようりょうで斬激を飛ばしたんだよ」

のほほんさんってそんなキャラだったの！？

楯無「そう。ありがとう本音」

零「本音が見破ってるのに学園最強が見破らないでどうするんですか？」

楯無「無茶言わないでよ。本音の見切りに勝てる奴なんていないんだから」

一種の天才か。

楯無「やっぱり場所を移しましょう。第五アリーナなら今空いてるみたいだし」

零「嫌です。ここで殺します」

楯無「实力を見誤ったのは謝るから。私と君、どちらも本気を出したら被害が洒落にならないからね」

そう言つて楯無は扇子を振る。

楯無「この糸でトドメをさす作戦は使えなくなったから」

扇子を振った時に仕掛けていた糸を切っていた。

この糸に飛び込んでいたら体はバラバラになっていた。

零「分かりました。決着はISにしてあげます」

楯無「ありがとうね」

ISスーツを着用してから集まることになった。

第五アリーナ

楯無「君のISの翼綺麗だね」

ISの色を少し修正します。

翼とガンブレードのブレードの刃の部分の色はシャボン玉のようなクリアです。

零「とつとと始めましょう」

楯無「つれないわね。本音」

本音「れでいーごー!」

開始と共に俺はガンブレードの《謝肉祭》<sup>マニイター</sup>で散弾を連射する。

楯無は弾の雨を流れるようにかわしていく。

レベル的に予想通りだがな。

楯無「行くわよ!」

楯無は《ラスティ・ネイル》、零は《マニイター》で接近戦を開始した。

零「その武器はこんな近距離で使う物じゃないですよ。やりづらいでしょう?」

楯無「ちよつと接近戦をしたくなっただけよ」

零「お得意のナノマシンですか?」



楯無「!?!」

零「調べさせてもらいました」

楯無「零くんって私のストーカーだったの? 驚いちゃった!」

零「コ・ロ・ス!」

楯無「きゃーっ! 怖い」

楯無は瞬間的に距離をとる。

楯無「クリア・パッション!」

零の周りの温度が上昇する。

だが、

楯無「シールドエネルギーが減ってない!?!」

零「調べて対策しない馬鹿はいないでしょう」

零の周りには《シンデレラ》の羽が何枚かついている。

零「学園最強と戦うんですよ。37枚も防御にまわさせてもらいましたよ」

楯無「その翼の羽はまさか全てビッド!?!」

零「正確です。左右共に50枚ずつ計100枚全てがビット《前夜祭》です」

楯無「そんなの使い切れるなんてチートね」

零「努力の賜物ですよ」

零は《マンイーター》で追撃をする。

楯無は水のナノマシンで防御する。

楯無「ばれてるんだから惜しみなく使わせてもらっわ」

零「こつちも《カーニバル》を乱用させてもらいますよ」

楯無は見えない攻撃をギリギリで避ける。

楯無「ビットじゃなくてそつちのガンブレードじゃない。この嘘つき」

零「気付きましたか」

楯無「そつちのガンブレードは実弾だけじゃなくて衝撃胞も出せるなんてね」

零「《マンイーター》の弾の種類は20を超える」

バババババババババババ！

《マンイーター》から散弾、衝撃波、レーザー、ミサイル等を乱射

する。

楯無「くっ!」

ナノマシンで防御する。

零「まだまだ行きます」

零がさつきと同じ攻撃をしようとした瞬間に楯無は《蒼流旋》に武器を替え、イグニッションブーストで一気に間合いを詰める。

楯無「なら接近戦に変えるわ!」

零「イグニッションブースト使えたんですね。ですが《マンイーター》に苦手な間合いは無い!」

《マンイーター》で楯無の《蒼流旋》を流す。

それが合図に攻防が始まる。

お互いのシールドエネルギーは減っていき、

楯無が一旦距離を置き、零がそれを詰めようとしたが、

零「動かねえ」

楯無はナノマシンを零に吹き続けていて、それを蒸発させずに、固定させたのだった。

楯無「それじゃ決着ね。羽がほとんど無くなった《シンデレラ》は

可哀想だし」

楯無はトドメをさす為に《蒼流旋》を構え飛んでくる。

零「やつと気を抜いてくれたよ」

楯無を赤い衝撃と透明な羽が巻き込む。

零「《赤き制裁》」  
オーバーキルレッド

《赤き制裁》はほとんどのビットを攻撃に回して使う大技。正面からか毘のようにしか発動出来ず、防御が疎かになり過ぎる。ビットが出すエネルギーとビット自体が攻撃する形になっている。

本音「勝者ゼロっち」

楯無のシールドエネルギーが切れたと同時に赤い衝撃が消える。

零「あつ、やばっ」

ISが解け、楯無が落ちてくる。

零はそれを受け止める。

零「大丈夫ですか？」

楯無「全然ダメだから看病お願いね」

零「虚さんに任せますから」

楯無「勝手に部屋に行っちゃうから」

零「一夏もいるんですから」

楯無「居ない時に行くなら良いでしょ？新生徒会長さん？」

零「要りませんよ。生徒会長の席なんて」

楯無「だつたらなんで挑んだの！？」

零「お願いを聞いて欲しいからですかね」

## クラス代表

『クラス代表就任おめでとう!』

山田「一年一組クラス代表織斑一夏。一つながりで良いですね」

『せっかく男子がいるんだから持ち上げないとね!』

一夏「はあー。そっぴゃこれ賭けて戦ってたんだっとな」

零「俺はフルコースを賭けてたぞ」

一夏「俺もそっちの方が良かった」

山田「私のお給料が……」

薫子「新聞部の黛薫子です!話題の新入生の織斑一夏くん取材に来ました!」

零「一夏ガンバ」

一夏「他人事だと思って」

零「余裕で勝てるようにしてやったのにヒヤヒヤさせやがって」

一夏「うっ」

薫子「ではズバリ一夏くん。クラス代表になった感想は?」

一夏「えーつと頑張ります?」

薫子「もーインパクト薄いなー。俺が勝ったらお前もハーレムだ! くらい言ってくればいいのに」

一夏「誰が言うかそんなこと!」

薫子「まあいいわ。セリフはこっちで勝手に捏造するから」

一夏「聞いてはいけないセリフが聞こえたんですけど!」

薫子「もう1人の男子の織斑零くんはどこかな?」

嫌な予感しかない。

逃げるか。

山田「こっちに零くんがいますよー!」

零「なっ!」

薫子「今、行きまーす!」

逃亡失敗

アイコンタクト

零(山田女史! わざとでしょ!)

山田(なんのことですかー?)





『てことは学園最強がウチのクラスに居るってこと？』

大会とか総なめじゃん

一夏「さすがだな零は」

第「一夏も腕を上げていたが、零はどんなレベルまで上がってるんだ」

セシリア「本当に凄かったんですね。そんな方に喧嘩を売ってたなんて」

薫子「じゃあ、新生徒会長さん？」

零「いや、みんなには言ったが生徒会長の席には興味無い。学園最強の座と生徒会長に頼みたいことがあったからそれを聞いてもらう為だな」

薫子「で、その頼みごととは？」

零「それは秘m」

楯無「私と付き合うことだよ！」

「えええー」

さっきより驚きが大きいし、てか

零「なに出任せ言ってますか！楯無さん！」

薫子「名前でよんでる!？」

零「楯無さんがそうするように言っ たんですよ」

楯無「またまた照れちゃってー」

千冬「うるさいので来てみたら面白いことが聞こえたんだが山田くん、これは私の幻聴か？」

山田「いえ、現実です」

千冬「そうかそうか。てつきり私の耳がおかしくなったのかと思っ たよ」

山田「私をデート（賭けのフルコース）に誘っておきながら」

2人の目に光が無い!？」

零「落ち着いてください。これは楯無さんの冗談ですから。それに一夏の為のパーティーですから問題を起こしちゃダメですよ」

楯無「ごめんね!みんなの前じゃ恥ずかしいか。ダーリン!」

零「あんた少し黙ってろ!」

薫子「零くんの記事は最初っ から捏造する必要無いじゃない」

千冬「安心しろ零」

山田「そうですねーくん」

零「良かった。誤解が解けて」

千冬・山田「この就任パーティーの間は手を出さないから（出しませんから）」

零「死刑宣告じゃねーか！」

薫子「写真を撮りますよー！」

楯無「私は零くんとツーショットで」

零「あんたらホントにマイペースだな！」

薫子「じゃあ最初は一夏くんとセシリアさんで、互いに健闘したって感じで握手して」

セシ「その写真は貰えますのよね？」

薫子「もちろん！」

セシ「一夏さんとツーショット」

薫子「二日間を分に直したら？」

一夏「へっ？」

セシ「2828」

なるほど。2828（ニヤニヤ）か。

クラス写真になってるのは知らないが。

薫子「零くんもね」

零「面倒なんで全員で撮りませんか？」

薫子「確かにまた皆入っちゃうからね。じゃあ集まって」

俺の周りは千冬さんと山田女史と楯無さん。

逃がさない為だろうか？

零も一夏と同じ朴念人。

薫子「じゃあ行くよ！はいマーガリン！」

語呂悪！

薫子「ありがとねー！新聞楽しみにしててねー！」

零「俺は楯無さんと付き合っていないですからね！」

薫子「楽しみにしててねー！」

零「あんた聞く耳ねーだろ！」

千冬「それでは零」

山田「一通り終わりましたし」

楯無「お話ししよっか？」

カナカナカナカナカナ！

まだひぐらしが鳴くには早いよ！

零「《シンデレラ》！」

逃げます！

山田「待ちなさい！」

楯無「先生とデートってどういうこと！」

千冬「ISの使用はアリーナ以外禁止だ！」

山田と楯無もISを展開し、追いかけてくる。

千冬さんはなんで普通に走ってそんなに早いんだよ！？

零「死んでたまるか！」

ガシッ！

あっ、死んだな。

千冬「私が特別に稽古してやろう」

山田「先生と個人授業ですよ」

楯無「先輩が手取り足取り教えてあげる」

零「皆さん。人間には言語という物がありましてね。だから話し合  
いで解決の方向は」

千冬・山田・楯無「」「無い（ありません）！」「」

零「ですよねー」

俺オワタ

## サード幼なじみ

昨日の夜は死ぬかと思った。

いや、数回死にかけたし。

一夏「大丈夫か？」

零「今なら疲労で死ねる自信がある」

一夏「つまりダメってことか」

零「なんでお前の就任パーティーで俺が死にかけてんだ？」

一夏「それはお前が鈍感だからだ」

零「鈍感なのはお前だろ」

第・セシ（（どちらもだろっ（ですの）（））

一夏「そっぴや転校生が二組に来るんだってな」

零「昨日、リアル鬼ごっこしてる時にそれっぽい見かけたぞ」

第「中国の代表候補生らしいぞ」

セシ「わたくしの存在を危ぶんでの転入でしょうね」

零「なわけねーだろ。代表候補生は他の学年にもいるんだから。そ

れに時期が遅いしな」

一夏「別にウチのクラスに来る訳じゃないんだからどうでもいいだろ」

零「それよりもお前はクラスマッチについて考えておけ」

一夏「分かってるよ」

セシ「でも一組と四組にしか専用機持ちはいませんからそこまで心配しなくても」

????「その情報古いよ」

零「そうやって油断するから負けるんだよ」

一夏「俺は油断はしないよ」

????「あの一」

零「ミスはするがな」

一夏「それを言うなよ」

????「私、泣いていいかな?」

セシ「すごいスルースキルですの」

第「2人とも相手してやれ」



一夏「はい」

零「それでは」

一夏「お前鈴か!？」

零「鈴?そうか。お前が一夏のサード幼なじみの」

鈴「この2人絶対に打ち合わせしてたでしょう」

一夏「本当に懐かしいな」

零「それより気になったことがあるんだが」

一夏「確かにちょっと気になることがある」

鈴「クラス代表のこと?あれは変わってもらった」

一夏・零「「なんでお前格好つけてんだ?」」

鈴「馬鹿にするのもいい加減にしろ!」

バシン!

千冬「SHRの時間だ。自分のクラスに帰れ」

鈴「うー。分かりました。逃げるんじゃないわよ一夏!」

鈴帰還!

第・セシ「一夏<sup>さん</sup>！後で話を聞かせてもらっからな（もらいますからね）！」

バシン！

千冬「早く席に着け」

――――

昼休み

第・セシ「一夏<sup>さん</sup>のせいだ（ですわ）！」

一夏「んな、理不尽な！？」

確かに理不尽だ。授業中に千冬さんに叩かれた数が2桁行つたのは自業自得だろ。

零「学食に行かないか？混むぞ」

一夏「そうだな。早く行こう」

ダッシュでGO！

第「待て一夏！」

セシ「そうですわ！」

第とセシリアもダッシュでGO！

零「あれ、置いてきぼり？」

とぼとぼ1人で向かいます。

楯無「零くん！」

声の方向から飛び蹴り！

必殺イナバウアー！

回避完了

零「危ないでしょ！楯無さん！」

楯無「あんな避け方する人が言うセリフじゃないでしょ」

零「それよりなんか用ですか？」

楯無「実はね。頼みごとがあるんだよね。やってくれる？」

零「内容によりますよ」

楯無「妹の専用機を作るの手伝ってくれない？」

零「分かりました」

楯無「やっぱりダメか……。でも、……って、いいの!？」

零「楯無さんの妹の簪さんでしたっけ？彼女の専用機は一夏の白式のせいで作成が遅れてるんでしょう？」

楯無「なんでそこまで」

零「楯無さんのことを調べた時に一緒に調べましたから」

楯無「やっぱりストーカー」

零「死にたいみたいですな？」

楯無「ウソウソウソ！それでね、この事んだけど簪には」

零「楯無さんからだって言わないでほしいんでしょ？」

楯無「うん」

零「それくらいのことは飲みますよ。ただし一夏は巻き込まないでくださいな」

楯無「過保護だね」

零「うるさい。つか、もう学食行ってる時間ねーよ」

楯無「ごめんね！そんな零くんにはこれをあげましょう！」

楯無は包みを出す。

楯無「手作り弁当だよ！」

零「楯無さんの分は？」

楯無「私の分はあるから貰っちゃってください！」

零「ありがたくいただきますね」

楯無「素直だねー」

零「礼は普通に言いますよ」

楯無「それじゃーね」

零「それではいただきますか」

凄いな。重箱かよ。

中身はどうなってるのかな？

なかなか面白い形だな。

《桃》の形なんて。

味は桃の味なんて全然しないけど美味しいな。

朴念人全開中

千冬「お前は何を食っている？」

山田「誰が作ったんでしょうね？」

零「普通に楯無さんから貰った弁当を食べてるんですけど」

千冬「なんでそんな物食べてるんだ！」

山田「零くんはお弁当なんか食べちゃダメです！」

零「んな、理不尽な！？」

朴念人全開中

山田「じゃあ、私が今度お弁当を作ってきます」

零「いいんですか？」

千冬「なら、私も弁当を作つて」

零「丁重にお断りします」

千冬「何故だ！」

零「マンガみたいに砂糖と塩を間違える人は練習してからにしてください！」

山田「ああ。よく間違えちゃいますよね」

零「アンタもか！？」

一夏「これは一体どういう状況だ？」

零「俺が教えてほしいよ」

休日（デート？）（前書き）

写真を撮る時の掛け声の計算をミスってました。  
すいませんでした。

休日（デート？）

一夏サイド

千冬「あんなにくつつきおって……………」

一夏「千冬ねえ、いい加減止めようぜ」

千冬「うるさい。フルコースを食べさせてやる」

一夏「よし。続けよう」

千冬「分かればいい」

楯無サイド

楯無「昨日、簪のことをお願いしたのに……………」

虚「今日は学校が休みだからしょうがないんじゃないですか？」

楯無「あっ！動いた」

虚「聞いてないし」

楯無「早く行くわよ」

虚「私、何してるんだろ」



今日の朝

零サイド

零「今夜、フルコースの予約しておきましたから」

山田「分かりました。それまで遊びに行きませんか？」

零「いいですよ。それくらいお付き合いしますよ」

山田「お、お付き合い」

零「どうかしました？」

山田「な、なんでもありません！」

零「そうですか。じゃあ、行きますか」

一夏「行つてらっしゃい」

零「ああ」

一夏サイド

零達は楽しんでこれるかな？

それじゃあ、俺は零に言われた鈴との戦いに備えて訓練しに行くか。

どこのアリーナが空いてるか聞かないとな。

千冬「ねえだ。ちょうどいいや。」

一夏「織斑先生」

千冬「一夏か。零と一緒にじゃないのは珍しいな」

一夏「零なら山田先生と」

千冬「一夏、出かけるぞ」

一夏「へっ？」

楯無サイド

仕事が最近多いわね。

まあ、今日やっちゃえば終わる量だしね。

楯無「本音。手が止まってるわよ」

本音「そついえば、ゼロっちと山ピーと遊びに行ってたよー」

楯無「本音。虚。行くわよ！」

本音「はーい！」

虚「仕事がつまってるんだからダメです」

楯無「更識家当家として命令よ」

虚「権力乱用しないでくださいよ」

楯無「じゃあ、お願い！」

虚「はあー。終わったらちゃんと仕事ですよ」

楯無「はい！」

零サイド

零「じゃあ、どこ行きます？」

山田「ちょうど映画のチケットがあるんですよ」

零「じゃあ映画館に行きましょう」

山田「あ、あの」

零「なんですか？」

山田「手つないでもいいですか？」

零「ああ。はぐれるとマズいからですね。いいですよ」

山田「は、はい！はぐれるといけませんから」

一夏サイド

千冬「手をつなぐだと！？」

一夏「それくらいいいだろ」

千冬「私だって最近は全然してないのに」

一夏「ダメだこりゃ」

楯無サイド

楯無「手をつなぐですって!？」

虚「あれ？誰かが同じ運命を辿ってる気がする」

楯無「私だってまだしたことないのに」

虚「私だけじゃ手に負えないわ。本音はどこか行っちゃったし」

零サイド

零「そろそろ始まるみたいですね」

山田「はい。『着信無し』ってどんな映画なんでしょう？楽しみです」

零「たしか、S級ホラー映画だそうですよ」

山田「えっ？今なんて言いました？」

零「S級ホラー映画」

山田「ホラー映画？」

零「はい。あまりに怖すぎて中学生以下は入れないそうで」

山田「……………」「冗談ですよね？」

零「リアルです」

山田（人気だからってこれ選んだのに、ホラー映画だなんて。ここで怖がっちゃ大人としての威厳が）

零「もしかして怖いんですか？」

山田「ななな何を言っちゃってるんですか！そそそんな事ないですよ！」

この人に威厳なんてあるのだろうか？

一夏サイド

千冬「映画か。一夏、同じやつを見るぞ」

—————

一夏「座ったはいいけど。なあ千冬ねえ」

千冬「なんだ」

一夏「千冬ねえってホラー映画苦手じゃなかったか？」

千冬「ふん。何を言ってるんだ」

一夏「ならいいけどこれ結構レベル高いホラー映画だぜ」

千冬「なっ!？」

一夏「そろそろ始まるみたいだ」

楯無サイド

楯無「いい席取れて良かったわね」

虚「この状況のどこが良かったのでしょうか？」

楯無「この映画は結構話題になってるらしいわよ」

虚「会話をちゃんとしてください!」

楯無「うるさいわね。文句あるの？」

虚「亀甲縛りされて文句言わない人がいるんですか!」

楯無「だって逃げようとするんだもん」

虚「私がお化けとか苦手なの知ってるでしょ!」

楯無「知らなかったー（棒読み）」

虚「今すぐ解放してください!」

楯無「映画が始まるんだから静かにしないとダメだよ。常識がないな」

虚「お嬢様に常識うんぬん言われると思いませんでしたよ！」

この後、映画館から3つの悲鳴が聞こえてきたのは言うまでもない。

――――

零サイド

山田「まさか上映時間が4時間もあるなんて」

零「遅いですけど軽く昼飯をとりましょう」

山田「ちよつと腰がぬけちゃって立てません」

零「そんなに怖かったですか!？」

山田「恥ずかしいですけど」

零「しょうがないですね」

一夏サイド

千冬「お姫様だつこだと――――」

一夏「大声出したらばれるって」

千冬「歩けないなら背負えばいいだろ！」

一夏「いや、背負ったらあれが当たる」

千冬「くっ。私だってしてほしいのに」

一夏「はぁー」

楯無サイド

楯無「お姫様だっこですってーーーーー！」

虚「あれは恥ずかしいな」

楯無「私もやってほしい！」

虚「私も亀甲縛りのまま引きずられるくらいなら、お姫様だっこしてほしいです！」

楯無「行くわよ！」

虚「誰か助けてくださいーい！」

-----

零サイド

山田「さーて、お昼も食べ終わりましたし、これからどうしましよ  
う」

零「ちよっと行く場所があるんですがいいですか？」



山田「はい。いいですよ」

零「それでは」

――――

山田「ドレスショップですか？」

零「あのー店員さん。彼女にあうドレスをお願いします」

山田「えっ！ちょっと」

店員「はい！」

零「１時間くらいしたら戻ってくるんで彼女をお願いしますね」

店員「分かりました」

山田「だ、代金は」

零「俺が持ちますから、ここってカード使えますよね？」

店員「ご利用できますよ」

山田「ちょっと」

店員「お客様はこちらになりまーす」

山田女史は行ったな。

さてと、

零「いい加減出てきたらどうですか？」

4人「『『『『ギクッ！』』』』」

零「ばれないと思ったんですか？一人は気配消さなすぎ。三人は気配を消しすぎ。尾行の時は気配を周りに混ぜるべきですよ」

一夏「そうなのかーって千冬ねえがない！？」

零「片方のグループは一夏と千冬さんか。まったく家族だからって心配し過ぎだろ」

一夏「零、そこまで気付かないと千冬ねえが可哀想だぞ」

零「一夏。今日やるはずだったメニューはどうしたのかな？」

一夏「えっ（ダラダラ）」

零「これは明日は倍のレベルでやらないといけないみたいだな」

一夏「ハッハッハ！シンダナコリヤ」

零「さて、もう片方のグループも逃げたみたいだけど、誰だったんだ？」

楯無サイド

楯無「まさかばれてたなんて」

虚「止まって止まって止まって――――！！」

楯無「今日はこちらでおしまいね」

虚「この速さで引きずられ続けたら死んじゃう！」

――――

1時間後

零サイド

零「山田女史。それじゃあフルコースを奢ってもらいますか」

山田「それはいいんですけど」

零「予約してた者ですが」

ボーイ「はい。織斑様こちらです」

ボーイに案内された席につく。

零「この料理は絶品なんですよ」

山田「あのーこのドレス」

零「すごく似合ってますよ」

山田「えっ。そうですか！零くんのタキシードもすごく似合ってますよ、このドレス高かったですよ」

零「しょうがないじゃないですか。この店はこういう格好じゃなきゃ入れないんですから」

山田「でも」

零「じゃあ口止め料ということで」

山田「口止め料ですか？」

零「飲酒するんで」

山田「ダメですよ！第一出してくれないでしょ」

零「ここのシェフと仲が良くて出してくれるんですよ」

山田「でも、口止め料だとしてもここの料金より高いですよ」

零「山田女史をここに連れてくるのが目的だったからいいんですよ」

山田「それって」

零「ここに結構レア物のボトルがあるんですけど、金を出しても開けてくれないんですよ。シェフに頼みこんだら俺が女を連れてきた時に開けてくれるって言うんですよ。なぜか千冬さんを連れてきた時は家族はダメって言うし、なんでしょかね？」

山田「零くん。そのシェフが言ってる女ってどういう意味か分かつ

てます?。」

零「馬鹿にしないでくださいよ。女は女性って意味でしょう」

山田（やっぱり分かってない）

シェフ「零！本当にお前が女を連れてきたってのか!？」

そのシェフが席にやってくる。

零「はい。山田真耶さんです」

シェフ「真耶さんか！これからも零をよろしく頼む!」

山田「は、はい！こちらでもよろしくお願いします!」

零「シェフ。あれを開けてくださいね」

シェフ「任せろ！今日は俺の奢りだ!」

零「本当ですか!」

シェフ「今日はめでたいからな!」

零「ありがとうございます」

シェフ「じゃあ俺が全力で腕を振ってくる」

シェフは厨房に戻っていった。

山田「私奢らなくていいんですか？」

零「シェフがああ言ってたからいいんじゃないですか」

山田「そうですか」

山田（勘違いしてるみたいだけど黙ってよ）

-----

あのボトル飲んだら山田女史潰れちゃって寝ちゃったよ。

また、運んでくか。

零「シェフ。今日はありがとうございました」

シェフ「気にするな。お前が女を連れてくるとは思ってなかったかな」

零「俺だってそれくらいできますよ」

シェフ「悪い悪い」

零「それじゃ」

2人の女の意味が違います。

-----

翌日

千冬＆山田サイド

山田「頭が割れるー」

千冬「昨日の分を終わらせるぞ」

山田「なんで織斑先生はいなかったんですか？」

千冬「よ、余計なことを考える暇があつたら手を動かせ」

山田「はい」

楯無サイド

楯無「終わらないよー」

本音「遊びたい！」

虚「文句を言わない！」

楯無「でも、この縛り方で椅子にくくりつけるのは」

虚「私は昨日その格好で引きずり回されたんですよ」

楯無「ごめんなさい」

本音「なんで私までー」

虚「言い出しつpegどこに行つてたんですか？」

本音「うつ」

虚「終わるまでこのままです」

楯無・本音「「そんなー」」

一夏サイド

一夏「こんなの無理だろ！」

零「うるさい。やれ」

一夏「見えない攻撃を避けるなんて」

零「空気の流れて起動を予測しろ」

一夏「普通はそんなこと出来ねえよ！」

零「俺も千冬さんも楯無さんも出来る」

一夏「全然普通じゃないだろ！」

零「知らん。やれ」

一夏「もしかして怒ってる？」

零「そんなこと無いぞ。久しぶりに羽を伸ばそうとしたのに追跡者がいたせいで神経なんて全然使ってないからな」



「夏」やっぱり怒ってる

簪

零サイド

さて、簪の手伝いをしますか。

114

零「失礼する」

『零くんだ!』

『なんでだろう?』

すごい勢いで集まってきた。

零「更識簪っているか?」

『えっ更識さんって』

『お姉さんのおかげで専用機を』

零「悪いがその更識簪に用があるんで」

簪の席につく。簪は読書していた。

零「更識簪さんだな?」

簪はこっちに目を向けるがすぐに読書に戻る。

零「せめて会話しよう」

簪「……勝手にお幸せになってください」

零「まさかの返し!？」

簪「……お姉ちゃんの恋人になったから妹の私の所に来たんでしょ？」

零「そして、まさかの追撃!？」

簪「……だから勝手にお幸せになってください」

零「俺は楯無さんと付き合ってない!」

楯無「……嘘。……だって学校新聞に載ってたし本人が言ってた」

零「誤解だ!学校新聞はガセで楯無さんはからかう為に言っただけだ」

簪「……そう」

簪（お姉ちゃんは多分本気だと思うけど）

簪「……だったら何？」

零「お前の専用機の作成を手伝おうと思って」

簪「……お姉ちゃんに頼まれたんでしょ？」

零「俺は楯無さんに頼まれても動かないよ」

簪「……お姉ちゃんは生徒会長だよ」

零「俺はあの人を倒したぞ」

簪「……嘘。お姉ちゃんが負けるわけない」

零「新聞に載ってなかったのか？」

簪「……お姉ちゃんに恋人ができたってことで手一杯だった」

零「分かってくれた？」

簪「……分かった。……でも《打鉄式》は一人で作るからいい」

零「俺の家族のせいで遅れたんだ。だから俺には義務がある」

簪「……それは本人が来るべき」

零「あいつがいても邪魔になる」

簪「……あなたが居ても邪魔」

零「100種を超えるISのデータ。一度に使えるパソコンの量は30台。一から専用機と量産機の設計をしたこともある。なにかご不満でも？」

簪「……うつ。……分かった。……放課後に整備課に来て」

零「じゃあ放課後にな」

簪「……うん」

簪サイド

やっと思つてくれた。

でも放課後一緒にいることになつちやつた。

自分勝手ですごく迷惑な人だった。

お姉ちゃんより強くて、お姉ちゃんが好きな人。

――――

放課後

零サイド

零「完成目標はクラスマッチとして」

簪「……そんなの無理」

零「無理じゃない。俺を手足として使えば10日で完成出来る」

簪「……第一、私はクラス代表じゃない」

零「専用機持ちなのにか？」

簪「……まだ《打鉄式》がないから、作るので忙しいし」

零「てことは完成すればクラスマッチに出てもいいってことだな？」

簪「……そういうわけじゃ」

零「よし。気合い入れてくか」

簪「……聞いてない」

零「《打鉄》と全然フォームが違うみたいだな」

簪「……機動力を重視した」

零「なら、この辺りのデータが使えるな」

簪「……本当だ」

零「後、俺は《山嵐》をメインでやらせてくれ。今の数の倍は増やせる」

簪「……そんなこと出来るの!？」

零「全部全く同じ物にして機体に数を勘違いさせて増やせる」

簪「……そんなこと誰も考えないよ」

零「これは俺だけがやる裏技。束さんは要領自体を増やすからな」

簪「……じゃあ任せる」

零「任せる」

――――

簪「……今日はありがとう」

零「礼はいいよ。俺が好きでやったただけだ」

簪「……じゃあ、私が好きで言っただけ」

零「そう来たか」

簪「……今日だけで3分の1も終わるなんて」

零「お前が今までやってきた分が良かったからな」

簪「……あなたのおかげ」

零「自分に自信を持てよ」

簪「……私なんて」

零「またそうやって。まあいいや。また明日な」

簪「……うん」

簪サイド

ここまで進むと思わなかった。

あのデータのおかげで全体像が掴めたし、彼の処理能力が高かった  
おかげだな。

彼のアイデアは使える物が多くて、設計の段階とは違う物になるか  
もしれないけど《打鉄式》はもっと素晴らしい物になる。

終わったらお礼しなきゃ。

零サイド

零「ただいま」

一夏「おかえり。てか何やってたんだ？」

零「クラスマッチのお楽しみ。それより今日のメニューはこなした  
のか？」

一夏「目隠しして剣道って、最近お前のメニューが鬼畜になってる  
ぞ！」

零「短期間で強くなるにはこれ位のレベルが丁度いいんだよ」

一夏「せめてメニューの意味を教えてください」

零「それくらいは自分で考えろ」

一夏「考えたけど」



零「はあー。今回は視覚以外の五感のそこ上げだ」

一夏「どういうことだ？」

零「五感の内、視覚が80%を占めている。その視覚を封じることによって触覚と聴覚を使えるようにするんだよ」

一夏「視覚だけじゃ駄目なのか？」

零「鈴のように見えない武器を使う相手や暗闇の中でどう戦う？」

一夏「気合い」

零「馬鹿」

俺がいなかったら本当にやりそうだな。

零「お前は直感に頼り過ぎだ」

逆に直感はこの手の長所でもあるんだがな。

零「あと《白式》を今度チューニングしてやるから」

一夏「色々とサンキューな」

零「気にするな」

-----

4日後

零「今日は試運転するぞ」

簪「……うん」

そう言うと簪は《打鉄式式》を展開させて飛び上がる。

原作では故障するのだが、故障するパーツは俺が整備したから問題無いだろう。

と思ったのだが、違うパーツが故障してるのは何故？

俺は《シンデレラ》を展開して飛び上がる。

簪は《打鉄式式》が解除され、落ちてくる。

楯無さんと同じ状況かよ。

零は楯無さんの時と同じように受け止める。

零「大丈夫か？」

簪「……ありがとう」

零「どういたしまして」

簪「……加速装置が故障しちゃった」

零「しょうがない。作り直すか」

簪「……無理。……もうこれを作るのに時間も材料も無い」

零「クラスマッチなら諦めても」

簪「……ダメ。……あなたがクラスの皆に頼んでくれたから、……私がクラスマッチに出るチャンスを得たんだから」

零「知ってたのか」

簪「……だから諦める訳にはいかない」

零「はあー。この手は使いたくなかったんだが、あの人に頼むか」

簪「……あの人？」

――――

3日後

今日、クラスマッチに出るのが簪がクラス代表が決まる。

零「頑張れよ」

簪「……クラスマッチに出てみせる」

零「勝ったら昼飯を奢ってやる」

簪「……じゃあ、たぬき蕎麦」

零「了解した」

簪はアリーナに出て行った。

簪は専用機持ちとして武器は一種類のみとハンデをつけている。

相手の機体は《打鉄》。アレンジが負けたら笑い者だぜ。

そんな心配は無いがな。

始まったな。

簪サイド

相手は普通に刀を出した。

なら、私はこの装備で戦う。

簪「……千刀 剣」

空中に無数の刀が現れる。

代表「何この数!？」

零くんの作った装備は数に重点を置いてる。

代表「武器は一種類だけでしょう!？」

簪「……これで一つの武器」

代表「卑去な」

そう言いながら向かってくる。

簪「……《打鉄式》自体は速さに特化している」

代表の後ろに回り込む。

簪「秘技一文字切り！」

たたっ切る。

簪「秘技十文字切り！」

そのまま浮いてる刀を取り十字に切り、ぶっ飛ばす。

簪「……終わりです」

ぶっ飛んだ先に刀が向いていて刺さり、シールドエネルギーが切れる。

『……すい』

『専用機が理由にならないほど圧倒的』

『これなら零くんが言ってたようにクラスマッチ優勝するんじゃない』

『フリーパスは私達の物』

代表「約束通り、更識さんがクラスマッチに出なさい」

簪「……えつとありがとうございます」

代表「クラスメートなんだから敬語は使わなくていいわよ。後、私の代わりに出るんだから勝ちなさいよ」

簪「分かった!」

零サイド

簪は楯無さんに劣るからと言って凡人って訳じゃない。

天才を追いかけて努力してきた人間が弱いはずがないからな。

さて、一夏と簪どちらが強くなるかな？

簪「……ただいま」

零「おめでとう。まあ、勝つって分かってたけどな」

簪「……ありがとう。信じてくれて」

零「じゃあ、飯に行くぞ」

簪「うん!」

――

零「ほら、たぬき蕎麦だ」

簪「……ありがとう」

零「どういたしまして。それじゃ、いただきます」

簪「……いただきます。……あの加速装置をくれたあの人って束博士?」

零「ああ。IS学園の学園祭は一人だけ招待出来るだろ。その招待券は束さんに渡すって約束で」

簪「……そんなので?」

零「束さんにとって、世界は俺、一夏、箒、千冬さんで出来てんだよ。この4人がいる学園の学園祭なんて最高のイベントだから」

簪「……篠ノ之さんは誘わないの?」

零「あの2人は上手くいつてないんだよ」

簪「……上手くいつてない」

零「箒も束さんのことが好きはずなのにな」

簪（私とお姉ちゃんと同じ）

零「俺は昔のように仲良くしてほしいんだが。てか、束さんの相手を二人分するのはキツイ」

簪「……その2人は素直になれば上手くいくの?」

零「イレギュラーがあるから分らない」

簪「……イレギュラー？」

零「あつ、忘れてくれ。この話はこれで終わりだ。そろそろ戻らないとな。さっきの時間は無理言つてそっちのクラスに行かせてもらったからな」

簪「……《打鉄式式》が完成したからもつ来ないの？」

零「友人には会いに来るんじゃないか？」



## クラス対抗戦（前書き）

駄文だ。

## クラス対抗戦

クラス対抗戦当日

零「一夏。訓練の成果はどうだ？」

一夏「目隠しでの剣道は効いたな。相手の攻撃くらいなら見ないでも分かる」

零「お前は相変わらず飲み込みが早いな。間に合うとは思わなかった」

一夏「出来ると思ってたのかよ！」

零「だってあの訓練は段階を踏んでから行つ訓練だぜ」

一夏「そんなのやらせるなよ！」

零「だから残り2日はその訓練止めただろうが」

一夏「そこに入ってきたのが千冬ねえとの剣道だろうが！」

零「千冬さんの攻撃と衝撃胞どっちの方が恐い？」

一夏「千冬ねえ」

零「即答かよ。まあ、そういうことだ。負けたら千冬さんと一ヶ月間剣道してもらっからな」

一夏「死ぬは！」

零「大丈夫。その言葉を吐いて死んだ奴を見たことないからな」

一夏「根拠になってねえよ！」

零「俺はそろそろ行くぞ。勝ってこいよ」

一夏「またどっか行くのか？」

零「友人を応援しに」

一夏「最近そいつばっかだな」

零「なんだ。妬いてんのか？」

一夏「そ、そんなわけないだろ」

零「俺ばかりお前と話してたら他の奴らに悪いしな」

一夏「ん？」

零「分からないならいい」

――――

一夏サイド

初戦の相手が鈴か。

あいつの機体はこうりゅうと呼ぼう。あの一つしか願いを叶えてくれないくせして、最後の方ではその願いは出来ねえとか言う龍と同じ名前だからな。

鈴が怒ってるのは俺のせいだし、謝っておくか。

一夏「なあ、り」

鈴「一夏。死なない程度にぶっ飛ばしてあげるわ」

どうやら言葉は通じないようだ。

『それでは始めてください』

俺の《雪片式型》と鈴の《双天牙月》が交差する。

鈴「私の攻撃をさばくなんてやるじゃない」

一夏「師がいいんでね」

鈴「そう。なら、これならどう？」

何か来る！

ヒュッ！

俺は見えない攻撃が来る前に飛翔した。

俺が元いた場所を衝撃が通過する。

鈴「避けられた!？」

一夏「確かにその攻撃は見えないが、肌や耳でどんな物なのか分かる」

鈴「私が居ない間にあんた一体どれだけ成長したのよ」

一夏「お前に勝てるくらいかな」

鈴「言ってくれるじゃない」

一夏「事実だからな」

鈴「それじゃあ」

一夏「ああ」

一夏・鈴「行くぞ（わよ）!」「」

鈴は衝撃胞を放つ。

俺はそれを避けながら間合いを詰めていく。

俺の攻撃が届く瞬間、《双天牙月》でそれを受ける。

一夏「ちっ」

鈴は距離をとって、衝撃胞をまた撃つ。

一夏「それは効かねえよ!」

鈴「そうみたいね」

その瞬間、衝撃胞と違う物が飛んでくる。

あれは《双天牙月》！？

《双天牙月》はブーメランのように戻ってくる。

このままじゃ当たっちゃうか。

なら、これで決める！

鈴「イグニッションブースト！？」

一夏「俺の勝ちだ！」

俺は《雪片式型》で鈴をぶった切る。

『勝者一年一組織村一夏』

一夏「うっし」

鈴「負けちゃったか」

一夏「それじゃ、お前の作った酢豚食わせろよ」

鈴「その約束」

一夏「ちゃんと思いだしたぜ」

鈴「遅いわよ。バカ一夏」

――――

## 決勝戦

一夏「まさかここまで勝つなんてな」

鈴「私に勝ったんだから当たり前よ」

『フリーパスまであと一勝』

『相手も専用機持ちの4組の更識簪さんだつてよ』

『お姉さんのおかげでの専用機でしょう?』

『いや、それが本当に強いらしいよ』

セシ「相手は強いみたいですが、頑張ってくださいね。一夏さん」

第「一夏、油断するなよ」

一夏「おう。任せろ」

鈴「そういえばあんたの兄弟の零だっけ?さっきから見えないみたいけど」

第「一回戦が始まる前に見たつきりだな」

一夏「友人に会いに行くんだとよ」

セシ「そういえば零さんは最近四組に出入りしていると聞きました」

鈴「もしかして四組の更識簪のことを応援しに行ったんじゃないの？」

一夏「何!？」

俺じゃなくて他の奴の応援？

一夏「よし。殺ろう」

セシ「篠ノ之さん。一夏さんてもしかして」

第「そうだ。零が過保護なら、一夏はベツタリだ」

鈴「私達の一番の敵って零なんじゃ」

3人が何か言ってるが知るか。

簪を倒して零を殺ろう。

-----

『両者前に出てください』

簪「……あなたが織村一夏」

一夏「勝たせてもらっぜ」



簪「……私にはあなたをはたく権利がある。でも、それは試合です」

『決勝戦始め』

一夏は《雪片式型》、簪は《千刀剣》を出す。

2人は攻撃がぶつかる。

一夏（数が多すぎる）

簪「……数だけだと思ってるでしょ？」

簪はそう言つと俺の後ろに回り込む。

簪「……《打鉄式式》は速さもある」

一夏はそれを避ける。

一夏「悪いな。見切りと避けることは徹底的に零にたたき込まれたからな」

簪「くつ。……なんであなたばかり。……ISも彼だつて」

一夏「彼？」

簪「零くんはあなたの応援に行つたんでしょ」

一夏「どういうことだ？」

千冬『試合中止だ！早く戻れ！』

その瞬間、4つの影が空から降ってくる。

その中の1つは、

一夏・簪「零<sup>くん</sup>！」「

零「悪いな。すぐに片付けるから、決勝戦続けてくれ」

――――

零サイド

一夏と別れた後

簪「……零くん」

零「今日は頑張れよ」

簪「……うん」

零「お前と一夏はどっちが強いんだろうな」

簪「……私と零くんが作った《打鉄弐式》があれば負けない」

零「えらく強気だな。なら、優勝したらまたたぬき蕎麦を奢ってやるよ」

簪「……じゃあ、約束」

簪は小指を出す。

零「ああ。約束だ」

簪「指切りげんまん嘘ついたら《千刀剣》飲ーます。指切った」

零「そんなことしたら死ぬは!？」

簪「……だから破らないでね」

零「分かったよ。俺はちょっとやることいくな。結果楽しみにしてるぞ」

零は出ていく。

簪（織村一夏の応援に行っただろうな）

――

アリーナ上空

零サイド

さーて、《ゴーレム》を倒して一夏と簪の応援しますか。

来た来た。

降ってきた《ゴーレム》は張ってあった《カーニバル》に引っ掛か

る。

零「おい。ちょっと遊んでだよ」

《ゴーレム》はこちらに体を向ける。

零「まあ、速攻でスクラップだけだな」

《マンイーター》を《カーニバル》が補助する。

零「《一喰い（イーティングワン）》！」

《ゴーレム》の右半身が消し飛ぶ。

零「さて、応援しに行きますか」

次の瞬間、また《カーニバル》に何か引っ掛かる。

零「おいおい。マジかよ」

引っ掛かっていたのは、

零「こういう時は多くても3体くらいだろ。普通」

《ゴーレム》6体。

零「応援は無理そうだな」

――――

現在

零サイド

零「悪いな。すぐに片付けるから、決勝戦続けてくれ」

一夏「何言ってんだ！ボロボロじゃねーか！」

零「さすがにアリーナに行かせないようにしながら6体相手はきつかったわ」

簪「なんでそんな無茶を」

零「だってお前らクラス対抗戦を目標に頑張ってたじゃねーか」

一夏「そんなことの為に」

零「そういう訳で試合を続けてくれ」

一夏・簪「バカ！」

零「え？」

一夏「決勝戦なんて知るか！俺はお前と一緒に戦う」

簪「私はあなたに助けられた。だから今度は私の番」

零「……俺もバカだが、お前らも充分バカだ」

一夏・簪「ああ（うん）」

零「じゃあ、一人一体だ。無人機だ。手加減の必要はない」

簪「無人機？そんなの絶対にありえない」

零「絶対なんてことは絶対にない。俺と一夏も絶対にありえない存在だぜ」

一夏「確かに」

第《3人共！これくらいの敵を倒せないでどうする！》

零「だってよ」

一夏「じゃあ行きますか」

簪「無茶はしないで」

――――

簪サイド

簪「……あなたが私の相手」

《ゴーレム》一体と向き合う。

簪「……すぐに終わらせる」

簪の前に盾の形をした発射口が現れる。

その数、

簪「零くんが《山嵐》を元に作った《断片集》<sup>フラグメント</sup>は1つから9発。発射口が12機。計108発。あなたはこれに耐えきれる？」

追尾ミサイルが発射される。

その状況はシューティングゲームの無理ゲー状態。

《ゴーレム》はそのミサイルの雨に飲み込まれる。

全てを撃ちおわった後に残ったのは鉄屑だった。

簪「火力が強すぎですね」

――――

一夏サイド

一夏「3年前と同じように俺は守られた。俺はいつも守られてばかり」

一夏も《ゴーレム》と向き合う。

一夏「俺が編み出したみんなを守る為の新技を効いてけよ」

《零落白夜》を発動する。

一夏「日の光と化し、静かに翔る」

《白式》がイグニッションブーストを使い分身して同時に《ゴレム》を攻撃する。

一夏「《デマソング光化静翔》アコースティックバージョン」

《ゴレム》がバラバラになる。

一夏「レクイエムになっちまったな」

—————

零サイド

零「はあー。原作を壊し過ぎたせいでこんな事になっちまったよ」

《ゴレム》は大剣を出し、向かってくる。

零「だから、尻拭いは自分でやろうと思ったんだけど」

直線上にいくつか円型に設置した《カーニバル》が向かってきた《ゴレム》に押されるように一緒にくる。

零「まあでも」

《カーニバル》の円は数を増すごとに小さくなっていく。

零「俺的必殺」

零は小さくなった円を殴る。



零「問答無用拳」

《ゴーレム》は止まる。

零「あいつらに助けてもらったのも悪くないな」

## 「巻エピソード」(前書き)

今回は短めかな？

## 一巻エピソード

零サイド

やっと取り調べ終わったよ。

誤魔化すのスッゲー面倒くさかった。

今回は戦利品があるから大目に見るけど。

千冬「零」

零「千冬さんでしたか。ビックリしましたよ」

千冬「いくつか聞きたいことがある」

零「またですか。取り調べで疲れてるんですから短めにしてくださいよ」

千冬「すぐに終わる。お前はISの乱入があることを知っていたな？」

零「ええ。一体だけだと思ってましたがね」

千冬「犯人も知ってるな？」

零「登録されてないコアの時点であの人でしょ」

千冬「まあ、そうだな。そのコアは本当に全て破壊したんだな？」

零「破壊しないと面倒なことになりますからね」

千冬「最後だ。一夏と更識簪のレベルがはね上がっている。お前は  
何をした？」

零「別に。一夏には稽古、簪にはISを与えただけですよ」

千冬「お前の息がかかった者は力を手に入れるということか？」

零「それは買い被りですよ。そこまで言うなら地下で行ってる千冬  
さんの専用機の作成を手伝いましょうか。IS世界王者さん？」

千冬「何故お前がそれを知っている？」

零「さあ、さっきの質問で最後だったから答える気はありません」

千冬「答える。命令だ」

零「拒否します」

千冬「本気のような」

零「家族のことをちゃんと喋るなら考えてもいいですよ」

千冬「なら、いい」

零「それじゃあ、これで」

千冬「待て。これだけは答える。お前は何がしたいんだ？」

零「俺はね、千冬さんより束さんに近いんですよ。束さんが俺達4人なら、俺は気に入った人間。それだけあればいい」

千冬「気に入った人間」

零「俺にとって気に入った人間以外はモブキャラです。しかし、気に入れば敵だろうと構わない。それが俺です」

千冬「分かった。もう行け」

零「本当に分かったんですかね？」

零は帰っていく。

千冬サイド

零の奴は何を考えてるんだ？

束と同じいや、それ以上に分からない。

山田「織村先生。やはりあのコアは登録されてない物でした」

千冬「そうか。ありがとう山田くん」

山田「いえいえ。そのコアですが3つとも修復不可能です。零くん凄いですね。コアだけを器用に破壊するなんて」

千冬「確かに凄いな。やろうと思えばISに関係なく人体を壊せるんだから」

山田「織村先生それって」

千冬「気にしなくていい。アイツはそんな手段は選ばないだろうかな」

山田「そ、そうですね」

そんな手段をとる状況なんて私が作らせない。

――――

零サイド

あんな伏線っぽいこと言わない方が良かったかな？

千冬さんに嫌われたかな？

はあー。ちよつと調子乗り過ぎた。

やっちゃった物はしょうがない。

今現在を楽しむとしよう。

零「おーい。待たせたな。一夏に簪」

一夏「お前が一番取り調べ長かったな」

簪「倒した数が多かったからしょうがないよ」

零「それじゃ飯に行きますか。奢ってやるぞ」

一夏「よし！今日は豪勢に行こう」

簪「私はたぬき蕎麦で」

零「了解した」

こんな日々に満足してるしな。

転校生（前書き）

織斑の斑を間違えました。

すいません！

今回はアンケートします。

零のヒロインにシャルかラウラを加えます。

どちらか選んでください。



## 転校生

零サイド

クラス対抗戦前と千冬さんの態度は変わらなかった。

ぶっちゃけ千冬さんに嘘をついたのだが、ばれてはいないようだ。

実はコアを2つほど回収してある。

片方はバラして構造を調べますか。

千冬「全員席に着け」

千冬さん登場。

千冬「今日は2人転校生を紹介する」

2人入ってくる。

千冬「自己紹介しろ」

ラウラ「分かりました。教官」

千冬「織村先生と呼べ」

ラウラ「はい！」

返事はいいみたいだな。

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

山田「……………それだけですか？」

ラウラ「以上だ」

千冬「はあ、もういい。ボーデヴィツヒ席に着け」

そう告げるとラウラは一夏の前に来て、

手を振りかざした。

ガシッ！

零「お前弱いな」

ラウラ「なっ！？」

俺はラウラの手を掴む。

零「俺がいる限りは一夏に手を出させないよ」

ラウラは手を振りほどくとポケットからナイフを出して俺に向けるが、

零「良いナイフだが、量産された物には興味無い。オーダーメイドを使え」

零は一瞬でナイフを取り上げる。

ラウラ「くっ。私はそいつが教官の弟と認めない！」

ラウラはそのまま自分の席に行ってしまった。

一夏「サンキューな」

零「気にするな」

山田「き、気を取り直してデュアノくん自己紹介をお願いします」

シャル「はい。シャルル・デュアノです。この学園に僕と同じ境遇の人がいると聞いてやって来ました」

『きゃーーーーーっ！』

『3人目の男子よ！守ってあげたくなる方の方！』

『お父さんお母さん。産んでくれてありがとう』

クラスの死んでいた空気が復活する。

上条さん。俺にはあんたみたいに俺の右手には幻想をぶち殺す力なんて宿ってない。

だがな、俺の運命はこの右手で切り開く！

行っけーーーーー！

まずはその原作をぶち殺す！

パリーン！

じゃなくてムニユツ！

シャル「へっ？」

零「男の格好してるけどやっぱり女じゃん」

シャル「キャー――――！！」

ドカツ！

零「グハッ！」

ボカスカボカスカ！

零「えっ？嘘！ちよつと待って！」

バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
！

効果音じゃ分かりづらいと思うので説明します。

零がシャルの胸を揉む。

シャルに殴られる。

千冬さんと山田女史が殴る蹴るに参加。

どこから現れた更識システムがISの武器で攻撃。

って死ぬ！？

さすがにISの攻撃は危ないので《シンデレラ》を展開する。

零「ISを人に向けちゃダメだろ！死ぬは！」

千冬「そんなことよりデュアノ、さっきのは本当か？」

零「俺の生死がそんなことで片付けられた！？」

シャル「うつ」

千冬「本当なんだな。零、なんで分かった？」

零「はあー。筋肉のつき方見たら男か女分かるでしょう」

全員（普通は分かんないから）

千冬「どうしてこんな事をした？」

シャル「え、えっと」

零「多分、家のことが関係してんじゃないの。確かデュアノ社の社長には子供がいなかったはずだから、シャルルは養子が隠し子だろ」

シャル「君、一体何者？」

零「紛い物かな？」

千冬「こいつの事は気にするな。理不尽が服を着て歩いてるような物だからな」

零「その表記は酷くないすか？天然チートさん」

シャル「君の言う通り僕は隠し子だよ」

零「話を聞くのは千冬さんだけでいいだろ。聞かれたくない話だろうし」

千冬「そうだな。一時間目は二組、四組と合同でアリーナでISの訓練だデュアノ以外は移動しろ」

零「デュアノ、IS学園は他国から干渉を受けない。家との関係を考えるのに3年ある。それにお前が望むなら出来るだけ力になるぞ」

シャル「うん」

-----

アリーナ

鈴とセシリアが前に出るように言われた。

セシ「鈴さんが相手ですか？」

鈴「別に誰が相手でも構わないけど」

零「多分違うな」

一夏「じゃあ、誰だ？」

零「もう少し経てば分かる」

お前の上に落ちてくるからな。

山田「ど！どいてくださいーい！」

ほら来た。

一夏「零、危ないぞ！」

零「へっ？」

次の瞬間山田女史の下敷きになる。

原作と違うだと！？

さつき女だとバラしたのはやり過ぎたか！

っーか、息が出来ない。

山田「零くん。息を当てないでください」

その山2つをどかしてくれ！

零「んー！んー！」

酸素をくれ！

簪「何をしてるかな？」

簪は《打鉄式式》と《千刀剣》を展開し、数本を投てきした。

山田「零くん危ない！」

山田女史は横になった状態でライフルを出し、全てを打ち落とす。

簪「えっ！？」

零「やつと空気が吸える！」

死ぬかと思った！。

バシン！

千冬「貴様は何をしてる？」

零「不幸だ」

鈴「どちらが先に山田先生と戦うんですか？」

千冬「2人同時にだ」

セシ「それはちょっと」

零「やってこいよ。結果が見えてるし、一夏にいい所を見せられるぞ」

セシ「そうですね！」



鈴「行くわよ！セシリア！」

セシリアと鈴がヤル気になって山田女史の前に立つ。

千冬「煽るな。バカ者」

零「いいじゃないですか。教師の力を見せるいい機会だし」

一夏「どういうことだ？」

零「山田女史が勝つて言うてんの」

一夏「二対一だぜ」

零「乗ってる年数はそのまま力だぜ。それに山田女史は日本の元代表候補生だ」

千冬「その通りだ」

零「一夏、試験の時はラッキーだったな」

一夏「あの試験官って山田先生だったんだ」

話し終えた時には決着がついていた。

零「やっぱ、結果は予想通りだな」

鈴とセシリアは倒れている。

山田「いやー。久しぶりに動かした楽しかったです」

簪「あの、私とも模擬戦をお願いしていただけませんか？」

山田「織斑先生」

千冬「いいんじゃないか」

零「俺も見てみたいな」

山田「じゃあ、やりましょうか」

簪「はい」

簪（零くんがいい所見せなきゃ）

簪と山田女史は空に上がる。

零「最近、簪も積極的になったな。なんでかな？」

一夏「相変わらず酷いな」

零「へっ？」

模擬戦が始まる。

千冬「どちらが勝つと思う？」

零「この戦いは分かりません。速さと量対経験と正確さ。どっちも甲乙つけがたいですからね」

つーか、山田女史の機体、装備だけでいいからいじくりたい。

今度、提案しよ。

この戦いの結果は山田女史が僅差で勝利した。

ラウラ「教官。私も模擬戦をしたいです」

千冬「相手は？」

ラウラ「織斑零でお願いします」

千冬「却下だ」

ラウラ「何故ですか!？」

千冬「お前じゃ勝負にならないからな」

ラウラ「納得いきません!こんな平和ボケした国に教官がいること事態間違ってます!」

零「だからお前は弱いんだよ」

ラウラ「貴様!」

零「そんなにやりたきゃ相手してやるよ。今度の大会で相手してやるよ」

ラウラ「分かった。その首洗って待ってる!」

零「お前じゃ傷一つつけられねーよ」

## 五反田弾（前書き）

今回は結構適当です。

アンケートがまだ一票しか来てません！

お願いします！

誰でもいいので感想に入れてください！

## 五反田弾

昼休み

篤「どうしてこうなった」

一夏「飯はみんなで食った方が上手いだろ」

ドンマイ篤。

シャル「僕まで参加させてもらって良かったのかな？」

零「問題無い。それより話はどうなったんだ？」

シャル「まだ考えてる途中だよ。君が言った通り時間はあるみたいだしね」

零「零でいい。お前が望むならデュアノ社を倒産させても構わない」

シャル「そ、そんなことしないでいいから！」

零「なんだ。つまらん」

シャル「それと、僕もシャルロットでいいよ」

零「了解した」

シャル「そつだ。僕お弁当無いから購買で買って来ないと」

零「それなら一夏の分をやろう。一夏、お前は箒辺りから分けてもらえ」

シャル「そんなの悪いよ!」

零「一夏、いいだろ?」(空気を読め)

一夏「しょうがないな」(久々の零の弁当が)

零「本人も了承してるぞ」(今日は俺が飯を作ってやるか)

シャル「ありがとう」

零「というわけで、箒分けてやれ」(これでいいだろ?)

箒「ま、まあそういうことならしょうがないな」(悪い。恩にきる)

全く手のかかる妹を持ったぜ。

セシ「なら、私のサンドウィッチもどうぞ」

鈴「酢豚あげるわよ。約束だったし」

2人は積極的だな。

簪「零くん。デザート作り過ぎちゃったから食べる?」

零「ん、悪いな」

簪「どういたしまして」

零「おっ 美味しいな」

簪「それは良かった！」シャル「みんな仲がいいな。僕もこれ食べよ」

パクッ

シャル「な、何これ!？」

零「口に合わなかったか？」

シャル「ううん。こんな美味しい物食べたことない」

鈴「そんな大袈裟な」

パクッ

鈴「死んでもいいかも」

一夏「零は味にうるさいからな。自分で作る物に一切の妥協をしないからな」

セシ「じゃあ、私も一口」

第「食べない方がいいぞ。傷つくから」

結果、女子全員傷ついた。

――――



零「てなこともあった」

弾「お前らは相変わらずハーレムしてるな」

零「それは一夏だろ」

一夏「いや、零だろ」

弾「お前らいつか刺されるぞ」

零「返り討ちにするから大丈夫だ」

弾「お前なら本当にやりそうだな」

蘭「おにいー！早くって一夏さん！？」

一夏「おじゃましてるぞ蘭」

零「一応、俺もいるからな」

蘭「あつすいません。零さん」

蘭（なんで教えてくれないのよ！）

弾（い、言ってなかったか？）

弾が怯えてる。

零「そんじゃ飯食っちまおうか」

弾「そ、そうだな」

1階で昼飯が来るのを待っている。

零「そっぴや昨日に筭が喜んでたけどなんかあったか？」

一夏「今度の大会で優勝したら買い物に付き合っつて約束したんだよ」

零「はあー。報われねえな」

弾「大体は予想がつく」

一夏「????」

蘭「お待たせしました！」

一夏「ん？着替えたのか蘭？」

蘭「はい」

一夏「どっか出かけるのか？」

蘭「え、えっと」

一夏「ああ。デートか」

何故そうなる！？

蘭「はあー」

零「弾にとっては安心か？」

弾「ああ」

ギロ！

千冬さんと同じ殺気を感じる。

## 鈴&セシリア強化（前書き）

今回も適当です。

アンケートにシャルルとラウラの2人がいい。という物があつたのですが、2人ともがいいと思う人が5人を越えたら2人とも加えようかと思っています。

もうアンケートに答えてくれた人も2人ともがいいと思う人は感想に入れてください。

## 鈴&セシリア強化

セシリアサイド

わたくしは今までずっと一番でしたわ。

それはこれからも変わらないことだと思ってました。

ですが、この学園に来て自分がどれだけ無力なのか分かりましたわ。

だから、

鈴サイド

一夏との戦いの時、一夏に手加減された状態で負けた。

山田先生には代表候補生のセシリアと一緒に戦って負けた。

その山田先生と簪は接戦だった。

足手まといになるわけにはいかない。

なら、

セシ・鈴「強くなりたいです！」

零「ん、なればいいんじゃないの」

セシ「えっと、強くなりたいんですけど」

鈴「本気で言ってるのよ」

零「だから、勝手に強くなればいいじゃん」

鈴「ここは零が強くしてくれるんじゃないの？」

セシ「そうですね。一夏さんや簪さんの時みたいにメニューを決めて」

零「じゃあ、こんな感じあでいい？」

――――

零サイド

三日後

零「いやあ、お前らよく俺のメニューをクリアした。これで一夏達にも近づいたぞ」

鈴「どこがじゃー!」

セシ「三日後ってなんですよ!まだ3分も経ってないじゃないですか!」

零「ちっ」

鈴「今、舌打ちしたわね!」

零「だって面倒なんだもん」

セシ「ズルいですわよ！一夏さんと簪さんには訓練したのに」

零「一夏は二年前から土台を作ってあつたし、簪の場合はISをいじくっただけで他に何もしてない。お前らは他国の代表候補生だからISを勝手にいじくれないだろ」

鈴「うつ」

セシ「確かに」

零「文句があるならISをいじくってやりから、その許可を国からとってこい。まあ、次の大会には間に合わないと思うけど」

鈴「それじゃ、意味ないわよ」

セシ「次の大会じゃなきゃ」

零「優勝したら一夏と付き合えるからか」

鈴・セシ「！！！！」

零「凶星かよ」

鈴「で、でも、それが無くても強くなりたいのは本当」

セシ「わたくしも強くなりたいですの」

零「はあー、少しくらいは実力を上げるメニューを考えてもいい」

セシ「本当ですよ!」

鈴「嘘じゃただじゃおかないわよ!」

零「本当だよ。だが、力と強さは別物だということを忘れるなよ」

セシ「はあ」

鈴「一応、忘れないわ」

零「それじゃ、セシリア」

セシ「なんですか?」

零「お前はどっち効きだ?」

セシ「右利きですよ」

零「じゃあ、まず右手で箸を使ってパチンコ玉1000個を器からもう片方の器に移せ。それが終わったら左手でも出来るようにしろ」

セシ「な、なんですかそれ!?」

零「お前専用のメニューだよ。文句があるならやらなくてもいいけど」

セシ「分かりました」

零「鈴はこのゴーグルを大会までつけておけ」



鈴「ダサッ！」

零「どんなことがあっても外すな」

鈴「分かったわ」

零「それじゃ頑張れよ」

## 大会前（前書き）

アンケート終了です。

結果2人ともになりました。

アンケートに参加してくれた方ありがとうございました。

## 大会前

鈴サイド

これつけて3日になるけど意味あんのかしら？

確かに視界が悪いけどそれだけなのよね。

『ダッシャアアーーーーー！』

鈴「いきなり何！？」

後ろから襲い掛かってきたクラスメイトに蹴りをかます。

『居たわよ！』

一組の生徒が大勢で追いかけてくる。

鈴「どういうことよ！」

一夏「鈴！」

走った先に一夏が立っている。

一夏に助けてもらおう。

鈴「一夏、たさ」

一夏「ゴーグルをよこせ！」

一夏が飛びかかってくる。

鈴「あんたもか!？」

向きを変えて女子トイレに入る。

一夏「待て!」

箒「待つのはお前だ一夏」

一夏「箒さん？」

箒「お前が入ろうとしたのは女子トイレだ」

一夏「反省してます」

箒「問答無用」

ズドン!

一夏脱落。

箒「さて、鈴。ゴーグルを渡してもらおうか。

零の弁当のために」

鈴「はあ？」

第「零の弁当が美味いと広まってしまったから食べたいという生徒が続出してな。今日中に鈴のゴーグルを持ってきた一年生に作ってやると言ったからな」

ブルブル

鈴「はい」

零「頑張ってる？」

鈴「あんたどういづつもり！」

零「そろそろ文句言ってる頃かなと思ったからな」

鈴「あんたはエスパーか！」

零「というわけで訓練ばくしたわ。じゃ、そういづつわけで」

鈴「待ちなさいよ！」

ガチャン！

鈴「切りやがった」

第「覚悟！」

鈴「分かったわ！逃げ切ってやるっじゃない！」

セシリアサイド

3日もかかってたった7個。

こんなので終わりますの？

わたくしがこんな簡単なことが出来ないなんて。

プルプル

セシ「はいですの」

零「どれくらい進んだ？」

セシ「も、もう少しで終わりますの」

零「そうか。俺はてつきり3日たったのにまだ一桁しか終わってないのかと思ったんだが」

セシ「あなたどこかで見てるでしょう！」

零「まさか本当に一桁？」

セシ「悪いのですの？」

零「やめるか？」

セシ「誰が！わたくしに出来ないわけありませんの！？」

零「ならいいが」

セシ「もういいのですの？」

零「ああ」

ガチャン

絶対にやってみせますの！

ラウラサイド

アイツは何者なんだ？

私が弱いだと？あり得るはずがないだろ。

教官に認められてる人間。

アイツを倒せば教官に認めてもらえる。

早くアイツと戦いたい。

シャルサイド

零は私が女だつてことを見抜いた。

零は僕が今まで迷っていたことに答えをくれた。

僕は父さんと縁をきる。

無一文になるし、専用機も取り上げられてしまつかもしれない。

でも、零に困ったら頼っていいって言われしね。



## 大会一回戦（前書き）

駄文過ぎる。

更新遅れまくってるし。

ネタ切れしそう。

## 大会一回戦

零サイド

一夏「零、優勝するぞ」

零「当たり前だ」

つーか、優勝しないとお前に彼女が出来ちまうからな。

数日前からその噂で持ちきりだしな。

ペアで出るのは原作通り。

専用機持ちの組み合わせは、

俺と一夏の男子ペア

鈴とセシリアの代表候補生ペア

箒と簪の天才の妹ペア

シャルロットとラウラの転校生ペア

はっはっはっはっ！

後ろの2つは予想外過ぎるだろ。

相変わらず原作通りにいかねえな。

箒と簪は知らないうちに仲良くなってたな。

聞いてみたら姉のことで意気投合したそうだ。

ラウラはペアになる奴がいなかったみたいで、それを見てシャルロットがペアになったみたいだな。

シャルロット優等生過ぎる。

この4ペアが優勝候補。

専用機持ちだから当たり前か。

さて、俺達の一回戦の相手はモブキャラ。

他の3ペアも一回戦はモブキャラらしいな。

速攻で終わらせちゃいましょう。

『始めてください』

一夏「『テーマソング』」

一夏が開始と同時に1人倒す。

モブ「早っ!？」

零「そんじゃ俺も」

モブ「くっ」

バババババババババ！

零「技使つのもめんどくさい」

乱射してぶっ倒す。

モブ「酷い」

『勝者織斑ペア』

圧勝！

鈴＆セシリアサイド

セシ（ビットの操縦と射撃が同時に出来るなんて）

セシリアの弱点だったビットの操縦時動けないというのは零の訓練で解決。

モブ「なんで後ろにいるのにそんな攻撃が当たるのよ！？」

鈴（あのゴーグルを外したら真後ろまで見える）

鈴の訓練はゴーグルは視野を広げること、おい駆けっこは相手の動きを予想すること。

零（鈴の衝撃胞はノーモーションで射てるからな）

鈴＆セシ「終わりよ（ですわ）！」

『勝者鳳＆オルコットペア』

箒＆簪サイド

モブ「早く倒して援護して！」

モブ「同じ量産機なのになんでこんなに強いのかよ!？」

箒「確かに私は専用機持ちじゃないし、IS適性もCだ」

簪「でも、箒は純粹に劍の腕は私より数段上」

箒は簪の『千刀劍』を使って切る。

箒「刀を使えばお前らごときには負けん」

『勝者篠之野＆更識ペア』

零サイド

全員一回戦は勝ち上がったみたいだな。

シャルロットとラウラは普通に一对一してチームワークなんて無かったのは残念だな。

ラウラ倒したら大会が潰れるし、あそこまで言ってやられるわけにいかないよな。

どうすっかな。

てか、一夏がそもそも相手するはずだったのになんで俺が戦うことになってんだっけ？

はあ、俺って自分から問題に突っ込んでるみたいだ。

## 誘拐（前書き）

久しぶりに満足出来る物が出来ました。  
良かったら読んでください。

## 誘拐

零サイド

2 回戦目もモブキャラで速攻で終わったぜ。

おっと、メールが来てるな。

From シャルロット

本文 たすてけ

???

たすてけ？

ちょっと待て、見たことあるぞ。この文章。

確かあれはバカテスの世界の雄二からのメールで、

ああ、助けてって送ってたのか。

助けて？なんか嫌な予感がある。

調べますか。

学園の監視カメラにハッキング！



犯罪とか言つなよ。緊急事態なんだから。

メールが来た時間から予想すると……………発見！

スタンガンで気絶させられてるよ。

誘拐かよ。

俺の仲間に手出してただで済むと思ってんのかね？

シャルロットサイド

シャル「うつ」

目を覚ますと暗い倉庫の中だった。

確か、怪しい奴らが追ってきたから零くんにメールを送って、その後気絶させられたんだ。

????「気付いたか」

シャル「あつ、あなたは!？」

零サイド

うぜえな。

足止めにIS持ち出してくるなんて。

しかも、数が多いし。

敵「これだけの人数だ！量産機だが、やれるぞ！ひるm」

ドカン！

喋ってる奴をぶっ倒す。

[illegible]

両腕に《カーニバル》をつけて、《暴飲暴食》を使う。

零「よし決めた！もうこの技しか使わないでやるから三下共、無様に敗者復活戦でもしてみやがれ！」

この時、零を相手にしたことを後悔した。

十数分後

ちっ、  
量産機に時間かけ過ぎた。

数が50機つてどんだけいんだよ。

「つか、こいつら全部デュノア社製ってどういうことだよ。」

シャルロットサイド

シャル「父さん！？どうしてここに！？」

父「お前が使えないからに決まってるだろ」

シャル「今度は何をさせる気なんですか？」

父「女だとバレてしまったならしょうがない。時期が早まったが、2人の男子のどちらかとくっつけ」

シャル「早まったって、始めからそのつもりだったのですか！？」

父「当たり前だろうが。次は失敗するなよ」

ドン！

零「野おおおお原ああくううううううううん！」

父「何！？」

シャル「零くん！」

父「バカな！ISを持たせた部下がいたはずだぞ！」

零「演出ご苦労野原くん。そいつならスクラップになってんよ！」

父「どれだけの数を用意したと思ってるんだ！？」

零「本当にどれだけ居たんだ？数が多過ぎて途中から数えんの辞めたし」

父「ふざけるなよ！100機は用意したんだぞ！」

零「シールドエネルギーも3分の1しか残ってねーし」

「???」良いこと聞いたわ」

父「そ、そうだ。頼むぞ！」

零「てめえは？」

シャル「義母さん」

義母「泥棒猫の娘が私を義母さんなんて呼ぶんじゃないよ！」

シャル「うつ」

零「どんだけドロドロしてんだよ。これなんて昼ドラ？」

義母「ちようどいいわ。あんたを連れてって泥棒猫の娘と結婚させれば、会社の株が上がるわ」

零「マジでこれなんて昼ドラ？」

義母「私は他のと違って専用機よ。いくら学園最強のあんたでもそこまで弱ってたら「バカかこの三下は？」何よ！」

零「確かに俺は戦い過ぎて弱ってるよ。一夏に挑んだら負けちまうくらいにな。だがな、そんだけ俺が弱っていたとしてもお前が強くなったわけじゃねーだろうが！」

義母「ひつ」

[illegible]

義母「この！」

デュノア義母は抵抗として発泡するが弾は全て作り出した両腕に掻き消されていく。

零「ここから先は一方通行だ！尻尾巻きつらえて元居た場所に帰還しやがれ！」

義母を壁を破るだけの力でぶっ飛ばす！

ちゃんとコアは回収したぜ！

零「さーで、残るはてめえだけか」

父「く、来るな！それ以上近づいたらこいつを撃つぞ！」

零「自分の娘を人質つて、  
 どんだけ腐つてんだよ」

シャル「僕に構わないで！」

「父、いなかじ！」

ゴツン

デュノア父は拳銃のグリップでシャルロットを気絶させる。

父「ISの展開を解け」

零「分かったよ」

俺はISの装甲を解く。

どこから綺麗な音楽が聞こえてくる。

父「な、なんだこの音楽は？」

零「俺から一曲プレゼントだ」

父「止める！でないと」

零「でないと、どうするんだ？」

父「こいつをk」

デュノア父の身体がいきなり動かなくなる。

零「作曲 織斑零 作品No.121 『砂場』」

この倉庫に入ってきた時から羽の数枚から超音波を送り続けていて、装甲を解いた時もいくつか羽を見えないように残していた。

その超音波とこの音楽の能力は脳内干渉。

父「身体が動かない!？」

零「お前の身体の支配権は俺に移った。シャルロットは返してもら  
うぞ」

零はデュノア父から気絶しているシャルロットを抱き上げる。

零「てめえ、さっき娘のこいつに殺すとか言っただよな」

父「そいつは俺の子供だ!しかも、本妻の子供ではないんだ。俺が  
どうしようとかっ」

零「うるさい。黙れ。自分の子供に殺すだど?親は子供に生き抜け  
って言うもんだろが!(Byひろし)」

さっきデュノア義母をぶっ飛ばした方向にぶっ飛ばす。

ブルブルブルブル

零「俺だが」

「???」はい。零さん今日はどんなご用件でしょうか?」

零「後片付けを頼む。デュノア夫妻が――の地点にいるからモル  
モットにしてくれ」

「???」『了解しました』

零「他の奴らは記憶をいじくったらどっかに放置しておけ」

「???『珍しいですね。あなたがそんな甘い指示するなんて』」

零「あまり目立ちたくはないからな」

「???『もう充分目立ってますから』」

零「それじゃ」

ガチャン

シャル「うつ」

零「ん、気付いたか」

シャル「零くん」

零「もう大丈夫だ。くん付けはしなくていい」

シャル「うん。だったら零も僕のことをシャルって呼んで欲しいな」

零「構わんぞ。シャル、もう家族のことで心配することはない。たく俺と結婚って冗談だけにしろって感じだよな。シャルは一夏が好きなのに」

ズーン！

シャル「そ、そうだね」

零「どうしたんだシャル？」



シャル「なんでもないよ。………零のバカ」

零「あれ？俺なんかした？」

一方その頃

一夏「零の奴どこに行ったんだよ！」

ラウラ「1人でもなんとかするが」

3回戦、一夏とラウラ1人で奮闘。

## V S ラウラ（前書き）

前回、一方通行のセリフが所々抜けてた。  
もっと一方通行の発言出したかったのに。

## V S ラウラ

零サイド

一夏「零、どこに行ってたんだ？1人でめんどくさかったぞ」

零「誘拐犯をボコって売り飛ばしてきた」

一夏「サボったからって言い訳するなよ」

零「そーですね。その反応が普通ですね」

一夏「はあー。まあいいや。次の相手はラウラ達だぞ」

零「あのチビ黒ウサギは俺が狩るから手を出すなよ」

一夏「分かったよ。俺はシャルロットの相手でもしてるよ」

零「それじゃあ、行きますか」

アリーナ

ラウラ「2回戦に出ていなかったから逃げたのかと思ったぞ」

零「逃げる？何から逃げるって言うんだよ？チビ黒ウサギからか？」

ラウラ「侮辱しおって！」

シャル「落ち着いてラウラ。零の挑発に乗っちゃ駄目だよ」

ラウラ「くっ」

零「シャルがストッパーになってて良かったな。チビ黒ウサギ」

一夏「あれ？いつの間にシャルロットのことをシャルって呼ぶようになったんだ？」

零「誘拐犯から助けた時」

一夏「だから嘘はいいつて」

零「少しは信じろや」

千冬『いい加減始めんか！この馬鹿者共！』

一夏「千冬ねえを」

零「怒らせてしまったので」

零・一夏「勝たせてもらいましょうか！」「」

試合前に言ったように一夏はシャルの相手をしている。

零「お望み通り一対一だ」

ラウラ「お前を倒して教官に認めてもらおう！」

零「少しはいい顔するようになったみたいだが、それは無理だな。

俺の名前は織斑零！俺の前では悪魔だろうと指定席！正々堂々不意をうってご覧にいれましょう！」

《カーニバル》が集まりISの形を作っていく。そして、緑の色になる。

それを置いて零は距離をとる。

零「《策士》&《狂戦士》<sup>ベルセルク</sup>。来いよ《境界の瞳》<sup>ヴォーダン・オージェ</sup>という名の失敗作」

ラウラ「貴様！！！」

挑発は簡単な戦略の1つだぜ。

でも、なんか禁句ばかったな。

頭に血が上り過ぎで動きが単調だぜ。

ラウラ「退け！邪魔だ！」

ラウラは攻撃してくる《狂戦士》を切り付けるが、

狂戦士『ズタズタズタズタズタズタズタズタズタズタズタズタズタズタズタ！』

ラウラ「何っ！？」

切り付けられた部分だけ崩れて攻撃がすり抜け、そのまま攻撃を続ける。

零「その中身は空っぽだぜ」

ラウラ「なら！」

ラウラがA I Cで《狂戦士》の動きを止める。

スパン！

零「俺を忘れるなよ」

零がラウラを撃ち抜く。

ラウラ「くそっ！」

零「さっきまでは良かったのに、今のお前は全然駄目だな」

ラウラサイド

くそっくそっくそっ！

手も足も出ないなんて。

こんなに差がある物なのか？

私はこのまま負けるのか？

あいつに勝ちたいのに！

教官に近付けると思ったのに！

あいつと同じだけの力があれば、

（力が欲しいのか？）

誰だ？

（力が欲しいのか？）

ふっ、誰でもいいか。

寄越すというなら寄越せ！

あいつに勝てるだけの力を！

零サイド

ラウラの《黒い雨》シュヴァルツェア・レーゲンの装甲が液体のような金属を覆っていく。

V-Tシステムが発動したか。

千冬『大会は中止だ！全員アリーナから離れる！』

アリーナがパニックになる。

シャル「零！何やってんの！早く行くよ！」

零「先に行ってる。俺はこいつの相手してくから」

一夏「じゃあ、俺も」

零「お前は《零落白夜》の使い過ぎでもうほとんどシールドエネルギーが残ってないだろ」

一夏「で、でも」

零「試合前に言ったが、あのチビ黒ウサギは俺の獲物だ。手を出して言うならシールドエネルギーにしまっぞ」

一夏「はあー。分かったよ。シャルロット行くぞ」

シャル「で、でも」

一夏「行くぞ。あんなったら零は止まらねえからな」

零「Thank Youな一夏。シャルを頼む」

一夏「ちゃんとラウラを連れて戻って来いよ」

零「愚問だな」

一夏はシャルを連れて避難する。

ラウラの周りの金属の液体はあるISの形を作る。

千冬サイド

千冬「あれは《暮桜》！」



山田「それって織斑先生の専用機じゃ!？」

千冬「零!早く避難しろ!」

零『千冬さん。悪いけどこいつは俺の獲物だ。手を出す奴がいたら潰すよ』

千冬「はあー。しょうがない。死ぬなよ」

零『俺が死ぬとでも?』

山田「な、何かあったらどうするんですか!」

千冬「山田くん。コーヒーでも飲んで落ち着け」

山田「それ砂糖じゃなくて塩ですよ」

零サイド

千冬さん。落ち着こう。

零「さーで、許可が下りたし殺して解して並べて晒してやんよ!」

そうしてお互いの刃を交える。

零「それで千冬さんを真似したつもりか?それで強くなったつもりか?」

その言葉に全く反応せず、攻撃を繰り返してくる。

零「今のお前は弱過ぎる！」

その攻撃を軽く避け、弾を打ち込む。

零「こんなん全然面白くねーぞ！」

こんな千冬さんの動きを作業するだけの人形なんて全然恐くない。  
全然やり合ってて楽しくない。

駄目だ。駄目だ。全然駄目だ。

他人から貰った力で満足するなよ。

安易に力に頼ってんじゃねーよ。

ラウラ。お前が望んだのは強さであって、そんな力じゃないだろ。

零「とつと目を覚ましやがれ！この大馬鹿野郎が！」

完璧な一撃が《暮桜》に入る。

ラウラサイド

ラウラ『貴様は何故そんなに強いのだ？』

零『俺が強い？強いつて言うのは一夏みたいな奴のことを言うんだ  
よ』

ラウラ『一夏？貴様の方があの愚弟より力を持っているだろ』

零『力？だから、お前は前提条件が間違ってるんだよ。』

ラウラ『前提条件？』

零『力は強さじゃない。力は力。強さとは別物だ。強さを持たない力はただの暴力でしかない。お前の見た千冬さんは力だけの存在だったか？』

ラウラ『違う！』

零『そういうことだ』

ラウラ『だったら強さとは一体なんなんだ？』

零『自分の力をどう使うか』

ラウラ『力をどう使うか』

零『そう。一夏は全てを守ろうとしてる。だからあいつは俺なんかより強い』

ラウラ『なら貴様は力をどう使うんだ？』

零『そうだな、一夏が全てを守るために手を貸すためだな』

貴様も充分強いよ

ラウラ『私にも手を貸してくれるか？』

零『もちろん』

## 2巻エピソード

零サイド

タッグマッチから数日後。

あの後原作通り大会は中止になった。

当たり前か。

V-Tシステムを倒した時にラウラの精神と会った。

つか、本当は一夏が会うべきだったんだけどなー。

まあ、相手をしたのが俺だったからしょうがないか。

そのラウラと言うとまだ眠っているみたいだ。

原作と違うし。マズいよな。このまま植物人間だったらマジでどうしよう。

今日も見舞いに行くか。

零「鬱だー」

一夏「落ち込むなよ零」

零「お前だったらもっと上手く出来たのになー」

一夏「零より上手くなんて出来ねーよ」

いや、出来てたんだよ。

やっぱ、一夏の主人公としての才能は流石だね。

千冬「朝のホームルームの前に良いニュースだ。ボーディッヒが今朝目覚めた。入って来い」

ラウラ「はい。教官」

零「良かった」

マジで良かった！

原作ブレイクは好きだけど味方キャラが居なくなるのはあり得ないからな。

ファーストキスを奪われた。

零「はっ？」

ラウラ「貴様を私の嫁にする！異論は認めん！」

零「あの一夏、一夏の席は1つ右なんだが」

一夏「何故そこで俺の名前が出てくる？そこは夫じゃなく、嫁と言ったことに疑問を持つ所だ」

ラウラ「部下が言っていた。日本では自分の好きなやつを俺の嫁と

か自分の嫁とか言っのだろう」

零「その部下は一般的に駄目人間という部類に属しているぞ！」

マジでどういことですか？

なんで俺？

ラウラは一夏のハーレムだろ？

この作品で一夏よりハーレムを形成してる朴念人野郎

さて、今はそんなことより逃げるか。

だってー

千冬「篠之野。刀を貸せ」

武器無しで勝てるわけねー！

山田「家庭科室から包丁5本程取ってくるので待っててください」

山田女史。包丁は一本で致命傷なんですよ。

楯無「今回の出番これだけってどういことかな？」

多分、3巻も1年だけの臨海学校だから出番は無いかと。

簪「ニコッ！」

恐い！ただ笑ってるだけなのに恐い！

シャル「零！」

シャルが女神に見える！

零「シャル、助けてくれ」

シャル「朝からいきなりそれは無いんじゃないかなー？」

地獄に叩き落とす邪神でした。

シャルはISを展開してる。

零「あばよ。トツツァン！」

窓から退散！

一夏「ここ3階だぞ！？」

零「I can fly！」

ハングライダー持参してて良かった。

一夏「お前はどこの怪盗だ！？」

一夏サイド

千冬「逃げられたか」



簪「大丈夫。零くんの制服に発信機ついてるから」

千冬「でかした」

楯無「流石私の妹！」

一夏「なんでそんな物くつついてんだよ！？おかしいな。俺の常識が通じない」

駄目だこのクラス。

千冬「その前にデュノア」

シャル「なんででしょう？」

千冬「デュノア夫妻が行方不明だそうだ。何か知らないか？」

シャル「知りません」

千冬「そうか」

シャルロットの返答は否定というより拒絶に近かったな。

千冬「それでは追うぞ」

一夏「授業は？」

千冬「危ない。忘れるところだった。しょうがない私は零を追う。他の者は授業を受ける。山田くん後は任せた」

山田「織斑先生だけズルいです」

千冬「私は授業をサボった罰を与えに行くだけだ。安心しろお前達の分も私に任せろ」

山田「分かりました」

一夏「酷いな！逃げる理由作っておいてその対応って！」

千冬「一夏、何か文句があるのか？」

一夏「いえ、ありません」

零「ごめん。俺は逆らえないや。」

千冬「それじゃ行ってくる」

楯無「頑張ってください」

うん。零頑張って生き延びろ。

## 買い物前日（前書き）

ヒロイン増やし過ぎた。

ネタが足りない。

ヒロイン減らすか？

そういえば10万PV突破！

何かした方がいいでしょうか？

意見があつたら感想にお願いします。

## 買い物前日

零サイド

ジリリリリリリリ！

もう朝か。

クソ眠いな。遅くまでコアいじくってたのが悪いか。

目覚ましを止めなくては

ムニユッ

柔らかい？

以前にも触れたことがある柔らかさだな。

ムニユッムニユッ

???「はうん」

零「まさか!？」

バツ！

布団をとっぱらうと全裸のラウラが寝ていた。

ラウラ「なんだ？もう朝か？」

零「何故お前がここに居る！」

ラウラ「お前が私の嫁だからだ！」

零「意味が分からん！胸を張るな！隠せバカ！」

ラウラ「夫婦とは包み隠さないものなのだろ」

零「お前はいつぺん日本語の勉強をしてこい！」

一夏「朝っぱらからうるさいなってラウラ！？なんで裸なんだ！？」

ラウラ「無粋な奴だ。夫婦の営みを見るなんて」

一夏「……………悪い。廊下に出てるから続けてくれ」

零「助けるよバカ！」

千冬さんに怒られるまで続いた。

放課後

おかしい。命が危険に晒されることが最近多過ぎる。

しかも、敵ISより味方である原作キャラからの攻撃の方が多いってどういうことだ！？

やっぱりオリキャラだから嫌われてんのかな？

やっぱりこいつは朴念人

ピロリン

メールか。

From 千冬

本文 明日、林間学校での水着を買うから、選ぶのを手伝え。

千冬さんは流石に拾われたからって家族だから嫌ってることはないか。

From 零

本文 分かりました。一夏も誘って家族3人で行きましょう。

これでよし。

零「おい、一夏」

一夏「なんだ？」

ピロリン

一夏「悪い。ちょっとメールが」

零「別に確認してもいいぞ」

メールを見た一夏。

零「今度、買いm」

一夏「悪い。予定が入ってるから無理だ」

零「まだ日にちを言っていないんだが」

一夏「その買い物に行く日は忙しい予定なんだ」

零「じゃあ、行く日を変えれば」

一夏「悪い。日にちが変わったら風邪をひく予定なんだ」

零「すごい予定だな!？」

一夏「部活があるから行くわ」

一夏はそう言って部屋を出る。

零「今日は部活が休みだって言ってたっていないし!」

廊下に一夏の影は無かった。

一夏に嫌われることしたっけかな？

一夏サイド

はあー。

From千冬

本文 零との買い物について来たら殺す。

最近、千冬ねえのキャラが壊れてると思う。

強力なライバルが増えたからしょうがないのか？

まあ千冬ねえには幸せになってほしいからいいけど。

零サイド

From零

本文 一夏は予定があるそうです。

ピロリン

From千冬

本文 そうか。残念だが一夏抜きで行くぞ。明日の10時に集合だ。

明日の10か。ホント一夏の奴どうしたんだろ？



ラウラサイド

困った。

零の奴に私の嫁だと自覚させるにはどうしたらいいのだろうか？

思いついたこと（この章の最初の辺りです）は全てやりきってしまった。

私にはこういう事に関して知識が乏し過ぎる。

こうなったら

ラウラ「私だ」

クラリ『どうしましたか？隊長』

ラウラ「零のことなんだが」

クラリ『隊長が好意を寄せている織斑零のことでしょうか？』

ラウラ「ああ。いわゆる私の嫁だ。」

クラリ『それで？』

ラウラ「私の考えた作戦は使いきってしまったのだ。だから作戦を考えてくれ」

クラリ『そろそろIS学園では林間学校に行きますよね？』

ラウラ「ああ。三日後に控えている」

クラリ『この手のイベントは距離を縮めるのに絶好の機会です。海が近くにありますが隊長はどのような水着を所持しているのですか？』

ラウラ「学園指定の水着だけだ」

クラリ『隊長は何を考えていらっしゃるのですか！IS学園指定の水着は旧スクール水着。確かに悪くはありません。ですが！』

ラウラ「なんだというのだ？」

クラリ『旧スクール水着は一部のマニアにしか受けません！』

ラウラ「なっ」

クラリ『そこで水着を織斑零に選んでもらうというのはどうでしょう？そうすれば買いい物に称してデートすることが出来ます』

ラウラ「おお！早速実行に移す。礼を言うぞクラリッサ！」

クラリ『いえ。我々黒ウサギ部隊は隊長と一心団体です！成功を祈ります』

ラウラ「よい結果を待っている」

ピッ

私はよい部下を持った。

それでは早速

F r o m ラウラ

本文 買い物に付き合え。異論は認めん！

零（強制かよ。まあ、丁度いいし）

F r o m 零

本文 分かった。明日の10時に駅の前に集合な。

ピッ

ラウラ「私だ！買い物に誘うことが成功したぞ！」

クラリ『おめでとございます！隊長！』

零と二人で買い物。

簪サイド

楯無「ズーラー！ーいー！。私も林間学校に行くー！」

簪「お姉ちゃん。子供じゃないんですから」

楯無「こうなったら生徒会長宣言で」

簪「織斑先生がいますよ」

楯無「うぐ」

簪「というわけで今回はあきらめてください」

楯無「ヤダー。零くんの水着見せるんだもん」

簪「……………水着」

楯無「そうだ！水着を零くんと買いに行けばいいんだ！」

From楯無

本文 水着を新しく買っただけど一緒に行かない？

ピロリン

From零

本文 いいですよ。丁度明日買い物に行く予定だったので駅前に10時に集合です。

楯無「明日は零くんを誘惑しちゃうもんね」

これだけはお姉ちゃんにも負けられない！

From 簪

本文 私買い物について行っていいかな？

ピロリン

From 零

本文 別にいいぞ。お前ら仲良くなったな。嬉しいぞ。

簪「よし」

楯無「ウガーーー！邪魔するって言うの？簪」

簪「そんなことないですよ。お姉ちゃんと私は仲良しなんですから」

楯無「ふん。そんな胸で私に勝てるっても？」

簪「こ、これくらいの方が需要があるんですよ。第一胸で言ったら山田先生に勝ち目無いですよ」

ガーーーーーン

自分で言ってて悲しくなってきた。

お姉ちゃんもOTLだし。

楯無・簪（でも明日の敵は1人。負けない）

山田サイド

また水着小さくなってますよ。

去年買い替えたばかりなのに。

しょうがない。また買いに行くしかないですね。

やっぱり一番最初には零くんに見てもらいたいですね。

買い物について来てもらいますかね。

ついでにデートが出来ますし。

ふっふっふ。こんなこと思いつくのは私くらいですね。

他にもたくさんいます。

From山田

本文 買い物に行くんですが、一緒に行きませんか？美味しいカフェを知っているんすよ。そこでお昼は先生が奢っちゃいますよ。

ピロリン

早っ!?

F r o m 零

本文 行きます!行かせていただきます!明日の10時に駅前で集合です!

どれだけ奢ってもらえるのが楽しみなんですか。

まあ、計画通り。

シャルサイド

そういえば僕は男子として転校してきたから水着無かったんだよね。

もしかして女子ってバレてなかったら男物だった!?

本当、零には感謝しなきゃ。

何かプレゼントしようかな?

F r o m シャル

本文 今までのお礼したいから買い物に行かない?

ピロリン

F r o m 零

本文 そんなこといいのに。 まあ、明日に買い物に行くから10時に駅前な。

何を買ってあげようかな？

零サイド

明日はみんなで買い物か。

嫌われてるわけじゃなかったみたいだな。

今日は早めに寝るかな。



買い物1（前書き）

やっぱり苦手だ。

ラブコメ？書くの。

## 買い物1

零サイド

えっと、今の時間はもう少しで9時30分。

余裕で間に合うな。

到着ってみんなもう居るし!?

何分前集合だよ!

ギロ!

零「あの一。皆さんはなんでそんなに殺気を飛ばしてくるんでしょ  
うか?」

千冬「別に」

何その思わせ振りなセリフ。

ラウラ「やはり自覚が足りん」

なんの自覚ですか?

楯無「敵が多い」

えっ。敵に狙われてる自覚!?

簪「山田先生……」

山田女史が狙われてる！？

山田「私だけじゃなかった」

他にも狙われてる奴がいるの！？

シャル「しょうがないか。零だし」

狙われてるの俺！？

千冬「まあいい。買い物を楽しむか」

零「いいのかよ！？」

千冬「この状況を作ったお前が何を言っている？」

零「なんでもありません」

そんな人を殺せるような視線止めてください。

他の奴らもやってるし！

何これ？新手の虐めですか？

山田「あの一。時間制にしませんか？」

全員「」「賛成」「」

というわけで山田女史は昼飯の時間と自動的に決まり、残りでじゃんけん開始！

じゃんけんの結果。

千冬「まずは私からだな」

零「千冬さんは相変わらずじゃんけん強いな」

千冬「じゃんけんには必勝法があるからな」

零「必勝法？」

千冬「出す瞬間に相手が何を出すか見て瞬時に自分が何を出すか決めればいいんだ」

零「それって後だしじゃ」

千冬「それを0・1秒で行う」

零「人間技じゃねー！そりゃ後だしに誰も気付かないわ」

千冬「ばれなければいいんだよ」

零「まあ、そうだけど。おっ千冬さん着いたよ」

水着売り場到着。

千冬「どんな物がいいんだ？」

零「選ぶって言ったけど、そういうのよく分らないんだよな」

千冬「じゃあ、少し待ってろ」

やっぱりこつこつって一夏の方が向いてるな。

千冬「零、白と黒どちらの方がいいと思う？」

零「うーん、千冬さんには黒の方が似合ってると思う」

原作と同じのを選べばいいかな。

千冬「そうか。ならこつちにしよう」

そういうとその水着を買ってきた。

千冬「カフェで少しお茶するでしょう」

カフェ移動。

千冬「そういえばデュノア夫妻が行方不明だそうだ」

零「そりゃ大変」

千冬「驚かないんだな」

零「シャルから聞いたし」

千冬「デュノア夫妻がどうなったか知らないか？」

零「なんで俺が知っているんだ？」

あいつらに任せたから生きてるのか、死んでいるのかも分からないよ。

千冬「ならいいが」

零「千冬さんは仕事熱心だな」

千冬「お前らを守ると約束したからな」

零「俺も千冬さんを守るつもりですよ」

千冬「零」

零「だから今日くらいは楽しんでくださいよ」

千冬「そうだな」

楯無「交換の時間ですよ」

千冬「ちっ」

零「もうそんな時間か。また後で千冬さん。」

千冬「くっ」

楯無「さて、どんな水着がいいかな」

零「楯無さんならなんでも似合うんじゃないんですか」

楯無「また、お世辞を言っちゃってー」

零「はい。お世辞です」

ボコッ

零「グホッ！……冗談です」

いきなりグー！？

適当に対応しとくか。

楯無「これは似合う？」

零「似合うんじゃないですか」

楯無「じゃあ、これは？」

零「それもいいんじゃないって、紐じゃないですか！？」

隠す面積があまりに少ないやつ。

楯無「そうかー。零くんはこうというのがいいんだー」

零「んなわけないじゃないですか！」

楯無「試着してこようかなー」

零「マジで謝りますから冗談で済ましてください」

楯無「そしてみんなに零くんに強要されてって言いふり回そうと」

零「すみませんでした！」

必殺土下座！

楯無「土下座して着てって、頼まれちゃった」

零「この対応は酷過ぎるだろ！」

楯無「はっはっはー！冗談で済ましてあげよう」

良かった。本当に自殺しようかと思ったぞ。

零「あんたは俺を社会的抹殺をするつもりですか？」

楯無「キミの人生は私次第だね」

零「冗談ですよね？」

楯無「あっはっはっ！」

零「否定しろや！」

楯無「時間無いし選ばないとね。決まらないうとさっきのにしちゃうよ」

零「全力で選ばさせていただきます」

楯無「よろしくねー」

原作では出てないから今までの経験、知識を全て使え。



零「これでどうだ！」

楯無「じゃあ、それにするわ」

零「悩まなくていいんですか？」

楯無「零くんが未来をかけて選んだみたいだしね」

時間になって楯無さんは嬉しそうに行った。

シャル「零ー！」

零「次はシャルか」

シャル「早く水着選ぼうよ。プレゼント買う店はいい所見つけたから」

零「分かった分かった」

シャルのも原作と同じやつを買った。

そして、シャルが言っていた店に移動。

零「アクセサリーショップか」

シャル「そうだよ。そういえば零のISの待機状態ってどんな形なの？」

零「ガラス色のアンクレットだよ。通信が本当にしづらいわ」

シャル「じゃあ、足首につける物じゃないのにするね」

零「お前に一存するよ」

シャル「ちよつと待っててね」

さて、どう時間を潰すか。

十分後

シャル「はい。どうぞ」

零「ありがとな。えっと、ネックレスか」

シャル「うん。メノウを使った物だよ」

零「これより安いが、これをやるよ」

シャル「砂時計？」

零「そう。砂時計のイヤリングだ。いい形だから買った」

シャル「そんなの悪いよ」

零「さっきシャルは自分がプレゼントしたいからするって言ったよな。俺もプレゼントしたいからしただけだ」

シャル「……………零。ありがとう」

零「どういたしまして」

## 買い物2（前書き）

ラブコメ書くの難い

## 買い物2

シャルの時間も終わり、次は山田女史。

山田「零くーん」

零「山田女史」

山田「お願いがあるんだけどいいかな？」

零「なんですか？」

山田「私も織斑先生と同じようにプライベートの時は名前で呼んでもらえないかな？」

零「別に構わないですよ」

山田「それじゃあ」

零「はい。真耶さん」

山田「はうー」

零「どうしたんですか真耶さん？」

山田「はやー」

零「真耶さん？大丈夫ですか真耶さん？」

山田「だ、大丈夫ですから。そ、それより早く行きましょう」

零「大丈夫ならいいですけど……………」

山田「早くしないとお昼を奢れなくなっちゃいますよ」

零「早く行きましょう!」

山田（零くんって結構単純だな）

零「着きましたよ」

山田「サイズが合うのって少ないんですね」

零「めばしいのは見つけておきましたよ」

山田「ホントですか!」

零「これなんてどうですか?」

原作と同じ物だぜ。

山田「いいですね。それじゃあ買ってきますね」

これで昼飯の時間が長くとれるぜ。

山田「それじゃ、ご飯にしますか」

零「待ってました」

カフェ

零「いい雰囲気な店ですね」

山田「ここは値段も低く、味もいって有名なんですよ」

零「うーん、何を頼みますかね？」

山田「好きなだけ頼んでいいですよ」

零「ホントですか！」

山田「ホントですよ。さっき言った通り安いですし」

零「分かりました。注文いいですか」

店員「はい」

零「サンドウィッチ全種、ピザ全種、サラダ全種とコーヒーをブラックで」

山田「はっ？」

店員「ご注文を繰り返します。サンドウィッチ全種、ピザ全種、コーヒーのブラック全てお一つずつですね」

零「はい」

店員「合計6582円になります」

零「おお！本当に安いですね」

山田「ハハ。このカフェで本当に良かった」

十数分後

零「あー。美味しかった」

山田「よく全部食べましたね」

零「いやー、久しぶりに満腹まで食べましたよ。千冬さんに止められてましたから」

山田「それは織斑先生の正しい判断だと思います」

零「真耶さん。ごちそうさまでした」

山田「どういたしまして」

ラウラ「おい嫁、時間だぞ」

零「時間か。それじゃあ」

山田「じゃあ、また後で」

零「ラウラ。買い物って何買った？」

ラウラ「水着と服だな」

零「じゃあ、水着からいくか」



ラウラ「ああ」

水着売り場

零「さて、どんなのを買う？」

ラウラ（水着か。私は胸が小さいがクラリッサが教えてくれた日本のことわざに『貧乳はステータスだ』というものがあつたからな）

ラウラ「嫁に選んでほしいんだ」

零「そうか。ならこれなんてどうだ？」

原作と同じ物。

ラウラ「こ、これか？」

零「ダメだったか？」

ラウラ「こんな可愛い私に似合うわけ……」

零「いや、似合うと思うぞ。お前可愛いし」

ボン！

ラウラ「わわわ私が可愛い？」

零「そうだろ」

ラウラ「そ、そうか。私は可愛いのか」

零「それより水着選ぼうぜ。さっきのがダメだな」

ラウラ「さっきのでいい」

零「いや、でも」

ラウラ「さっきのがいいんだ」

零「そうか。なら買ってこい」

ラウラ「ああ」

お買い上げです。

零「次は服だな」

ラウラ「私がよく行く店があるんだ」

零「そうか。意外だな」

ラウラ「まあ、知り合いに教えてもらったんだがな」

零「じゃあ、行こうぜ」

数分後

ラウラ「ここだ」

零「ここって.....」

.....コスプレショップかよー！

ラウラ「嫁、何を叫んでるんだ？」

零「この店を教えた奴は誰だ？」

ラウラ「私の部下のクラリツサだ」

零「今度そいつと一回話させる」

ラウラ「ん？分かった」

零「ところでお前はどんな物をここで買ったんだ？」

ラウラ「えっと、団長と呼ばれている服とネギが好きな歌姫の服と  
白い魔法使いの服だ」

零「よく名前を言わなかった」

ラウラ「それじゃあ服を」

零「今日は俺が勝ってやるから他のところにしよう」

ラウラ「別に構わないが」

コスプレショップで待たされるのはキツ過ぎる。

その後、白いワンピースを買ってやったらとても喜んでくれた。

最後は簪。

簪「零。ちよつと選ぶから待ってて」

零「分かったよ」

はあー。結構疲れたな。

女「ちよつとその人」

零「ん。俺にようか？」

女「そうよ。ちよつとこれ片付けておいて」

零「断る。なんで俺がそんなことしなきゃならん」

女「男のくせに生意気ね！」

零「男のくせに？バカかお前は？女が優遇されるのはISのおかげだろ。そのISに乗ったことがないお前の言うことを何故聞かねばならん」

女「の、乗ることが出来ない男が何を言ってるのよ！？」

零「俺の名前は織斑零って言っただ」

女「織斑零？まさか！」

零「そうです。ISに乗れる男子の片方です」

女「くっ」

そう言つて女はどこかへ行く。

簪「凄いね。零」

零「なんだ。見てたのか」

簪「ごめんね。助けに入れなくと」

零「別にいいよ。お前が文句言われるよりずっといい」

簪「でも、零のこと守りたかった」

零「じゃあ、簪が守れるようになるまで待つてるよ」

簪「うん」

零「それよりいいのがあつたか？」

簪「これなんてどうかな？」

シンプルなワンピースタイプ。

零「いいと思うぞ。簪によく似合つと思う」

簪「ホントに！じゃあこれにするね」

これで今日の買い物は終わった。

疲れたけど楽しかった。

……オチがないな。

## 海（前書き）

そろそろ『バカとカオスと原作ブレイク』に戻るかもしれません。

## 海

目的地到着。

千冬「海にでも行ってこい。私達も後から行く」

千冬さんは旅館へ向かう。

零「行こうぜ一夏」

一夏「零、これどう思う？」

ウサギの耳が地面から生えている。そして看板に引っ張れと書かれている。

一夏「これってあの人たよな？」

零「多分そうだろ」

一夏「やっぱりそうか。どうする、抜いてみるか？」

零「いや、逆に押してみよう」

ウサギの耳を押すと普通に埋まった。

「???」その行動は予想外だったよ!」

女の子が降ってきて良いことはない。



物語では良くあるが、そこに居合わせた奴は何かに巻き込まれて大変な目に合うからな。

思考するのは止めよう。

今、女の子？が降ってきた。

俺より歳上な女の子がね。

束「零くん受け止めて――――！！」

零「一夏頑張れ」

一夏「お、俺！？」

一夏を引き寄せて距離をとる。

束さんの足が一夏の顔にドーン！

一夏「グホッ！」

束「酷いよ零くん避けるなんて！」

零「まずは一夏に誤ってください」

束「そだね！いつくんゴメンね」

一夏「身代わりにした零も謝れ」

零「だが断る。束さんは何しにきたんですか？」

一夏が騒いでるけど知らん。

束「零くんには水着姿を見せに来たんだよ」

零「今すぐ帰れ」

束「というのは冗談で篝ちゃんとちーちゃんの水着すg」

零「マジで帰れ変態」

束「本当は篝ちゃんに誕生日プレゼントをあげにきたんだよ」

零「プレゼントの内容は大体予想出来ますけど」

束「分かっちゃった？」

零「そろそろ篝も欲しがる頃でしょうし」

束「そうなんだよー。頼まれちゃってねー！というわけで篝ちゃんの居場所はどこ分かる？」

零「あのウサギの耳を見たらどっか行きましたよ」

束「そっかー。でも大丈夫！この篝ちゃんリーダーでって抜けないんだけどー！」

ウサギの耳を頑張って引っ張っている。

零「まあ、思いつきり押しましたからね」

束「ちょっと手伝ってー」

零「はいはい」

確かに抜きずらいな。

零「おりゃ！」

スポッ！

ボタン

零「いててて」

束「零くんって大胆」

零「へっ？」

転んだ時に束さんに覆い被さっちゃまった！

零「す、すいません！」

束「いいよ。もつとして」

零「痴女だ！」

束「止めちゃうの？また今度にね」

零「二度とねえよ！」

束「それじゃあ篝ちゃんのところに行ってくるね！」

零「行つてらっしゃい」

束「行つて来まーす！あつ、零くんが回収したの使つていいようにみんなに脅迫しといたから」

零「やっぱりあなたでしたか」

束「じゃーねー」

束さんは森の中に消えていった。

零「えつと一夏はと」

一夏「最近扱いが酷い気がする」

零「体操ずわりしてないで行くぞ」

一夏「ひどっ！」

—————

というわけで海！

一夏は鈴とセシリアに絡まれてるからほっとく。

さて、俺は何をするか。

簪「零。暇ならスイカ割りしない？私達じゃ全然割れなくてさ」

簪と本音達が誘ってくる。

零「じゃあ、やってみるか」

スイカ割り開始

さて、皆の指示はと。

簪「スイカは右だよ」

本音「というのは嘘で本当は左だよ！ゼロツチ」

「前だよ！」

「実際は10時の方向に3メートル」

「上！上！」

「右下A R 上上右B！」

協力する気ねー！

こりゃ誰も成功しないわ。

つか最後の奴なんのコマンドだ！

しゃあない。本気を出すか。

集中

零「そこだ！」

ドカーン！

手応えあり。

目隠しを外してみると。

スイカが爆散してた。

零「やべ。ちょっと本気出し過ぎちった」

バチーン！

零「ぐほっ」

千冬「食べ物粗末にするな」

零「何故に海に出席簿持って来てんの」

千冬「それよりビーチバレーに付き合え。相手が居なくなってしまうってな」

どういうことだ？

千冬さんの後ろを見ると。

死体の山が出来ていた。

ここは海だぞ！

作るなら血の海だろ！

て冗談はこれくらいにして。

あれはラウラとシャル！

零「大丈夫か？二人とも！」

シャル「れ、零」

ラウラ「私達では教官を倒せなかった」

シャル「でも、零ならやれる」

ラウラ「後は頼んだぞ」

カクッ

零「二人とも――――！！！」

千冬「どうした？怖気づいたか」

零「一夏。行くぞ」

一夏「分かった」

千冬「さすが私の弟達だ。負けると分かっている挑むとはな」

一夏「倒れていった奴らの為にも」

零「俺達は負けない！」

千冬「ならば潰してやろう私の弟達よ！行くぞ山田くん」

山田「はい。織斑先生」

簪「……………何この空気」  
ホント何この空気。

—————

五分後

一夏「ファイヤートルネード！」

山田「マジン・ザ・ハンド！」

零「エターナルブリザード！」

千冬「マオウ・ザ・ハンド！」

鈴「ねえセシリア」



セシ「なんですか鈴さん」

鈴「これってビーチバレーのはずよね？」

セシ「はい。そのはずですが」

鈴「超次元サッカーに見えるのは私だけ？」

セシ「大丈夫ですわ。わたくしにもそう見えますから」

鈴「良かった。私だけじゃないんだ」

零「くつ。一夏あれをやるぞ！」

一夏「よし！ファイヤー」

零「ブリザード！」

千冬「何！」

山田「止めきれない！」

零「俺達の勝ちだ！」

千冬「ふつ、もうお前らに教えることは何もない」

バサッ

簪「何時まで続くんだろこの空気？」

## アンケート結果

本日アンケートが終了しました。

### 結果

バカとカオスと原作ブレイク 11票

IS カオスに原作ブレイク 28票

よって、IS カオスに原作ブレイクになりました。

アンケートに参加してくださった方、まことにありがとうございます。

もしかしたらアンケートをとったばかりなのにテストの点数が悪かったらケータイを取り上げられるかもしれないのでご了承ください。

### アンケート内容

バカとカオスと原作ブレイクとIS カオスに原作ブレイク。

どちらを先に進めた方がいいか迷っています。

なので、8月30日までにどちらの続きが読みたいか、感想に書いてください。

どちらも登録していない人でも感想を書くことは可能です。

なので、気軽に選んでください。

このアンケートは8月31日に消します。このアンケートの感想には返信が出来ないと思います。

このアンケートの結果は8月31日に掲載します。

たくさんの人が投票してくれることを願っています。

## 旅館（前書き）

テスト前

点数が悪かったらケータイを取り上げられる。

HELP！

## 旅館

零「海が近いから刺身が美味しい」

現在、旅館で食事中。

一夏「確かに。しかもこれ本わさだぜ」

零「前から思ってたけどIS学園って飯に力かけてるよな」

シャル「本わさって？」

零「市販の物は基本的に他の物を混ぜてるんだよ。それで本わさっていうのはちゃんとしたワサビを擦った物だから風味がいいんだよ」

シャル「ふーん。そーなんだ」

パクッ

大量のワサビオンリー

シャル「ーーーーー！」

零「大丈夫か？シャル」

シャル「風味があって美味しいね」

零「どんだけいい子ちゃんなんだお前は？」

涙目になつてゐるぞ。

シャル「ねー、さっきから気になつてたんだけど、零のおかずの品数多くない？」

零「自分で食材を調達して、厨房借りて作つた」

シャル「そんなこと普通に答えられてもリアクションに困るんだけど」

やっぱISって便利だね。

深海に簡単に潜れるんだもん。

シャル「どれも美味しそうだね」

零「口開ける」

シャル「えっ？」

シャルがこっちを向いて口を開ける。

零「ほら」

パクッ

シャルの口にあん肝を入れる。

零「美味しいか？」

シャル「うつ、うん」

顔が赤いけどどうかしたのか？

シャル（いきなり何やんのさ零は！？食べさせるなんて！零の箸だったからこれって間接キス！？どどどどうしよう！ビックリし過ぎて味なんて分かんなかったよ！）

シャル暴走し過ぎて考えてること滅茶苦茶。

『セシリアとシャルロットばかりずるい！』

『私達も食べさせて欲しい！』

丁度、一夏もセシリアに食べさせていた所だったので周りがつるさくなる。

零「そんなにこの料理食いたかったのか？」

千冬「静かにしろ貴様ら！」

千冬さんの一喝で静かになる。

千冬「零、一夏。あまり問題を起こすな。そうそう零。ISを使って海に潜ったと耳にしたんだが」

零「フグのヒレ酒作っただんですけど飲みます？。」

千冬「今回は大目に見よう」



買収完了

千冬「零、一夏。お前らの部屋は私と一緒にだ」

『『『ええ——————！！』』』

不満の大合唱

千冬「静かにしろ！」

シーン

この風景、録画して面白映像としてうPしようかな。

千冬「お前らが夜に2人の部屋に侵入するのを防止するためだ」

『『『うつ』』』

零「虎穴入らずんば虎児を得ず」

千冬「まあ、そういうことだ」

—————

簪サイド

せっかくお姉ちゃんがないのに、零に会いに行かないなんて考えられないよ。逆に考えればみんなは恐がっていけない今はチャンスだよ。

簪「と思ったんだけど、扉の前で何やってんのみんな？」

『シーツ』

零の部屋の前に箒、鳳、オルコット、シャルロット、ラウラが耳を当ててる。

私も扉に耳を当ててみると

零『そろそろ始めるぞ』

一夏『あ、ああ』

零『なんだ恐いのか』

一夏『やっぱり、何度やっても少し恐いな』

零『安心しろ。すぐに気持ち良くしてやる』

一夏『それじゃあ頼む』

零『はいよ』

一夏『うつ』

零『どんどん行くぞ』

一夏『あつ、ちょっとペースが早くないか？ひやつ』

零『固くなってんだからしょうがねえだろ。どんだけ溜まってるん

だよ  
『

一夏『最近、全然やってなかったからな』

零『同じ部屋なんだからいつでもやってやるよ』

一夏『それもそうだな。少し痛いがやっぱり気持ちいいし』

……………零×一夏？

ボタン！

第「何をやっているんだ貴様らは！」

零「へっ」

ブスッ

零「やべ」

一夏「グギヤアアア！！」

ゴロゴロ

グサグサ

一夏「イダダダダダダ！」

効果音の説明

ドカン 箒が扉を蹴り破る音

ブスッ 零が一夏に針を深く刺す音

ゴロゴロ 一夏が痛みで転がる音

グサグサ 一夏に刺さってた針が深く刺さる音

零「一夏の針を抜け！冗談抜きでこのままだと死ぬぞ！」

それはマズい！

その場にいる全員で一夏の針を抜くことになった。

――――

一夏に刺さった針を抜き終わったら千冬さんが部屋に戻って来て、こっぴどく怒られた。

千冬「一夏、零。汗をかいたろ。風呂に行つてこい」

零「分かったけど、酒残しといてくださいよ」

千冬「安心しろ。保障出来ん」

零「安心して行けねえよ！」

千冬「早く行かないと本当に全部飲んでしまつぞ」

零「よし。行くぞ一夏」

ボタン

千冬「お前ら、何が飲みたい？」

『??.?』

千冬「はあー、こちらで適当にこちらで選ぶぞ」

千冬は冷蔵庫から飲み物を取り出すと筧達の前に置いた。

千冬「ほらどうした。遠慮せずに飲め」

『はあー、それじゃあ頂きます』

筧達が飲み物を飲むと、

千冬「お前ら飲んだな？」

筧達は嵌められたことに気付く。

千冬「じゃあ私も」

千冬は冷蔵庫からビールを出して飲む。

『へっ』

千冬「何を惚けている。私だって人間なんだから酒くらい飲むさ。ガソリンでも飲んでいっても思っただのか？」

『はあ』

千冬「零の作った酒は後で零と一緒に飲む為に飲むわけにいかない  
しな」

（（零の飲酒は先生方に承認されてるんだ））

千冬「それでお前ら、あいつらのどこがいいんだ？」

第「一夏のことなど好きではありません！？」

鈴「そうですよ！一夏のことなんて！」

千冬「一夏とは一言も言っていないんだが」

第・鈴「あっ」

千冬「お前ら分かりやすいな」

ラウラ「教官。私は識斑一夏などには興味ありません」

千冬「分かっている。だいたい気付いてないのはあの唐変木2人組  
位だろ」

『確かに』

千冬「それで、あいつらのどこに惚れたんだ？」

ラウラ「私は零に救ってもらい。強さとは何か教えてもらいました」

セシ「わたくしは一夏さんに他の殿方と違うものを感じましたわ」

簪「私は初めてお姉ちゃんの妹としてじゃなく見てくれたからだと思います」

シャル「僕は零のなんだかって優しいところかな」

千冬「優しいか。あいつら誰にも優しいぞ」

シャル「それがちょっと悔しいところですね」

千冬「まあ、あいつらと付き合える奴は特だぞ。家事全般が出来るし、一夏はマッサージ、零は針を打つことが出来る」

『くれるんですか？』

千冬「誰がやるか。特に零はな。欲しかったら奪ってみせろ」

『は、はい』

-----

零サイド

風呂場で何故かくしゃみが止まらなかった。

風邪でもひいたか？

部屋に戻ったら一夏と手分けして、みんなにマッサージと針を打ってやった。

簾達が帰り、一夏が寝た後千冬さんと晩酌を始めたのだが、

千冬「零いー」

零「千冬さん酔っぱらい過ぎですよ」

千冬「私は酔っぱらってなどおらん」

零「いや、どう見ても酔っぱらってるでしょ！」

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。」

零「ダメだこりゃ」

千冬さん物凄いペースで飲んでたからな。

顔真つ赤だし、酒臭い。

チュツ

「はい？」

今、何された？

唇に何か触れた気がするんだが、

千冬「キスしちゃった」

零「なんですと——！  
一夏「うるさいな！。何があったんゴフツ」



千冬「うるさいな。一夏が起きるだろ」

零「今、永遠の眠りにつかされたみたいなんですけど」

千冬さんこええ。

一夏が起きた瞬間に眠らしたぞ。

千冬「もう一回キスするぞ」

零「お断りします。まさかと思えますけど外でもしてるんですか？」

俺の姉がこんなにキス魔なはずがない！

つか、結構美人の姉が外でキスしてるなんてなんかヤダ！

千冬「お前以外にはこんな事しない」

零「出来れば俺にも止めてください」

千冬「ヤダ」

久々に見たよ。そんないい笑顔。

千冬「お前がいけないんだぞ。IS学園に来てから他の女とばっかりゴニョゴニョ」

零「最後の方聞こえないんですけど」

千冬「うるさい！」

零「んな理不尽な！」

千冬「それじゃあ行くぞ」

零「なんでも言うこと聞きますから止めてください」

千冬「なんでも？」

やべ

零「撤回します。なんでもは無理です。俺が出来る範囲にしてください」

千冬「大丈夫。お前が出来ることだ」

零「なんですか？」

千冬「『千冬お姉ちゃん。一緒に寝てほしいな』と上目遣いで言え」

零「マジすか？」

千冬「マジだ」

キスカ黒歴史。

選びようなくね？

千冬「早くしないとキスするぞ」

零「はあー。千冬お姉ちゃん。一緒に寝てほしいな」

千冬「はうっ」

千冬さんが崩れ落ちた。

千冬「私はとてつもない化物を産み出してしまったようだ」

零「もういいですよ。疲れましたし、そろそろ寝ます」

千冬「そうだな。寝るとするか。一緒に」

零「それじゃあお休みなさい。……………流しそうになりましたけどもう一度言ってください」

千冬「そうだな。寝るとするか。一緒に」

零「最後の部分おかしいですね」

千冬「なにもおかしくない。お前と一緒に寝ようって言ったのだから」

零「アンタが言わせたんだから！」

千冬「お前に拒否権は無いぞ」

零「不幸だ」

夜はまだまだ続く。



## 作戦会議（前書き）

英語がマズいです。

ケータイが取り上げられそうなので次の話が投稿出来ないかもしれません。

## 作戦会議

千冬「今日は専用機持ちと篠ノ之は海岸に集まれ」

千冬さんと目があつた。

顔を赤くして目を反らした。

まあ、昨晚のことは赤面して当たり前か。

別に何も無かったからね！

えっちいのはよくないとおもいます。

『あのう、なんで篠ノ之さんもなんですか？』

千冬「専用機が手配されるからだ」

『ズルい』

『篠ノ之博士の妹だから？』

『不公平だよ』

零「その束さん曰く、『有史以来、人が平等だったことは一度も無い』俺もその意見に賛成している。現に女尊男卑が起きているんだ」

俺の発言で静かになる。

――――  
というわけで海岸

零「で、東さんは？」

千冬「待ち合わせ場所はここで合っている」

東「東さんに出てきて欲しかったら零くんが『助けて！間近でマジカルワンダーたばねさん！』と大きな声で呼んでくださーい！」

零「誰がするか！この大馬鹿野郎！」

姿が見えないのに声がしたと思ったら、何を言い始めやがる。

簪「篠ノ之博士ってもしかして」

零「うん。一周回って基本バカだよ」

東「零くん。早くしてーーーーー！」

零「言わねえぞ」

千冬「零、やれ」

零「はい？冗談ですよね？」

千冬「やれ。他の奴らも待っているぞ」

零「マジ？」

一夏達を見るとジーと『早くやれよ』と視線を送ってくる。

零「分かったよ。助けて。間近でマジカルワンダーたばねさん」

束『あれれー声が小さいよー。もう一度大きな声で』

零「助けて！間近でマジカルワンダーたばねさん！」

束「はい！零くんを助けに来たよ！」

束さんが空から降ってくる。

零「俺を助けると思つてまずあんたが死んでくれ！」

束「そんなこと言うならさっき束さんを呼んだ零くんをうPしちゃうよ」

零「すいませんでした！」

DOGEZA!

プライド？何それ食えんの？

ラウラ「すごいな。嫁をここまでペースを乱されるなんて」

一夏「零つて昔から識斑先生と束さんには弱かったからな」

零「だいたいなんで水着なんですか！」



束「昨日言っただじゃん。零くんに見せるためだよ」

バチン！

千冬「いい加減始めろ」

出席簿アタック！

束「痛いよちーちゃん。束さんの脳ミソが2つに割れちゃったよー」

千冬「良かったな。左右合わせて2つのことが同時に考えることが出来るぞ」

束「そつかー。それには気付かなかったよ！さっすがちーちゃんあったまいいー！」

簪「識斑先生は篠ノ之博士の扱いが上手だね」

零「2人は昔から親友だから」

束「そろそろ発表しちゃうよー！篝ちゃんの専用機『紅椿』だー！」

『紅椿』が現れる。

束「この『紅椿』はねー。零くんといっくんと同じ第4世代なんだよー」

シャル「第4世代って、世界各国が第3世代の開発に苦労してるっていうのに」

零「まあ、『シンデレラ』は扱うのが激難。『白式』は束さんが作るのを途中で飽きたのを調整した欠陥品だけだな」

鈴「スペック高いのにまともな奴ないじゃない」

一夏「束さんだし」

妙な説得力

セシ「あのう、篠ノ之博士。わたくしの『ブルー・ティアーズ』を見てもらいたいんですが」

束「初対面なのに馴れ馴れしいよ。これだから外国人は。やっぱ、日本人に限るよね。日本人が好きってわけじゃないけど」

零「セシリア諦める。それでも丸くなった方なんだから。束さんは識斑女史、第、一夏、俺だけで世界を構成してるから」

がん無視よりはマシだろ。

プルプル

千冬「私だ」

千冬さんのケータイみたいです。

千冬「それは本当か！？分かった。すぐ戻る」

零「何かあったんですか？」

千冬「現時刻より特別任務を開始する。貴様ら着いてこい」

――――

で、なんかSFでよくある司令室的なところに連れてこられました。

千冬「では現状を説明する。ハワイ沖で試験稼働であった『銀の福音』以降『福音』とする。『福音』が制御下を離れ暴走。監視空域を離脱したと報告があった」

一夏と箒は啞然としてる。

千冬「衛星写真によると二時間後にここから200キロ南を通過するらしい。その撃退を任された」

任されたね。

千冬「教員は訓練機で海上の規制を行う。だから『福音』の撃退はお前らに行ってもらおう」

セシ「分かりました。『福音』の詳細データをください」

一夏「死ぬかもしれないんだよね？」

鈴「代表候補生なんだから死ぬ覚悟は出来てるのよ」

零「あー」

千冬「作戦途中に欠伸とは何事だ！馬鹿もん！」

ガシッ

出席簿が当たる前に千冬の腕を掴む。

零「馬鹿もん？ああ、この空気に吞まれてる奴らのことですか」

ラウラ「何を言ってるんだ？」

零「気に入わねえんだよ。死ぬ覚悟？そんな物は丸めてゴミ箱に捨ててこい！」

鈴「甘いこと言ってるんじゃないわよ！」

零「言い方を変える。死ぬなら勝手に死ぬ。だが死んで他人に迷惑をかけるな」

千冬「貴様の言いたい事は分かった。オルコット、鳳、デュアノ、ボーデヴィツヒは作戦から外す」

鈴「どういうことですか！？」

零「まだ分からねえのか？いくらIS学園が他国から影響を受けねえからと言っても他国の代表候補生が死んだら大事だろうが。下手したら珍しい男の操縦者の俺が一夏を代わりに超越せと言ってくる場合もある。出来れば簪も外したかったがまあいいか。識斑女史、簪は外せ、『紅椿』の稼働時間が短過ぎる」

千冬「そうだな。篠ノ之も作戦から外れる」

零「開発していたハワイと通信繋がってますよね？ちょっと話した

いことがあるんですが」

千冬「構わないが」

『私が稼働試験の第一責任者だ』

零「聞きたいことがあるんですが、『銀の福音』のデータはこれで合ってますよね？」

さつき、セシリアが渡された物を見せる。

『そうだが。何か問題でも？』

零「嘘こけ。これが本当に『銀の福音』のデータなわけねえだろ」

『何？』

零「さつき衛星の写真で『福音』を見たが、あの形でこの程度のスペックのわけねえんだよ」

『ガキが何が分かるんだ？』

零「子供だからって舐めるなよ。こっちは1000種を超えるISのデータを見てんだ」

『1000種？そんなにISの種類があるわけないだろう』

零「使われなかった設計図も見てるって言うてんだよ。東さんが考えた設計図に手を出したら1000程度じゃきかねえがな」

『束？まさか篠ノ之博士か？』

零「まあ、いい。このデータがあてにならず、加減が出来なくなら、コアを破壊した。ということになってもしょうがないな」

『ちよつと待つてくれ！コアを破壊？そんなこと出来るはずが』

零「IS学園に侵入した無人機のコアを稼働中に破壊したのは俺だ。まあ、破壊する可能性なんてないよな。このデータが合つてないなんてことはないらしいから」

『すまなかつた！機密事項だから渡せなかつたが、こつちが本物の『銀の福音』のデータだ！』

零「あん？そんなこと知るか！こつちはこつちで好きなようにさせてもらう！」

『頼む！『銀の福音』の暴走の上にコアを失つたなんてことになったら私は』

零「しょうがないなー、貸し10ね」

『桁が一つ多いような気が』

零「文句ある？」

『ありません！それではデータを送らせてもらいます！』

零「じゃあ、またね」

一夏、箒、鈴（英語が分からない組）以外は顔面蒼白。

一夏「零のやつ何やったんだ？」

簪「今回の責任者に無理矢理貸し作っちゃった」

分からない組「はっ？」

簪「しかも貸し10」

分からない組「ええーーーーー！？」

一夏「零に常識は通用しねーな」

箒「さすが歩く理不尽」

零「聞こえてるからなー。これが本物の『福音』のデータか。やっぱ、スペックが全然違うじゃねえか。まあ、なんとかなるだろ。俺が行って墮として来ますよ。織斑女史、それでいいですか？」

千冬「バックアップとして一夏と更識をつける」

零「構いませんよ。じゃあ、準備しときます」

—————

10分後

千冬「零、作戦が変更になった」

零「何故ですか？」

千冬「束の奴が自分の提案した作戦を使わないならIS学園からコア所持の権限を取り上げると言いはじめた」

零「はあー、全くあの人は」

千冬「一夏の零落白夜による一撃必殺だそうだ」

零「それをやるには一夏を運ぶ必要がありますね」

千冬「それは篠ノ之が行う」

零「そこまでして筈を出したいか。ならバックアップには俺が出ます」

千冬「分かった。許可する」

さて、一夏がやられないようにどうやって運ぶかな？



## 福音（前書き）

テストがいろんな意味で終わった。

次回が投稿出来ればいいんですが。

## 福音

千冬『一夏、零、篠ノ之。聞こえるか？』

ISのプライベートチャンネルで千冬さんの声が聞こえる。

千冬『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間で決着を心がける』

零「了解」

第『織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればいいのですか？』

千冬『そうだな。だが無理はするな。零も言っていたがその機体は動かして時間が経ってない。何が起きるのか分からないからな』

第『はい！分かりました。出来る範囲で努力します』

浮かれてやがる。

千冬『一夏、零』

一夏『は、はい』

零「はい」

千冬『どうやら何故か篠ノ之は浮かれているようだ。あんな状態では何か作戦に支障をきたす。なにかあったらサポートしてやれ』

一夏『分かりました。心がけます』

零「分かってます。そもそもその為に俺が参加してるんですから」

千冬『頼んだぞ』

まあ、密航船にも注意するように言っただから平気だと思うが。

千冬『では、開始だ!』

――――

飛行中

零「なあ、箒」

箒『なんだ?』

零「そんなに専用機が手に入って嬉しいか?」

箒『嬉しいがってなどいない』

零「そうか?今のお前一年前と同じ顔してるぞ」

箒『そんなことは』

零「無いつて言うのか?お前は自分で力と強さは違う物だと気付いたのに、二度同じ間違いを侵すのは馬鹿のすることだぞ」

箒『私は』

零「意志の無い力はただの暴力だ。その力がなんの為の力なのか良く考えとけ」

一夏『見えたぞ！』

一夏の言う通り、『福音』が飛行している。

零「一撃で決めてこい！」

一夏『テーマソング！』

一夏がテーマソングを発動し、『福音』に零落白夜で切りかかったが、ギリギリのところで気付かれ避けられる。

一夏『くっ、もう一度』

零「援護する！」

一夏は体勢を整え、もう一度『福音』に向かう。

俺もマンイーターで後ろから援護の形を取る。

『福音』もこちらを向き、『銀の鐘』を発射。

零「一夏。行けるな？」

一夏『ああ。簪の《断片集》の方が多い！』

一夏は攻撃を避けながら『福音』に近づいていく。



さすが零だな。また助けられた。

一夏「助かったぜ。れ……い？」

攻撃を受け切った《カーニバル》が消えていく。

零を見ると。《シンデレラ》が解け、海に堕ちて行く。

一夏「零いいい……」

ドポン！

千冬「作戦は失敗だ！零を回収して帰還しろ！」

一夏「箒。零を拾ってきてくれ」

箒「構わないが、お前は」

一夏「零の仇を討つ」

千冬「馬鹿もん！零がデータを知っている相手に負けたと思ってるのか！《福音》はセカンドシフトしているんだぞ！」

一夏「だから？」

白式の色が黒に変わっていく。

一夏「軍用のISが暴走して気の毒だな。アンタがどんな人かは知らない。力の差がどれだけあるかは知らない」

白式の色が全て黒に変わった。

一夏「しかし、だからと言って、俺はお前を許さない！！」

ドコン！

一夏が《福音》を殴りつけ《福音》がぶっ飛ぶ。

今の《白式》いや、《黒神》がどんな物分かる。

一夏「ISには絶対防御があつたな。安心したよ。つまり4発までは大丈夫ということだな。《黒神》で本気で殴っても！！」

《乱神モード》これが今の《黒神》の状態。

一夏「俺は筈と学んだ剣道。零から教えてもらって剣術。千冬姉から受け継いだ雪片式型。その技術、刀をお前相手に使うことはない」

拳を握る。

一夏「何故ならそれらは家族、友人の崇高な技術だ。衝動的な怒りに任せて使うようなものでは決してない」

零、今から俺はお前が嫌いなことをする。

一夏「だから俺はただの衝動的な怒りに任せて暴力に訴え、人間ではなく獣のようにお前を撃つ！！」

ドコン！

一夏の二発目が入る。

第『一夏!』

第が零を抱えている。

一夏「零を連れてもう戻れ。ここからは俺1人でやる」

《福音》が《銀の鐘》を使用する。

セカンドシフトしたので、さっきより攻撃の数が多い。

一夏「全方位からの弾幕攻撃か。避けるのは難しそうだが」

攻撃を受けながら《福音》に突っ込む。

一夏「最初からあえて食らうと決めていれば、攻撃が一番薄い所を進めば我慢出来ないことはない!」

ドコン!

3発目の一夏の攻撃。

《福音》は近くの島に叩きつけられる。

一夏「早く立て! 零を倒した《福音》のセカンドシフトがこの程度のはずがない!」

しかし、《福音》はダメージを受け過ぎて動けない。



一夏「終わりか。ならこれで最後だ。お前に明日はない」

一夏が《福音》を殴ろうとした。

ガシッ

箒「一夏、やり過ぎだ。お前は私のようになるな」

箒が《紅椿》で一夏を止める。

ズバッ

箒は《福音》を斬り付け、シールドエネルギーを0にする。

一夏「箒、ごめん」

箒「謝らないでくれ。元と言えば私が悪いのだから」

一夏「ありがとう」

化け物みたいな俺を止めてくれて。

???「うつ」

《福音》の操縦者が気付いたみたいだ。

???「あなたが助けてくれたの？ありがとう」

止めてくれ。

お願いだから、ありがとうなんて、そんな聞くに堪えない言葉……  
言わないでくれ。

俺にそんなこと言ってもらう資格はない。

俺は、あるうことがーあなたを殺そうとしていたのだから。

ハッキング？（前書き）

英語が赤点なのかまだ分かりません。

それは置いといて今回は零が全然出ません。

やりにくい。

ハッキング？

旅館のとある一室

ベッドに零が寝ており、それを一夏が見ている。

一夏「零」

帰還時

千冬「零とナターシャを医務室に運びこめ！」

零と《福音》のパイロットのナターシャが担架に乗せられ運ばれていく。

千冬「一夏、篠ノ之。作戦は成功だ。よくやった」

千冬姉が絞りだした声で言った。

現在

ボタン

一夏「織斑先生」

部屋に入ってきたのは千冬姉。

千冬「今はプライベートだ。千冬姉で構わない」

一夏「千冬姉。俺、弱いな」

千冬「お前は強いよ」

一夏「弱いよ。結局守られてばかりで何も守れない。何かを守れない力なんて無いのと同じだ」

千冬「……………」

一夏「俺、強くなりたい」  
ガシッ

千冬姉に抱かれ、長い時間泣いた。

—————

山田「なんでこのタイミングでこんな偶然あり得ない！」

この旅館に向かい、日本、フランス、イギリス、ドイツ、中国、ロシア、ブラジルのフォーマツトされてない専用機が暴走し飛行。

山田「誰かがハッキングした？」

白騎士事件の時に世界中の軍事システムがハッキングされた。

あの時の規模のハッキングが何故この旅館に向けて？

そんなことより織斑先生に報告しなきゃ。

—————

一夏サイド

千冬「今回の作戦だが、私が出る」

一夏「千冬姉。そんなの無茶だ」

バシン

千冬「織斑先生だ」

セシ「ですが、一夏さんの言う通りですわ」

シャル「織斑先生がいくら世界大会の優勝者だとしても訓練機で六体の専用機を相手にするのは無謀過ぎます」

千冬「これ以上生徒を危険な目に合わせられるか!」

千冬姉が大きな声で言った。

千冬「……………すまん。しかし、私があの時にもっと違う作戦を考えていたら。零があんな目に合わなかったはずだ」

一夏「千冬姉」

俺はさつき千冬姉に抱かれ泣いたが、俺と同じくらい辛く、泣きたかったに違いない。

千冬「だから今回は生徒を出す気はない」

山田「織斑先生。私も行きます。なんたって先生ですから」

山田先生が胸を張り言う。

千冬「山田くん」

ラウラ「教官。私達は旅館に待機、防衛に徹底します。ですから思う存分戦ってきてください」

ピシッ

千冬「織斑先生だ。……………頼んだぞ貴様ら」

軽い出席簿アタックをし、背を向け言う。

プルプル

誰かのケータイになる。

空気読めや。

しかし、ケータイの着信音は複数ある。

出たのは鈴、セシリア、ラウラ、シャルロット。

鈴「はい。えっ、それは本当なんですか？はい分かりました」

ガチャッ

鈴「本国から任務を与えられました。中国の専用機は私がなんとか

しろ。」と

簪「そんな」

マジで空気読めや。

他のみんなも似た内容だったみたいだ。

千冬「くつ。腐った政治家共め」

簪「どういうことですか？」

千冬「こちらに貸しを作りたくないんだ。貿易などで弱みになる可能性がある。それに専用機のデータを漏らしたくないんだろっ」

一夏「そんな事どうでもいいのに」

千冬「それが政治だ。代表候補生だから断ることも出来ん」

一夏「それじゃあ」

千冬「ああ。オルコット、デュノア、ボーディッヒ、鳳は参加させるしかない。くそっ！」

結果、中国を鈴、イギリスをセシリア、フランスをシャルロット、ドイツをラウラ、ロシアを千冬姉、ブラジルを山田先生が受け持つことになった。

俺、簪、簪は突破された時のために旅館でISを展開させ待機。



みんなISの調整を始める。

俺も今の状態が《白式》なのか、《黒神》なのか確認するか。

一夏「あれ？おかしいな」

箒「どうしたんだ？一夏」

手についた黒くなったガントレットを見る。

一夏「ISが出せない」

## スペック強化（前書き）

前回、専用機を相手する配分に日本を入れ忘れしました。

千冬が日本も相手するという作戦にします。

英語が赤点なのかいまだ分かりません。

## スペック強化

一夏サイド

結局、俺のISは出せないままだった。

束さんに見てもらったが、原因不明。

束さんが分からないって結構マズい状態だよな。

ISが出せないので今回の作戦は参加することが出来ず、零の寝てる部屋で待つことにした。

――――――――――

鈴サイド

私の相手する機体はミサイルの一斉射撃がメインなのよね。

簪の《断片集》より数が少ないし、追尾もしないけれどリロードの時間が短いのよね。

まあ、なんとかなるわよね。

鈴「来たわね」

相手も気付いたみたいで、黒い箱を出現させる。

その箱からミサイルが発射される。

鈴（《断片集》より少ないって言っても数が多いわね）

ヒュン

鈴「まあ、簡単に避けられるけど」

また黒い箱からミサイルが発射される。

鈴「だから意味ないっ!？」

真下からもミサイルが向かってくる。

ギリギリで避ける。

鈴「危なかった。発射口が2つもあるなんて渡されたデータより多い。これくらいならまだいける」

ヒュッ

ズドン!

鈴「かはっ?」

発射口だった黒い箱の直接攻撃。

2つの発射口は鎖でつながれ、ふりこのようにハンマーとして使用されている。

鈴「これはちょっとマズいかもしれないわ」

――

セシリアサイド

相手のISは近接型。

中距離型のブルー・ティアーズの敵ではありませんね。

一夏の時と同じ発言している鶏頭。

セシ「踊りなさい！ブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

相手のISに発射されたレーザーは直撃し、煙があがる。

セシ「これが祖国のISと考えると泣けてきますわね」

煙の中から無傷のISがレイピアを構え、向かってくる。

セシ「無傷ですって！？」

レイピアを避け、もう一度レーザーを発射する。

セシ「吸収してる？」

敵ISの周りに電気の膜が張られ、レーザーのエネルギーを吸収している。

セシ「相性が悪いのはこちらの方ということですね」

――――

ラウラサイド

零が倒れた今、私がなんとかしなければ。

相手のISを早く倒し、他のみんなの援護に行こう。

ラウラ「直接突っ込んでくるとは馬鹿目！」

敵ISはランスを構え、突進してくる。

それをAICで止めるが、

ズドン！

ラウラ「何っ！？」

AICで動きを止めた敵ISは消え、後方にいる敵ISのランスからのミサイル攻撃を受けていた。

ラウラ「どういうことだ？」

敵ISが二体が増える。

試しにレールカノン《バリツツ》を撃つと片方は避け、片方は直撃し風船が割れたように消える。

ラウラ「ダミーか。情報に無かったぞ」

これじゃあ、A I Cは使えないな。

ラウラ「援護に行くのは無理みたいだな」

――――

シャルロットサイド

デュノア社を買い取ったところが作ったI Sか。

デュノア社は親が経営していたものだが、その2人が行方不明になったので、シャルロットに権限が移った。

シャルロットは自分の手には余ると考え、売却した。その時零が上手いように交渉を行い、莫大な財産を手に入れ、シャルロットに専用機保持の継続を認めさせた。

話を戻す。

敵I Sは基本的なパラメーターのバランスタイプ。

第二世代だが誰でも扱いやすい機体になっている。

相手のデータを知ってる分こつちが有利だけど油断をしちゃダメだね。

シャル「行くよ！」

マシンガンを発射する。

敵I Sは簡単に避ける。

シャル「あれ？避けられるのは予想してたけど動きが速くない？」

――――

山田サイド

私の相手はブラジルの専用機一体のはずですよね？

山田「なんですか？この数は！？」

量産機100体。

山田「肝心の専用機は見当たりませんし、この量倒すのは時間がかかりすぎますよ！」

ブラジルの専用機は旅館に向かい続けている。

――――

千冬サイド

千冬「邪魔をするな！」

日本とロシアのISを倒すために向かっていたら、正体不明の専用機に襲われた。

千冬「何者だ！」

???「いくらブリュンヒルデでも訓練機では私には勝てないよ。



《姉さん》」

千冬「!?!」

日本とロシアのISも旅館に向かっている。

――――

簪サイド

第「簪。織斑先生と山田先生のところでアクシデントが発生して、日本、ブラジル、ロシアの専用機がこの旅館に向かっている」

簪「最優先事項はこの旅館を守りきることに」

第「しかし、こちらは二機だ。三機相手にするにはもたないぞ」

簪「私が二機相手する。任せて、これでも日本大学だから」

第「いや、私が二機相手する。その間に残りの一機を倒してくれ」

簪「ダメ。危険すぎる」

第「頼む。やらせてくれ。簪が来るまで守りきってみせるから」

簪「はあ、分かった。そんな顔されたら任せるしかない」

今にも泣き出しそう。

顔「日本とロシアの相手をして。すぐに行くから」

箒「ああ。絶対に守りきる」

2人は敵ISに別の方向に向かい飛んだ。

ブラジルの専用機。

大丈夫。このスペックならすぐに箒のところに向かえる。

簪「すぐに終わらせる」

《断片集》をフルで展開し、発射。

これで終わったと思われたが、

全てのミサイルを撃ち落とし、敵ISには一発も当たらなかった。

簪「《断片集》と同等の発射量って、そんなの情報になかった！」

ミサイルのリロードにはまだかかるようだが、また同じことを繰り返し返しても意味がない。

簪「早く箒のところに行かないといけないのに」

――――――――――

箒サイド

敵は二機。圧倒的に不利。

勝とうなんて思わない。

絶対に守りきる。

第「ここから先は一步も通さない！」

――――

千冬サイド

千冬「マドカか？」

マドカ「当たり前だよ。姉さん」

千冬「マドカ。二度目だ。邪魔をするな」

マドカ「あの二機を倒しても無駄だよ。ハッキングしたISには改造が施されてる。全てを倒す前に専用機持ちが終わるよ」

千冬「だからと言って諦められるか！」

マドカ「無駄だからといっても全てが終わるまでここにいてもらうけどね」

## 正喰者

一夏サイド

一夏「くそっ！俺のせいで篤が二機も相手することになるなんて！」

全員が傷つき、ピンチだという情報が一夏の元に入ってきた。

一夏「ISさえ動けば……」

零の待機状態の《シンデレラ》が光る。

ワンオフアビリティー《リアルイーター正喰者》

黒かった待機状態の《白式》は白に戻っていく。

—————

鈴サイド

シールドエネルギーが3分の1まで減ってる。

ハンマーのような攻撃を避けようとしたらミサイルの発射で軌道を変えるから攻撃が不規則過ぎてマズい。

鈴「このままじゃ負ける」

ガラス色の羽が《甲龍》を包む。

鈴「《カーニバル》？」

《カーニバル》が消えた時、《甲龍》の形が変わっていた。

《双天牙月》以外の装備が無くなり、武器の割に合わず小さい。

《浅龍》

ミサイルが鈴に発射される。

発射されたミサイルを鈴が見た。

鈴「凶れ」

ミサイルが捻れ、耐えられなくなり爆発する。

《浅龍》の《歪曲》は衝撃胞ではなく、空間自体に攻撃する。

敵ISは発射口2つ同時に発射する。

鈴「凶れ！」

一方のミサイルを見て曲げる。

鈴「凶れ！」

もう一方のミサイルを見て曲げる。

《歪曲》の発動条件は視認と位置指定。

よって、同時攻撃の場合は発動が遅れる。

鈴「まずは邪魔なそれを曲げる」

鈴「凶れーーーー!!」

発射口がゆっくり曲がり、爆発する。

敵ISはミサイル、発射口が効かないと分かっただけでさあ武器を捨てた。

敵ISは重りとなっていた発射口を捨てたことにより速い。

鈴「一夏の方が全然速いわよ」

《双天牙月》で肉弾戦に持ちこもうとした敵ISをぶっ飛ばす。

そして、

鈴「まっがれーーーー!!」

敵ISに直接《歪曲》を発動する。

絶対防御があるため簡単に曲がらないが、ミシミシ音を立て、シールドエネルギーが減り、

ついに機体が曲がり、ねじ切れ真っ二つになる。

鈴「人が乗ってたなら簡単に使えないな。こりゃ」

――

セシリアサイド

《ブルー・ティアーズ》はそもそもレーザー系を売りに作られた機体なので、敵ISのレーザー系無効のバリアに通用するのはセシリアが苦手とする近接武器のみ。

つまり、大ピンチ。

そんな時、《カーニバル》が《ブルー・ティアーズ》を包む。

そして、《ブルー・ティアーズ》の形が変わる。

6つのビットは7つの杭になった。

《ブルー・トゥルース（青き真実）》

セシ「いきなさい。魔女の家具、煉獄の七杭！」

7つの杭が室内で投げたスーパーボールのように動きだす。

7つの杭にレーザー系無効のバリアは意味が無いので、シールドエネルギーを削っていく。

敵ISはバリアを切り、エネルギーをレイピアに回す。

セシ「ダメです。ダメです。全然ダメですわ」

人差し指を向ける。

セシ「これがわたくしの青き真実」

《赤き制裁》に似た青いレーザーが発射され、敵ISのシールドエ  
ネルギーは避けられず、0になる。

――――

ラウラサイド

AICが使えないだけでこんなにも力が発揮出来ないなんて。

ダメージはそこまで受けていないが、攻撃がまだ3発しか当たって  
ない。

《カーニバル》が《シュヴァルツェア・レーゲン》を包む。

形はほとんど変わらないが少しプラズマが発生している。

《シュヴァルツェア・クリエイト（黒い帝）》

ラウラ「お前はいつまでその態勢でいるつもりだ？『跪け』」

ラウラが言った瞬間に敵ISは跪く。

ラウラ「それでいい」

敵ISは無理矢理立ち上がる。

ラウラ「ほう。少しはやるようだな。それでは私も本気を出すとし  
よう。『ひれ伏せ』」



さっきの比べものにならない重さが敵ISを襲つ。

ラウラ「もう終わりにするぞ。《過剰なる重税》」

ラウラは敵ISの頭を掴むとプラズマが強くなる。

手を離れた時には敵ISのシールドエネルギーは0になっていた。

ラウラ「私の徴収率は100パーセントだ」

—————

シャルロットサイド

バランスタイプって聞いてたけど、このスペックはバランスというよりオールマイティー。

シャル「少し強過ぎない？」

《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》《カーニバル》が包む。

軽量化されスリムな形になる。

《ラファール・リヴァイヴ・カーペット》

シャル「零が心配だな。だから殺す。

どうして一夏のISが動かないのはなんでだろう?だから殺す。

敵の情報が間違ってた。だから殺す。

今日はいい天気だな。だから殺す。

零の料理美味しかったな。だから殺す。

特に何も無し。だから殺す」

《ラファール・リヴァイヴ・カーペット》の操縦者への影響、殺人衝動。

シャル「君を殺すのはこれだ」

刀 斬殺

切りつけるが避けられる。

シャル「これじゃダメか。なら」

多刀 惨殺

大量の刀を投てき。少しだがダメージを与えた。

シャル「次はこれだ」

多銃 銃殺

ピストルを撃ちまくる。

弾が切れるとリロードをせず、捨てて次のピストルを使う。

少しずつだが、シールドエネルギーを削っていく。

シャル「使いきっちゃった。じゃあ」

狼牙棒 撲殺

敵ISは振りかざした狼牙棒を剣で切る。

シャル「わあ、凄い。だから殺す」

手榴弾      爆殺

狼牙棒を捨て、手榴弾を投げ、爆破。

シャル「武器はこれで最後だ」

ミサイルランチャー      虐殺

ミサイルを直撃だが、シールドエネルギーが僅かに残る。

耐えきつた敵ISは近接戦を行おうと突っ込んでくる。

シャルの姿はいきなり消え、敵ISの後ろに周りこむ。

ナイフ      必殺

シャル「さっき言った武器の数は嘘だよ」

ズシャン！

――――

簪サイド

防御力が高過ぎる。千刀の攻撃力じゃ、歯が立たない。

《断片集》なら破れるけど敵ISは同じタイプの攻撃で相殺してくる。というか敵ISは《断片集》の為だけに使ってるんだよね。

簪「箒のところに行かないといけないのに」

《カーニバル》が《打鉄式》を包む。

大きなカバンを抱えている。

千刀をしまい、カバンを開く。

カバンの中から化物が飛び出す。

《傷んだ赤色》

化物が敵ISのシールドエネルギーを削っていく。

敵ISは《断片集》対策のミサイルを化物に向けて発射する。

煙の中から敵ISは簪に向かって進んでくる。

簪「化物の三つの定理。一つ化物は恐れられなければならない。一つ化物は正体不明でなければならない。一つ化物は不死身でなければならない」

敵ISの後ろからさつき消し飛んだはずの化物が襲う。

化物が敵ISを襲ってる間に簪は距離をとる。簪「さつきその子にミサイル使っちゃったよね？」

《断片集》による爆撃。

簪「簪の援護行かなくちゃ」

――

簪サイド

しかし、二機相手は厳しいな。簪が来るまで私が守りきらなければ。

《紅椿》を《カーニバル》が包む。

武器が変わる。

簪「木刀!？」

さっきまで使っていた《雨月》と《空裂》が無くなっており、木刀を一本握っている。

簪「こんな武器で戦えるわけないだろ」

そもそも私はなんの為に戦っているんだ？

何故、姉さんに頼んでまで専用機を作ってもらったんだ？

一夏「待たせたな。簪」

簪「一夏?」

一夏「後は俺に任せろ」

篤「いや、片方は私がやる」

一夏「そっか。それじゃロシアのISは任せたぞ。いい顔になったな。篤」

一夏は日本のISに向かう。

そう。一夏の横で戦うために力が欲しかった。

木刀で敵ISに向かい突きのモーションをする。

木刀の先からレーザーが発射される。

《王刀 鋸》

毒の無さ。所有した者の悩み、不安などの負の感情を払拭する。

出すことが出来なかったもう一本の刀を出す。

敵ISに向かいその刀を振ると斬激が飛ぶ。

《斬刀 鈍》

切れ味の徹底。切れない物はないと言えるほどの切れ味。振り抜くと発生する斬激は機能ではなく、《斬刀》が生み出す物。

篤「今の私は誰にも負ける気がしない」

《斬刀》で敵ISをぶった切る。

冒頭

一夏サイド

零の待機状態の《シンデレラ》が光った時、一夏の目の前が真っ白になる。

???「力が欲しい?」

白いの少女と黒い少女が問いかけてくる。

一夏「欲しい」

???「どうして?」

一夏「守りたい奴がいるんだ。そいつだけじゃなく、みんなを守る力が欲しい」

???「分かった」

一夏はそこで目が覚める。

黒くなっていた待機状態のISが白に戻っている。

一夏「零。ちょっと行ってくる」

一夏「待たせたな。箒」

箒「一夏？」

一夏「後は俺に任せろ」

箒「いや、片方は私がやる」

一夏「そつか。それじゃロシアのISは任せたぞ。いい顔になったな。箒」

俺は日本のISのところへ向かう。

《白式》の形は変わっている。

一番変わっているのは真っ赤なブルゾンを模した装備が付属されたこと。

《白織》

握っている武器は《雪片式型》ではなく、峰まで白銀の刀。

敵ISがこちらにミサイルを発射する。

一夏は持っている刀で一刀両断する。

そして敵の攻撃を片っ端から切断していく。

《雪片式型》の時のようにシールドエネルギーが減ってはいない。



いや、《雪片式型》ほどではないが減っているのだが、それを上回る速度で回復していく。

《妖刀 障り猫》

《雪片式型》より少ないがシールドエネルギーを消費していくが、切った物のエネルギーを奪っていく。

《障り猫》の攻撃力は他の刀と同じレベルなのだが、

一夏「見える」

ハイパーセンサー型ワンオフアビリティー《直死の魔眼》

一夏の目の色が青くなる。

《直死の魔眼》で見ると綻びが見え、その綻びをなぞるように切るとなんでしょうと死に到らしめる。

一夏「終わりだ」

敵ISのシールドエネルギーはまだ残っているが、絶対防御の綻びを《障り猫》で切られたら関係がない。

――――

千冬サイド

マドカ「どうやら全員負けたみたいね」

千冬「あいつらはやったのか」

マドカ「それじゃ、戻るね。姉さん。代用品によろしく」

織斑マドカは消える。

千冬「はあ、危なかった。専用機の作成を急いだ方がいいみたいだな」

ロキ

零サイド

零「ここは教室？」

確か俺はセカンドシフトした福音にやられて。

零「地獄つてのは教室のことだったのか？」

「???」おいおい。教室が地獄なわけないだろ。人は死んだらそれまでさ」

いつの間にか教卓の上に少女が座ってる。

「???」まあ、君の場合は違うけど」

零「久しぶりだな。ロキ」

俺をいろんな世界に連れていき、物語が変わるのを楽しんでいる神。

ロキ「10年ぶりだね。いつまでたっても死なないから待ちくたびれたよ」

零「じゃあ、とつと次の世界に連れてけ」

ロキ「そう焦るな。ISの世界での物語はまだ終わってないよ」

零「ここに来たということは死んだんだろ」

ロキ「正確には死にかけたんだよ。だからISの世界に戻ってもらうよ」

零「じゃあ、早く戻せ」

ロキ「せっかちすぎるよ。君は。少しはアタシの相手をしてもらわないと」

零「まあ、いいか。ならいつもの部屋に連れてけ」

ロキ「教室の扉とリンクしてあるから移動しようか」

教室の扉を開けると某魔女達がお茶会をしていた部屋に似た空間に繋がっている。

ロキ「確かストレートティーだっけ？」

零「ああ。紅茶はストレートしか認めない」

何もなかったテーブルの上に紅茶の入ったカップが現れる。

ロキ「はい。どうぞ」

零「相変わらずこの部屋ではなんでもありだな」

ロキ「アタシ専用の世界だから」

零「それもそうか」

ロキ「零くん。力が欲しくない？」

零「いらねえよ。今のままで充分だ。力をやるなら一夏あたりにく  
れてやれ」

ロキ「この世界にいた零くんならそういうと思ったわ」

零「じゃあ、最初から聞くな」

ロキ「零くんには人間に力を与える力を与えるわ。今回はオリキャラを入れる隙があまりにないから」

零「オリキャラが入れないってのは？」

ロキ「力については聞かないみたいね」

零「お前が与えるっていうなら拒否出来ないだろ」

ロキ「確かにそうね。オリキャラが入れないって言ったけど、そも  
そも男子の方はISを動かせる男子は1人っていう前提を崩したか  
ら出してもIS乗れないのよ。女子の方はこれ以上ヒロインを増や  
したら作者がまとめられなくなるから」

零「メタ発言はやめろ」

ロキ「ごめんなさいね。出たのが久しぶりだから口が滑ったわ」

零「気をつけろよ」

ロキ「そろそろいいかしらね」

零「どういうことだ？」

ロキ「さっき与えた、人間に力を与える力が発動したころなのよ」

零「俺は何もしてないぞ」

ロキ「その能力は基本的にランダムなのよ。複数の味方がピンチになった時とか」

零「それって、味方に主人公補正を発動させるって能力じゃねーか」

ロキ「まあ、そういうことね。強力だから滅多に発動しないし」

零「はあ。あいつらなら力を上手く使ってくれると信じるしかないな」

零は立ち上がり扉の方へ向かう。

零「そろそろ俺は行くぜ」

ロキ「制限が外れたし、これからは気が向いたらこっちから連絡を入れるよ」

零「重要な時だけにしてくれよ。またな」

零が部屋を出て、扉が閉まる。

ロキ「久しぶりだけど楽しいものね。好きな人とお喋りするのわ」

――

元の世界

零「東さん」

東「何かな？零くん」

零「ちょっと聞きたいことがあります」

東「奇遇だね。私も零くんに聞きたいことがあったんだよ」

零「《福音》をいじくったのはあなたですね？」

東「《白式》を改造したのは零くんだね？」

2人の声が重なる。

零「世界中の軍事施設をハッキングして『白騎士事件』を起こし、ISを認めさせ、ゴレム6機を投入し、俺と一夏を世界中に見せ、《福音》をハッキングして、筈を認めさせようとした」

東「《白式》は白から変わることはなかった。《白騎士》からもじった物だから白だから意味がある。《零落白夜》のエネルギー消費の調節の時に何か入れたね？そもそも私が分からないプログラムを組む人なんて零くんしかいないでしょ」

零・東「「なんのことやら」」

東「だいたいあのワンオフアビリティーはなんなのさ？世界中の科

学者が出来ないことを簡単にやってのげるなんて」零「それは束さんだって変わらないでしょ。それにあの能力は神の悪戯。俺だって予想外だったんですよ」

束「またまたー。神様がいるなら楽しそうだね」

零「信じてないでしょう」

束「零くんはこの世界にいて楽しい？」

零「楽しいですよ。みんなと過ごせることがとても楽しい。束さんと一緒に過ごせたらもっと楽しいと思うんですけどね」

束（いきなり何を言い出すかな！？告白だよね？これは告白と受けとって良いよね？）

零「俺がここまでの技術を身につけたのは束さんにこの世界に飽きて欲しくなかったからなんですよ」

束「分かったよ。零くんの言いたいことは分かったよ。でも少し待ってて。零くんと一緒に過ごすにはもう少し時間がかかる」

零「そうですか。じゃあ、待ってます」

束（零くんがいるというだけでこの世界も捨てたもんじゃないね）



### 3 卷エピソード（前書き）

赤点ありませんでした。  
ケータイ死守。

### 3 卷エピソード

零サイド

IS暴走事件の夜

零「箒。ちよつといいか？」

箒は一夏を除く他の専用機持ちと一緒にいた。

箒「なんだ？」

零「二人つきりで話したいから廊下に来てくれ」

箒「分かった」

箒は廊下に出る。

箒「いつたいなんだ？」

零「ほれ、誕生日プレゼントだ」

封筒を渡す。

箒「覚えていたのか」

零「義妹の誕生日くらい覚えてるよ」

箒「すまない。今年は何も出来なくて」

零「構わねえよ。俺はそこまで誕生日を重要視してねえから」

第「そうか。封筒の中身はなんなんだ？」

零「一夏の寝顔写真厳選された5枚」

第「恩に着る！これは我が家の家宝にする！」

零「喜んでもらえたのは嬉しいが、家宝にされるのは困る」

第「そうか。後世に残そうと思ったんだが」

零「聞かなかったことにしといてやる。後、一夏もプレゼントを用意してるからロケーションをセットした。海岸で待ってるように言ってる。昨日見せられなかった水着を見せてやれ」

第「それは嬉しいんだが、水着？」

零「もう少し積極的になれよ。ライバルは多いんだから取られちゃうぞ」

第「そうだな。姉さんも同じことを言ってたし、そうしてみる」

零「束さんと仲直りしたみたいだな」

第「そもそも私に問題があったんだ。それも簪達を見てたら吹っ切れた」

零「それは良かった。それじゃあ、そろそろ一夏のところに行つて

こい」

箒「ああ」

箒は自分の部屋に水着を取りに向かう。

さて、他の専用機持ちが邪魔しないように相手しますか。

専用機持ちがいる部屋に入る。

シャル「箒と何を話してたの？」

零「箒が誕生日だから誕生日プレゼントを渡してたんだよ」

『ええーーーーー！』

零「何？もしかして箒が誕生日だってこと知らなかったのか？」

『うん』

零「マジか。いくらなんでもそりゃないだろ」

簪「帰ったら何か上げなくちゃ」

鈴「そういえばそういう話全然してなかったわね」

ラウラ「篠ノ之が誕生日ということは、義兄である嫁の誕生日は」

零「ああ。俺の誕生日は一学期。とっくに過ぎた」

シャル「なんで言ってくれなかったのさ。何か用意したのに」

零「俺の戸籍上の誕生日は千冬さんと束さんに拾われた日だから、そこまで重要視してないんだよ」

シャル「そつか。ごめん」

零「別に気にしてねえからいいよ」

簪「学園に帰ったら簪の誕生日と一緒に祝う」

零「一学期って言っただろ。だからいいよ」

簪「戸籍上の誕生日だから重要視してないとも言ってた。だから日にちは関係ない」

零「はあ、簪。お前って結構頑固だな」

簪「零を見習ってたみた」

零「変なところを見習うな」

セシ「そういえば簪さん、遅いですね」

零「そんなことよりお前らのISを俺がいじくった形になったんだが、国からはなんだって？」

ラウラ「基本的にその件は保留だそうだ。データは送らなければならぬがな」

零「てつきり科学者辺りが解体して調べるんじゃないかと思っていたが」

ラウラ「私もそう思っていたが、下手に手を出してこんなスペックのいい機体を壊したら他国と差がついてしまうかららしい」

鈴「あのワンオフアビリティを発動させるのに各国躍起になるらしいわよ」

零「無理無理。《リアルイーター》の発動は本当に気まぐれだから」

鈴「あんたらしい能力ね」

セシ「もしかして篠ノ之さん。一夏さんに会いに行ったんじゃ」

鈴「なんですって!？」

簪「やっと気付いたの？」

ラウラ「誕生日の話をした辺りから予想は出来ただろう」

シャル「一夏が箒にプレゼント渡さないはずがないでしょ」

零「お前らは気付いてたのに何で行かなかったんだ？」

ラウラ「なんで行く必要があるのだ？」

零「だってお前ら一夏のこと好きだろ」

簪・シャル・ラウラ「」「はあああああ」「」

鈴「同情するわ」

セシ「不憫ですわ」

あれ、なんか悪いことした？

セシ「一夏さんのところに向かいませんと」

セシリアと鈴は廊下に出る。

零「あいつらどこに一夏達がいるのか分かってんのか？」

――――――

一方その頃

山田「やっと帰ってこれた――――」

旅館付近のビーチ

山田「ていうか、なんでみんな帰っちゃったんですか？普通終わったら手伝いに来てくれますよね？」

100機倒し終わって帰ってきた山田女史。

全員に忘れられていた。

山田「はじめに見かけた人に文句言ってやります」

ちょうど二人専用機持ちが見えた。

山田「よし、あの二人に。なんで帰っちゃうんですか。酷いじゃないですか」

箒「山田先生」

山田「はっ、はい！」

静かだが目が怖い。

箒「なんでこのタイミングで出てくるんですか！！そこに正座してください！！」

山田「それはいくらなんでも理不尽過ぎですよ！」

朝まで箒の説教は続いた。



帰宅（前書き）

オリ話行きます。

## 帰宅

零「やっぱ、家が一番だね」

旅行から帰ったらこのセリフでしょ。

まあ、実際は寮なんだけど。

ちなみに一夏はバスに乗る前に《福音》のパイロットにキスをされ、  
箒達に襲われそうになったところ、千冬さんの「バスの中で騒ぐな。  
帰ったらにしろ」の一言により、リアル鬼ごっこ中。

零「さて、数日ぶりの自室だ」

ガチャ

楯無「お帰りなさいあなた。ご飯にする？お風呂にする？それとも  
ワ・タ・シ？」

ボタン

マズいな。幻覚が見える。《福音》にやられた傷がまだ完治してな  
いんだな。

零「気を取り直してもう一度」

ガチャ

楯無「お帰りなさいあなた。ワタシにする？ワタシにする？それと

もワ・タ・シ？」

零「選択肢が一つに減っちゃった！」

楯無「よし。早速ベッドに行こう！」

零「何がよしだ！おちよくりに来たなら帰りやがれ！」

楯無「1時間前からスタンバってたんだから、それくらいのご褒美ちょうだいよ」

零「あんたが勝手にやったことでしょうが」

さつきみたいな冗談は止めてもらいたい。一応俺も思春期の男子なんだから。

もしかして俺って男として見られてない？

気にしたら負けだな。

零「触れなかったんですが、なんで裸エプロンなんですか！？」

楯無「残念でした。ちゃんと水着を着てるもん。やーい。零くんの裸エプロン先輩！」

零「不名誉なあだ名をつけるな！その格好もマズいだろ！」

マジで前から見たら裸エプロンにしか見えない。

楯無「さーて、今日は数日間暇だった分、零くんで遊ぶぞ！」

零「俺と遊ぶんじゃないくて、俺遊ぶんですね」

楯無「さて、何して遊ぶ？」

零「スルーですか。つか、疲れてんで今日は勘弁してください」

楯無「ええー。じゃあ、疲れを取るために、今日は零くんにご奉仕しちゃうよー!」

零「具体的に何をするんですか？」

楯無「えっちいこと」

零「帰れ」

楯無「冗談だから、まあ料理を作ってみたから食べてよ」

零「それはありがとございます。ちょうど腹が減ってたところなんですよ」

楯無「海鮮料理ばかり食べてたから、青椒肉絲を作ってみました」  
零「随分気が利きますね」

楯無「そりゃあ、先輩ですから」

楯無（学年が違うからこの数日で他の子達と差がついちゃったからこれくらいいしないかね）

零「食べていいですか？」

楯無「どうぞどうぞ」

零「いただきます」

パクッ

零「美味い」

楯無「それは良かった」

零「多分、楯無さんは俺の知ってる女性で一番料理美味いですよ」

楯無「おだてたって何も出ないぞ」

零「いやいや、楯無さんはいいいお嫁さんになりますよ」

楯無「ななな何を言ってるのかな!？」

零「本当に楯無さんと結婚する人は幸せ物ですね」

楯無「ゴニョゴニョじゃあ、零くんのお嫁さんになってあげようかな」

零「本当に美味いな。あれ、なんか言いました?」

楯無「何も言っていないよ!」

零「????そうですか」

楯無「はあ」

楯無さんは顔を真っ赤にしたままうつむいてしまった。

零「えっと、ごちそうさまでした」

楯無「お粗末さまでした」

零「これからシャワー浴びるんで、ゆっくりしててください」

楯無「それなら、大浴場を貸し切りにしたから入ってきちゃいなよ」

零「貸し切りって凄いですね」

楯無「生徒会長権限使っちゃった」

零「さすが楯無さん。普通の人とやるのが違いますね」

楯無「そんなに褒めないでよ」

零「別に褒めてませんよ」

楯無「ささ。汗を流してきなさい」

零「それじゃ、ちょっと行ってきます」

楯無「行つてらっしゃーい」

――

大浴場

ホントに楯無さんには感謝だな。

こんなデカい風呂を独り占めできるなんて。

でも楯無さんちょっとおかしかったな。

何かあるのかな。

ガラガラ

変な音が聞こえたんだけど。

まるで誰かが大浴場のドアを開け、入ってきたような。

零「安心しろ俺。幻聴だ幻聴」

楯無「それは安心したらダメなんじゃないかな」

水着姿の楯無さん登場。

零「楯無さん！何しに来たんですか！？」

楯無「お背中流しに来ました」

零「そのまま回れ右して、帰りやがってください」

楯無「しょうがない。出たら、貸し切りを取り消して零くんが入浴中と校内放送しよう」

零「俺が出ます」

ガチャッ

楯無「そんなことさせると思う?」

楯無さんはどこからか手錠を出し、自分と零の手首にかける。

零「何やつちゃってくれてんの!?!」

楯無「逃げられないように」

零「知らんわ!早く鍵を出してください!」

楯無「じゃあ取って」

零「どこにあるんすか?」

楯無「ここ」

楯無さんは自分の胸を指す。

零「マジすか?」

楯無「マジっす」

零「俺はどうすりゃいいんですか?」

楯無「大人しく私に背中を洗ってもらえばいいんだよ」

零「手錠してるから無理でしょ」



手錠は俺の右手首、楯無さんの左手首に繋がれている。

楯無さんはしまったという顔をしてる。

零「諦めて手錠を外してください」

楯無「しょうがない。後ろじゃなくて前を洗うか」

零「それってそもそもの意味を失ってね!？」

背中が手の届かないから洗ってもらうのに、前は自分で洗えんだろ！

楯無「大丈夫。ぶっちゃけ私が洗いたいだけだから」

零「とうとうぶっちゃけたなおい！まあ、分かってたけど」

楯無「分かってたならいいじゃん。ほら」

零「もう好きにしてください」

楯無「はい。それじゃあ始めます」

ワシャワシャ

あれ。思った以上にはずい。

何これ？羞恥プレイにもほどがあるんだけど。

背中を洗ってもらうのより10倍ははずい。

背中と違つてくすぐつたいし。

そして何より楯無さん近い！

無心だ。無心になれ。何も感じない人形のように。

楯無「零くんってさ。思つてたより、筋肉無いね」

零「まさかのここでダメ出し！？」

楯無「いやいや違くて、零くんの身体能力に比べて筋肉量が少ないような気がするんだよ」

零「基本的に俺の戦闘能力技術量ですから。下手に筋肉があると邪魔になるんですよ」

楯無「ふーん。そうなんだ」

零「それを言つたら楯無さんも筋肉が少ないじゃないですか」

楯無「私も同じ。技術で補つてるから」

零「そうですか。そろそろ洗い終わったみたいですし、湯船に浸かりましょう」

楯無「まだ下が終わってないわよ」

零「やらせねえよ！」

楯無「ちゃんと体を洗わないで湯船に浸かるのはマナー違反よ」

零「手錠をいきなりかける人にマナー云々言う資格はありません。だいたい俺はもう体を洗い終わってます。楯無さんが洗いたいから洗っただけでしょう」

楯無「ちっ」

零「普通に聞こえる音で舌打ちするなや」

楯無「それじゃあ、私のことを洗って」

零「なんでそうなるんすか!？」

楯無「だって私まだ体洗ってないもん」

零「自分で洗えばいいでしょうが!」

楯無「うん。そうする」

零「あれ?素直ですね」

楯無「洗いたかったの?」

零「バカなこと言ってないで早く洗っちゃってください。風邪ひいちまいますから」

楯無「了解」

ワシャワシャワシャ

なんで素直に言うこと聞いたのかな？

さすがに羞恥心の方がおちよくるより上回ったか。

ムニユッ

右手に柔らかい感触が。

まるでマシユマロのような。

零「って！何やってんですか！？」

楯無「体を洗ってんだよ」

零「俺の手にある感触はなんですか？」

楯無「私の胸の感触だね」

手錠がかかってるせいで俺の手は楯無さんの手について行ってしまう。

楯無さんは俺の手がちょうど胸をくるように誘導している。

零「簡単にひいたと思ったらそういうことだったのか」

楯無「次は下を洗おっかな」

零「お願いします！マジで止めてください！」

楯無「しょうがないな。今回だけだよ」

零「こんな機会2度とねえよ！」

楯無「さて、そろそろ湯船に浸かるわよ」

零「長かった。ここまでくる道のりは長かった」

ザブン

楯無「やっぱり、大きなお風呂は疲れが取れるね」

零「その大きな風呂に入るためにめっちゃ疲れましたよ」

楯無「じゃあ、その疲れもとっちゃいませよ」

………無言

気になってたこと聞くか。

零「楯無さん。なんか悩みあるでしょ？」

楯無「なんのことかな」

零「とぼけないでくださいよ。いつもと違うことくらい見てたら分かりますよ」

楯無「零くんは私のこと良く見ているね。このストーカー」

零「怒りますよ」

楯無「ごめんごめん。実はさ。私って生徒会長じゃない。この生徒会長の席を守りきる自信がないのよね」

生徒会長は学園最強じゃなければならない。

俺が倒したが、生徒会長になる気はないので変わってない。

楯無「零くんが《リアルイーター》なんて発動するから。一年生の専用機持ちがチート臭いくらい強くなっちゃったからさ。不安なんだよね」

零「すいません」

楯無「謝らなくていいわよ。私の力が足りないってだけだから。まあ、そんなわけだからさ、生徒会長でいられる間に、今日みたいに生徒会権限を使おうと思ってさ」

零「楯無さん。《ミスティアス・レディ》をいじくらせてください」

楯無「えっ!？」

零「楯無さんには最強でいて欲しいんです。でも《リアルイーター》はそう簡単に使える物じゃない。なら俺が出来ることをやります」

楯無「そっか。でもダメ」

零「ええ!？」

楯無「私も一緒に強化するわ。自分のことだもん。零くんにはつか任せてられないわ」

零「じゃあ、善は急げです。早く上がって整備室に向かいましょう」

楯無「でもいいの？今日は疲れてるんじゃない？」

零「構いませんよ。俺が先に出るんで手錠を外してください」

楯無「分かったわ」

楯無さんは胸の谷間に手を入れるが。

楯無「あれ？」

零「どうしたんですか？早くしてくださいよ」

楯無「鍵無くしちゃった」

零「何やっちゃってくれてんの!？」

## ミッションインポッシブル（前書き）

やっぱり行き当たりばったり。

少し旅に出るので更新が遅れると思います。



## ミッションインポッシブル

前回のあらすじ

裸の零と水着姿の楯無が手錠で繋がれたよ。

鍵は無くなったよ。以上。

零「で、これからどうするんですか？」

楯無「予備の鍵が生徒会室にあるから。大丈夫だよ」

零「この格好でどうやって取りに行くんすか？」

上半身裸の俺。水着エプロンの楯無さん。

手錠が邪魔でこれだけしか着れなかった。

楯無「ケータイで取ってきてもらえば」

零「俺のケータイは部屋です。楯無さんのケータイは？」

楯無「生徒会室」

零「詰んでんじゃねえか！」

楯無「零くん落ち着いて。今、私達がやらないといけないことは、誰にも見つからずに生徒会室または零くんの部屋にたどり着くことよ。もし出来なかったら」

零「出来なかったら？」

楯無「零くんが社会的に死ぬわ」

零「結局被害を被るのは俺か！」

楯無「特に危険なのは、織斑先生、山田先生、シャルロットちゃん、ラウラちゃん、簪ちゃん。この5人に見つかったら物理的に死ぬわ」

零「なんで帰ってきて早々命が危険に晒されてんだよ！？」

楯無「作戦名はそうね、ミッションインポッシブルよ」

零「和訳すると不可能な作戦だからな！早速失敗しそうな香りがプンプンするんだけど！」

楯無「異論は無いわね」

零「大有りだが聞いてもらえそうにないから、せめて作戦名だけは変えてくれ」

楯無「OK。じゃあ作戦名はミッショングーフに変えるわ」零「失敗するって単語がそのまま入ってるからな！分かってるんだろ？分かっててやってんだろ？これならさっきの方がマシだったわ！」

楯無「じゃあミッションインポッシブルで」

零「すみませんが、マジで一発殴らせくれませんか？痛くないんで」

楯無「さてくだらないことは置いて、生徒会室と零くんの部屋、どっちを狙うか決めるわよ」

零「誰かこの胸のモヤモヤを取って!」

楯無「距離的には零くんの自室の方が近いけど、生徒数が多いのよね」

零「それを言ったら生徒会室に行く途中に所員室の前を通らないといけないですよ」

楯無「どっちもマズいはね」

零「俺の自室にしましょう。千冬さんと当たるくらいなら数が多い方と当たった方がマシでしょ」

楯無「織斑先生か。確かに見つかったら逃げられる確率0ね」

零「じゃあ行きますか」

楯無「ちよつと待って、良い物見つけたから」

零「良い物?」

—————

楯無さんの言う良い物を使って移動中。

楯無「ほーら、誰も気付いてない」

零「ちげえよ！みんな気付いた上で無視してんだよ！」

楯無「零くん小さな声で怒鳴るなんて器用なことするわね」

零「この発想は小学生レベルだぞ」

楯無「何言ってるの。実際に軍人のヘビさんが使ってばれなかったわ」

零「ルーツはあの始めはステルスゲームだったのに最近は大人口ボットと戦ってるあのゲームか！」

ここまで言ったら良い物がなんだか分かっただろ？

段ボールだよ！段ボール！

ご丁寧にちゃんと危険物レベルがレベル4のマークが入ったやつ！

結構大きかったから二人で入れたが狭い！

そんな物が廊下を動いていたら普通の奴は近づかんわ！

まあ、その事は俺にとって好都合だな。

ラウラ「何が入ってるんだこれは？」

普通じゃない奴来ちゃった！！

ラウラ「なんかこの箱から失礼な感じがした」

勘が良過ぎだろ！

零「楯無さん。飛ばしますよ」

楯無「戦略的撤退ね」

段ボールの中は2人は四つんばいなのだが、流石は天才と人外と言ったところで異様に速い。

ラウラ「ま、待て！」

いきなりスピードを上げた段ボールに驚きながらもラウラは段ボールを追いかける。

やはり四足歩行（手錠付き）では二足歩行には勝てず、どんどん距離をつめられてしまう。

ラウラ「逃がすか！」

とうとうラウラに捕まってしまった。

ラウラ「さて中身はと。嫁と会長！？」

楯無「実は零くんに無理矢理こんなことはさせられて！」

零「いきなり俺を売ってんじゃねーよ！」

楯無「ナニヲイッテルノカシラ？ワタシニハサッパリダワ」

零「とぼけてんじゃねえ！片言になってんだろっが！」

楯無「どうせ2人共終わるんだったら1人でも生き残った方がいいでしょ？どうせ零くんは挽回不可能なんだし」

零「いいや！そもそも楯無のせいでこうなったんだからあんたを道連れにしてやんよ！」

楯無「ちよつと敬語使いなさいよ！先輩で生徒会長様よ！」

零「敬語つてのは敬う言葉って意味です。俺を売る人に敬う要素が見当たらねえよ！」

ラウラ「嫁。これはどういう遊びなのだ？」

流石ラウラ！ちよつとズレてる！

周りに人居ねえし、これなら適当に誤魔化せるんじゃないかねえか？

楯無さんも同じことに気付いたみたいだ。

楯無「これは我慢大会だよ」

ラウラ「我慢大会？」

楯無「恥ずかしい格好をして、手錠をして耐えられなくなった方が負けなんだよ」

ラウラ「じゃあ、何故隠れていたんだ？」

楯無「えっと、狭いのも我慢するんだよ」

ラウラ「そうか。なら」

零「お、おい！」

ラウラはいきなり服を脱ぎ、下着姿になる。

零「なんで脱ぎ始めてんだ！早く服を着ろ！」

ガチャッ

ラウラ「そうつれないことを言うな。私も混ぜろ」

ラウラは零の空いている左手と自分の右手にどこから取り出した手錠をかける。

零「何やってんだ！早く外せ！」

ラウラ「それは無理な相談だな。手錠の鍵は自室だ」

訂正。ラウラはちよつとじゃなく、物凄くズレとてた。

ラウラ「それじゃあ、始めるか」

零「せめてスカートだけでいいから履いて！」

――――

その後、ラウラにスカートを履かせ、誰にも見つからないように、俺の部屋に行くことを誤魔化しながら伝えた。

そして現在。

狭過ぎる。

段ボールの中にはギリギリ入ることが出来たが、動くのがやっこのくらいぎゅうぎゅう詰めになっている。

つまり密着してます。

当たってる感触を気にしたいのだが、今はこの状況を早く脱することしか頭にはありません。

考えてみる。ラウラはなんとかあったが、こんな姿見られたら即豚箱行きだよ。

えっ？口調が滅茶苦茶だって？

別に焦ってるわけじゃないんだからね！

零「あとどれくらいだ？」

楯無「さっきスピードを出したから結構縮まったよ」

零「嬉しい誤算だな」

ラウラ「嫁よ。花摘みに行きたいのだが」

零「花摘み？そんなの後にしろ」



楯無「花摘みつてのはゴニョゴニョよ」

零「不味くね？ラウラ我慢しろ。死ぬ気で我慢しろ」

ラウラ「努力する」

俺達はさっきの速度が亀に思える速度で自室に向かった。

零「ちよろいな」

自室前。周りには誰もいない。

ガチャッ

千冬「零。話があるんだが……

……何をやっておるんだ貴様らは！？」

零「まさかのこのタイミングでラスボス登場！？」

ラウラ「そんなことより早く」

零「そうだった！織斑女史後で説教受けるんでこれなんとかしてください！！」

千冬「何を言ってるんだ貴様らは？」

――――

その後

千冬「貴様らはISを武装展開して破壊するという方法は思いつかなかったのか？」

零・楯無「「あっ」「」

## 小学校（前書き）

一昨日グアムから帰って来ました。  
ケータイいじれないのはキツかった。

## 小学校

一夏サイド

《白織》にも慣れてきたな。

《白式》が《白織》に変わるとき、あの2人の少女はなんだっただろう？

『力が欲しい？』

その力が《白織》か。

あの時、全てを守る力が欲しいと望んだけど、始めて力を望んだのは確か…………

—————

小学校時代

第「バカだな。後のことを考えなかったのか？」

第がバカにされたところを割って入っていじめっ子3人をぶっ飛ばした。

今から保護者と一緒に話することになった。

はあ、千冬姉に迷惑かけたくなかったんだけどなー。

一夏「しょうがねえだろ篠ノ之。気に入わなかったんだから」

箒「箒だ」

一夏「？」

箒「箒と呼べ。篠ノ之は4人いるんだからややこしいだろう。織斑」

一夏「一夏だ。織斑は3人いるんだからややこしいだろ」

そろそろ話の時間か。

一夏「じゃあちよつと行ってくるわ。箒」

箒「また明日。一夏」

――――

子が子なら親も親だな。

裁判だ。法廷だ。何言ってやがるんだ？

うるせえな。

いじめっ子3人の顔も気に入わねえ。ざまあみろ的に笑ってやがる。

親バカA「うちの子がケガしたんですよ！」

親バカB「出るところ出るわよ！」

親バカC「何か言ったらどうなんですか!」

千冬「すいま」

千冬姉が頭を下げようとしている。

千冬姉に迷惑かけたくなかったのに。

零「千冬姉さん。謝らなくていいよ」

ボタン!

話をしていた部屋のドアが勢いよく開き、義兄の零が現れる。

-----

零サイド

零「千冬姉さん。謝らなくていいよ」

一夏「零兄」

親バカA「なんなのよ!このガキは!」

零「黙れ。豚が」

親バカA「いきなり出てきて豚呼ばわりってなんなのよ!」

零「織斑零。千冬姉さんと一夏の義兄弟だ」

親バカB「ならあなたも一緒に謝罪しなさい！」

零「ギャーギャーうるせえな！大体恥ずかしいかねーのか？」

親バカC「なんのことがよ？」

零「3人でよってたかって女子をバカにし、注意した一夏に3対1で負けた。しかも負けたからって親に言って問題を大きくする。全く同じ男として恥ずかしいわ」

図星を言われ、いじめっ子3人の顔は赤くなっていく。

いじめっ子A「なんでお前がそんな事知ってんだよ！」

いじめっ子B「そんなの口から出任せだろ！」

いじめっ子C「証拠を見せてみるよ！証拠を！」

零「証拠ねえ」

ピンポンパンポン

放送が流れる。

いじめっ子A「おい！男女！」

いじめっ子B「男女のくせにスカートなんて履いてるぜー」

一夏「くだらないことやってるんだったら掃除手伝えよ。もしくは帰れ」

いじめっ子C『男女に肩入れするのか？そっぴやこいつら夫婦だったな！』

昨日の会話が流れる。

いじめっ子の顔は青くなっている。

零「証拠はこれで不十分か？」

千冬「ところでこの証拠はどうやって手に入れたんだ？」

零「それはいつものように一夏を盗ってゲゲゲゲゲ。そんな事はどうでもいいじゃん」

千冬「今、盗聴って」

零「さて屑共。謝るなら今のうちだぞ」

いじめっ子「「ごめ」「」」

親バカA「謝らなくていいわ！」

親バカB「裁判しましょう！裁判！」

親バカC「そうよ！いい弁護士や検事を雇えばいいのよ！」

いじめっ子は流石にヤバイと思い、謝ろうとしたが、後に引けなくなった親バカ達が裁判に持ち込むと言う。



零「そうか。そんな金があるのか？」

親バカA「聞いて驚きなさい！」

親バカB「私達3人の夫は全員、社で重役なのよ！」

親バカC「その小娘とは違うのよ！」

千冬姉さんを指す。

零「はい。謝るチャンスが無くなりました」

零はそう言つとケータイを取出し、どこかにかける。

零「あつ、もしもし。お爺さんですか？さっき言ったことお願いします。えっ？クビにはしなくていいのか。ですって？この後の態度によつて決めさせてもらいます。ありがとうございました」

ガチャッ

一夏「零兄。誰にかけてたんだ？」

零「社社長」

全員「はあああ——————」  
「—————」

親バカA「どうしてそんな知り合いが！？」

零「昔々あるところに少年がいました。」

少年が街を歩いているとお爺さんが3人の不良に絡まれているではありませんか。

周りの人は見て見ぬふりをしています。

そこで少年は『そんな事して恥ずかしいんですか？』と声をかけました。

すると不良は少年に向かって怒鳴ってくるではありませんか。

少年は不良に対し正論を言いました。

沸点の低い不良は我慢が出来なくなり、少年に殴りかかって来ました。

少年は『正当防衛です』と言い、逆にボコボコにしました。

お爺さんは助けたお礼にレストランでフルコースを食べさせてくれました。

お爺さんは少年を家まで送ると『困った時は何時でも電話しなさい』と言ってくれました。

めでたしめでたし」

みんな俺の話を真面目に聞いてくれて嬉しいな。

零「その話には続きがあつて、少年の義弟と義妹がある3人の子供にちよっかいを出されました。

2人は3人の子供を成敗するとバカな親が現れました。

少年は義弟と義妹の為にその3人とバカな親のことを調べました。

するとなんてことでしょう。彼らの父親はお爺さんの会社の社員ではないですか。

少年はお爺さんに頼んでその父親達の家族が謝らなかったら、父親を平社員にしてもらい、一生出世出来ないようにしてもらいましたとき。

お爺さんはその子供達のしたことが自分のされたカツアゲに似ていたので父親達をクビにするかと聞いて来ました。

慈悲深い少年は謝ったらそこまではしないであげようと思いました。

さて、ブーブーうるさい豚共。謝りやがれ」

話を聞いた母親達は魂が抜けた顔になり、一夏と千冬さんは啞然としている。

親バカA「私達が悪かったわ」

親バカB「だからクビだけは」

親バカC「お願いだから止めて！」

零「千冬姉さんに頭下げさせようとしたんだから、土下座くらいはしてもらわないとね」

## 一夏サイド

この後の状況は酷かった。

親バカ3人は土下座して泣いて謝って、いじめっ子3人は事が大きくなり過ぎてピーピー泣いて、俺と千冬姉は零を止めるのに必死だった。

まさにカオス。

その時に強くないといけないなと思った。

最近のマシになってきたが、零が出て来るのは相手がピストル出したからってこっちは核兵器出すような物だもん。

被害が大変なことになるんだよ！

一夏の敵さえ守るという考えはここで産まれた。

白と金と銀で買ひ物（前書き）

4 巻発見

## 白と金と銀で買い物

零「そろそろ髪切らねえとな」

ゴムで髪をまとめる。

最近ずっとISをいじくることでこもってたからな。

プルプルプルプル

Fromシャル

本文　今からラウラと買い物行くんだけど一緒に行かない？

零「気分転換にいいか」

From零

本文　この前行ったデパートだな。部屋で待ってる。すぐ行く。

-----

零「待たせたな」

シャル「うんうん。全然待ってないよ」

ラウラ「嫁よ。目が悪くなったのか？」

零「これは俺が作ったディスプレイだよ。データを見るために持つ

てきた」

シャル「そっか。仕事中にごめんね」

零「外の空気を吸いたいと思ってたから構わねえよ。2人とも俺が勝ったイヤリングと服使ってくれてんだな」

ラウラ「ああ。せっかくの嫁からのプレゼントだからな」

シャル「でもラウラその服とコスプレと軍服しか持ってないんだよ」

零「知ってる。この前のデパートでコスプレショップに入りそうになった」

シャル「パジャマもなくて裸で寝てるのも知ってる？」

零「すぐに買いに行くぞ。布団に潜り込まれるのもパジャマがあった方がマシだ」

ラウラ「嫁だつて服をそこまで持ってないだろ」

シャル「確かに。前もワイシャツにジーンズだったよね」

零「男と女じゃ違うだろ」

シャル「確かにそうだけど他にどんな私服持ってるの？」

零「タキシード」

シャル「極端でしょ！」

零「さすがに高級レストランにワイシャツじゃ無理だった」

シャル「そりゃそうでしょ」

ラウラ「夫婦が似るのは良いことだ」

零「そろそろ行かねえか？」

シャル「バスに乗って電車で行こっか」

ラウラ「スルーするな！」

――――

電車内

カリカリカリカリ

零（やっぱり要領的に武器は減らした方がいいな。その分をこっちに持ってきて）

零はメガネ型ディスプレイを見てメモに何か書き込んでいく。

ラウラ（あのビルは狙うにはちょうどいいな。あのスーパーは供給ラインとして使うか）

敵国との戦争になった時のシミュレーションしていた。

女子「うつわー見て、あそこの3人」



女子「物凄く美人なんだけど」

女子「金髪に銀髪。それに綺麗な白。神様は不公平よね」

零はデータ管理に集中。ラウラはどうでもいい話と聞き流したが、シャルロットはそんなこと言われたことなかったので顔を赤くしてうつむいた。

シャル（綺麗って言われて嬉しいんだけど、零のことを女子と勘違いしてる？）

シャルロットは隣に座っている零を見ると、

シャル（うわっ。そう言われて見ると女の子にしか見えない。思わず見とれちゃったよ。なんか女として負けてる気がするくらい）

シャル「はあー」

零「人の顔見てため息吐くのは止めてくれ」

シャル「あつごめん。つい」

零「ついつて酷くないか？」

シャル「零ってさ。肌綺麗だよ。何かしてるの？」

零「いや。なんにも」

シャル「ええ！ズルい！」

零「ズルいって言われても」

シャル「普通、手入れとかしてもそんなに肌綺麗にならないもん！  
ねえラウラ」

ラウラ「私も何もしてないんだが」

シャル「ラウラもズルい！ていうか今度やり方教えてあげるからやりなよ」

ラウラ「めん」

シャル「面倒はなし！」

――――

デパート

シャル「最初は服を見て、途中でランチ。その後生活雑貨とか小物とか見に行こうと思うんだけどいい？」

ラウラ「よく分かん。任せる」

零「飯食ったら髪切ってきていいか？」

シャル「切っちゃうの？」

零「邪魔だし」

シャル「そつか残念。まあ、とりあえず七階フロアに向かうよ。その下も服屋だから順に見てこ」

ラウラ「なぜ上から見るんだ？下から見たらいいではないか」

零「同感」

シャル「上から下りた方がいいの。お店の系統から見てもそうだよ？」

零・ラウラ「全く分かん」

シャル「~~~~つ。あのね下の方の階はもう秋物になってるの。上の方の階も大分入れ替えてると思うけど、今セールで夏物が残ってるから、先にそつちを」

零「ワイシャツとジーンズでいい」

ラウラ「待て、秋の服はいらないぞ」

シャル「零はもう少し服を気にした方がいい。でもラウラはなんで？」

ラウラ「今は夏だから。秋の服は秋に買えばいい」

シャル「いや、あのね。女の子は普通、季節を先取りするんだよ」

ラウラ「???」

零「シャル、その説明じゃ伝わらねえぞ。ラウラ、戦闘になったら装備を準備をしたら間に合わねえだろ？」

ラウラ「なるほど。そういう事か」

シャル「なんでその説明が通用するのか気になるんだけど」

シャルロットは何かが違うと思うのだが納得しようと努力する。

シャル「とにかく順番に見て行くよ。分からないことがあったら何でも聞いてね」

エレベーターで上がると人ごみになっていた。

零「人が多いな」

シャル「ねえ、はぐれるとマズいから手繋がない？」

零「ああ」

ラウラ「う、うむ」

零は気付いてないが2人は顔が少し赤い。

シャル「じゃあここから」

ラウラ「『サード・サーフィス』。変わった名前だな」

シャル「結構人気なお店みたいだよ。女の子もいっぱいいるし」

零「男がないぞ」

シャル「レディースだし」

店長「金髪に銀髪に白髪？」

店長は客に手渡すはずの紙袋を落としてしまう。

店長の異変に気付き他の店員もその視線を追い、魅了される。

店員「お人形さんみたい」

店員「何かの撮影？」

店長「ユリ、お客さんお願い」

客「ちょっと、えっ、私は？服……落ちた……ままだし」

文句を言おうとした客も魅了される。

店長「ど、どっ、どんな服をお探しで？」

シャル「とりあえずこの子に似合う服を。いいのありますか？」

店長「こ、こちらの銀髪の方ですね！今すぐ見立てましょう！」

店長はマネキンから服を持ってくる。

店長「ど、どうでしょう？お客様の綺麗な銀髪に合わせて白のサマ  
ーシャツは」

シャル「どうラウラ?」

ラウラ「分から」

シャル「分らないは無しで」

ラウラ「むづ……」

ラウラは少しむくれる。

ラウラ「白か。悪くないが、今着ている服だぞ」

店長「あ、はあ」

女子力の低い解答に気の抜けた返事をしてしまう。

シャル「ラウラ、試着してみたら?」

ラウラ「面倒く」

シャル「面倒くさいはなし」

零「なあ、外で待つてていいか?」

店長「ならお客様も試着してみませんか?」

零「はあ?ここってレディース専門店ですよ?」

店長「そうですが」

零「シャル、いきなり質問なんだが男の俺はどうしたらいいと思う？」

シャル「せっかくだから試着してみなよ」

ラウラ「そうだな。私だけ試着とは不公平だ。嫁もしろ」

店長「リアル男の娘……」

マズい。なんかマズい空気だ。ここから脱出を

そーっ

ガシッ

シャル・ラウラ「零（嫁）。どこに行く気？」<sup>だ</sup>

逃亡失敗

零「ざっけんな！男の俺がなんで女物着ねばならんだ！」

店長「大丈夫ですよ。似合っと思えますから」

零「似合ったら困る！」

シャル「店員さん。押さえてるうちに早く服を」

店長「準備済みです」

零「仕事早いなおい！」

ラウラ「嫁よ。いい加減諦めろ」

零「絶対にヤダ！」

ラウラ「なら選ばせてやる。自分で着るか、『シュヴァルツ・クリエーター』の能力で着替えさせられるかを」  
零「IS使ったら千冬さんに怒られるぞ！」

シャル「あつ、はい。それじゃあ。零の女装写真で許可下りたよ」

ケータイから耳を離し、零に告げる。

零「千冬さんも敵か」

ラウラ「10、9、」

零「なんのカウントダウンだ！？能力発動までのか！」

ラウラ「6、4、3、」

零「今確実に5が飛んだ！」

ラウラ「2、1」

零「分かったよ！着ればいいんだろ！着れば！」

ラウラ「始めからそうすれば良かったのだ」



零「酷い。酷すぎる」

シャル「じゃあこれ着て」

零「もう好きにしてくれ」

シャル「じゃあこれも」

零「女性用下着なんて着けられるか!」

## 白と金と銀でファミレス（前書き）

感想お待ちしています。

## 白と金と銀でファミレス

シャル「思ったよりあのお店で時間とっちゃったな」

酷い目にあつた。

いや、酷い目にあつてる（現在進行形）だな。

零「いい加減服を返してくれ」

現在の格好。フリルの着いた女物。下着は……………聞かないでくれ。

シャル「ダメ。今日1日はその格好してもらつよ」

零「帰る」

ラウラ「その格好でか？一夏達が見たら変態だと思つだらうな」

零「泣けてきた」

シャル「女言葉を使わないと学園についても返さないよ」

零「そんな、酷いですよ」

シャル「冗談で言つたのに普通に上手いんだけど」

ラウラ「せっかくだからこのままやつてもらつとしよつ」

零「はあ、本気を出さない方が良かったみたいですね」

シャル「ため息吐く姿も絵になってるんだけど」

ラウラ「ああ。同姓なのにドキッとしてしまったぞ」

零「同姓じゃありませんからね」

シャル「遅くなったけどご飯にしか。ファミレスでいい？」

零「構いませんよ」

ラウラ「食べればどこでもいい」

店員「いらっ…しゃい…ませ？」

何故に疑問系？ばれた？女装してる変態だと思われてる？

シャル「三名なんですけど空いてますか？」

店員「はい、大丈夫です。ご案内します」

女性店員はふらふらと歩いて席に案内する。

零「あのう、大丈夫ですか？」

店員「は、はい！大丈夫です！」

零「顔も赤いですし休んだ方が」

店員「こんないい日に休んでられません！」

零「そ、そうですか」

いい日って何がいいの？

店員「ご注文が決まりましたらお呼びください」

零「私はビーフシチューにします。2人は何を注文しますか？」

シャル「僕はパスタかな」

ラウラ「なんでもいい」

零「じゃあこちらで勝手に決めてしまいますね」

呼び鈴を押す。

ピン

店員「ご注文がお決まりでしょうか？」

ポーン

さっきの女性店員が呼び鈴が成り切る前に来た。

零「ドリンクバーを3つ、私はビーフシチュー、彼女にはパスタ、そして彼女にはお子様ランチをお願いします」

ラウラ「なっ」

店員「ビーフシチュー、パスタ、お子様ランチをお一つずつ、ドリンクバーを3つですね。すぐにお持ちします」

女性店員は走らずかつ早くと器用なことをした。

ラウラ「ちょっと待って」

零「ラウラ。騒いじゃダメですよ」

ラウラ「嫁！どうしてお子様ランチなんだ？」

零「なんでもいいとおっしゃったじゃないですか。ねえシャル？」

シャル「うん。確かに言ってた」

ラウラ「もういい！今から変えてもらおう！」

ラウラは呼び鈴に手を伸ばす。

店員「お待たせしました。ビーフシチュー、パスタ、お子様ランチになります」

ラウラ「早すぎる」

店員「すぐにと言いましたし。何か問題でも？」

零「いえ。貴女の仕事が有能だから褒めていたんですよ。頑張ってくださいね（ニコッ）」

店員「（ブシャア）はい！ごゆっくりどうぞ！」

女性店員は鼻を押さえて戻る。

零「本当に大丈夫ですかね？鼻血まで出してしまつて」

シャル「ははは。零ってわざとやってるよね？」

零「なんのことですか？」

ラウラ「嫁。お前のビーフシチューと交換しろ」

零「ラウラはわがままですね。何が不満なんでしょう？」

ラウラ「お子様というところが気に食わん」

零「まあ、ここは私が大人になって交換してあげます。ラウラは子供ですから」

ラウラ「むっ」

零「しょうがないですね。ラウラちゃんは『お子ちゃま』ですからラウラ「分かった！私は子供じゃないからお子様ランチを食べる」

シャル「なんか言ってることが滅茶苦茶なんだけど」

零「そんな嫌々食べようとする人にあげるお子様ランチはありません」

ラウラ「私はお子様ランチが食べたいんだ！」

零「『ラウラ・ボーディツヒはお子様ランチが食べたいです！どうか譲ってください！』でしょう？」

ラウラ「ラウラ・ボーディツヒはお子様ランチが食べたいです！どうか譲ってください！」

零「仕方ないですね。そこまで言うなら譲ってあげましょう。感謝しなさい」

ラウラ「よし！お子様ランチが食べられる！」

シャル「あれ？それでいいのラウラ？」

零「シャル。貴女もお子様ランチがいいんですか？（ニコッ）」

シャル「なんでもないよ」

シャル（笑顔なのに目が笑ってない）

零「飲み物を持ってきましたようか」

零は紅茶、シャルはコーヒー、ラウラはオレンジジュース。

ラウラにお子様ランチにはジュースというのがルールと言ったら普通に信じた。

ラウラの将来が心配なんだけど。

席に戻り、食事を始めた。



ラウラ「お子様ランチとは素晴らしい物だな。見ろ、ドイツの国旗が立っているぞ」

ラウラはお子様ランチに夢中だった。

ナンパ「ねー。君たち暇？」

なんか変な連中が3人やって来ました。

零「多忙です」

ナンパ「そんなこと言わずに俺達と遊ばない？」

零「遊びません」

ナンパ「ここの代金奢るからさ」

零「お金だけ置いて出て行ってください」

ナンパ「そんなこと言わずにさ」

シャル「キャッ」

ナンパの1人がシャルの手を掴む。

バシャア

零はすかさず紅茶をぶっかける。

ナンパ「あぢぢぢー……」！

ナンパ「何すんだ！この女！」

零「手が滑ってしまいました」

ナンパ「舐めてんのか！」

零「恥を知りなさい！貴方達はどんな教育を受けてきたんですか！もし自分達に非がないと思うならかかってきなさい。手加減はしませんよ」

ナンパ「くそっ、行こうぜ」

ナンパは零の空気に気圧され、店を出ていく。

周りからかっこいいなど称賛の声が上がる。中にはお姉様という声が混じっていたのは聞かなかったことにしよう。

零「シャル。大丈夫でした？」

シャル「うん、ありがとう」

零「目立ってしまいましたし、早めに出ないといけませんね」

シャル「僕は腕時計が欲しいんだよね」

ラウラ「何故だ？」

シャル「日本製って憧れだったからね。ラウラは何か日本製で欲し

い物はないの？」

ラウラ「日本刀だな」

零「今度いい職人を紹介します」

ラウラ「恩に切る」

シャル「あれ？会話が成立してる？」

店長「あのう。ちょっといいかしら？」

零「なんでしょう？」

店長「あなた達バイトしない？」

零・シャル・ラウラ「」「はい？」「」

白と金と銀でメイド喫茶（前書き）

感想お待ちします。

## 白と金と銀でメイド喫茶

店長「というわけで2人辞めちゃって、1人病気なのよ。まあ、辞めたというより駆け落ちなんだけどね」

零「あら」

シャル「はあ」

ラウラ「うむ」

店長「だけど今日は重要な日なの！本店から視察が来ちゃうし」

その店はメイド&執事喫茶。

シャル「それは構わないのですが、なんで僕は執事服なんですか？」

店長「大丈夫よ。似合ってるから」

シャル「そ、そうですか」

零「そうですよ。似合ってますよシャル」

シャル（それが困るんだけど！ていうか零はメイド服を着ていることはいいの？）

零「シャル。日本には『やられたらやり返せ』という言葉があります」

シャル「もしかして零。まだ根に持ってる？」

零「なんのことやら」

シャル（まさか捨て身で同じ目に合わせるなんて）

零「あのお。お店の名前を知りたいのですが」

店長は着替えたメイド服のスカートの裾を掴み。

店長「お客様。@クルーズへようこそ」

――――

@クルーズ

シャル「ミルクと砂糖はどうでしょうか？良ければこちらで入れますが」

客「どちらもたっぷりをお願いします」

シャルは女性客に人気みたいです。

客「君可愛いね。お店が終わったら」

ダン！

水の入ったコップをテーブルに叩きつける。

客「何これ？」

ラウラ「水だ。飲め」

客「出来ればメニューを」

ラウラは厨房に戻り、コーヒーを受け取り、

ダン

ラウラ「とつと飲んで帰れ」

客「頼んでないんだけど」

ラウラ「客じゃないなら帰れ」

客「コーヒーにも種類が」

ラウラ「ほう。貴様は違いが分かるのか？」

客「いえ。なんでもないです」

ラウラはドイツの冷水が未だ健在しており、男性客には何故か人気です。

店長「お待たせしました。カプチーノのお客様」

客「はい。凄い！薔薇ですか？」

店長「はい。今日はたまたまラテアートが出来る者がおりまして」

ラテアートとはコーヒーの表面に絵を描くという物。

店員「ポットの紅茶入れておきましようか？」

零「いえ、後78秒待ってください。お湯を入れて3分後にカップに入れるのが、一番香りがいいですから」

店員「そうなんですか。勉強になります」

厨房で仕切っていた。

客「金髪の執事さんでお願いします」

客「こっちは銀髪のメイドさんで」

客「カプチーノ3つ」

3人共、客に大人気だった。

強盗「全員手を上げておとなしくしろ！」

ハンドガン、ショットガン、マシンガンを持った強盗が入ってきた。

客「キャーーーーー！」

強盗「騒ぐな！静かにしろ！」

警察「あー、犯人に告ぐ。君達は完全に包囲されている。大人しく投降しなさい」



零「…………古」

強盗「どうしましょう。このままじゃ俺達」

強盗「うるたえんじゃねえっ！こっちには人質がいるんだ。焦ることはねえ」

強盗「そうすつよね。俺達にはこれがあるし」

バン！

天井に威嚇射撃を行う。

君「キャーーーーー！！」

バン

リーダーがハンドガンを撃って黙らせる。

強盗「警官ども！人質を解放して欲しかったら車を用意しろ！」

強盗「おい！メニュー持ってこい」

零「シャル。ラウラ。行きますよ」

シャル「うん」

ラウラ「ああ」

3人の強盗に1人ずつ向かっていく。

――――  
ラウラサイド

強盗「なんすか、これ？」

ラウラ「水だ」

強盗「いや、メニューが欲しいんですけど」

ラウラ「黙れ。飲め。……飲める物ならな」

氷水の入ったコップから氷が宙を舞う。

強盗「なっ！？」

宙を舞った氷を指弾で撃ち抜く。

強盗「いつてええっ！？」

油断していた強盗の顔にヒット。慌てマシンガンに手を出すか、

ラウラ「させるか！」

その手は強盗に蹴りを入れる。

強盗はスカートの中に目を奪われ、蹴りが綺麗に入り、気絶する。

ラウラ「目標、制圧完了」

――――

シャルロットサイド

シャル「メニューをお持ちしました」

テーブルにメニューを開く。

強盗「はあ、男か。リーダー達はメイドさんなのに」

プチッ

シャル「僕だってメイド服の方が良かったよ！」  
バコッ！

強盗「ぐほっ」

強盗の後ろからトレイでぶん殴る。

強盗はメニューに顔面から突っ込む。

ズドン

そのまま強盗の後頭部に踵落とし。

シャル「スカートじゃないから中が見えないのはいいけど」

――――

零サイド

零「メイド特性ハーブティーとメイド特性ケーキになります」

強盗「気が利くな」

零はハーブティーの入ったポットとホールのショートケーキを運んできた。

零「まずハーブティーをどうぞ」

バシヤア！

ハンドガンを持った手にぶっかける。

強盗「あつざいいい！何すんだこの女！」

零「さっきのナンパと同じセリフ。つまらないですね」

強盗のリーダーはハンドガンを向ける。

零「凄いですね。そんな熱湯で暑くなったハンドガンを落とさなかったのは尊敬に値します」

強盗「舐めるな！」

ガチャガチャ

ハンドガンの引き金を引くが弾は出ない。

強盗「な、なに！？」

零「そもそも銃というのは細かい部品で出来ています。特に自動装填の物は使っています。確かにリボルバーより素人でも扱いやすいですが、壊れやすくもあるのです。そんな細かい部品に熱湯をかけたら形が変形し、正常に機能しなくなります」

強盗の顔は説明を聞き、青くなっていく。

零「次は特性ケーキでございます」

零はケーキ（蠟燭つき）を強盗の顔面に向かって投げる。

零「刑務所に逝ってらっしゃいませ。強盗様」

――――

バイト後、やっと服を返してもらえ、シャルとラウラが残りの必要な物を買ってる間に髪を切ってきた。

零「買い物が済んだみたいだな」

シャル「結構買っちゃったよ。お給料が入って予定より色々買えて助かったよ」

ラウラ「む、金か？それなら口座に2千万ユーロほどあるはずだが」

シャル「えっ！そんなに持つてるの！？」

零「驚くことか？俺の貯金は億は行ってるぞ」

シャル「上には上がいた！？だいたい何でそんなにあるの！？」

零「ISの装備の開発とかで。まあ、金のほとんどが新しい開発の資金で消えるがな」

シャル「納得」

ラウラ「私は貯金はあるのだが、引き出し方が分らん。一度も使ったことがないからな」

シャル「そつか。ラウラはお金の使い方を覚えていこつか」

ラウラ「うむ。頼む。今までは支給品だけで足りたから、金銭が必要無かった」

零「カード作ったらどうだ？あっちの方が使いやすいし」

シャル「下手にラウラにカード渡すと、使い過ぎる可能性があるからダメ」

零「2千万ユーロを使いきるって、さすが親友同士良く分かってるな」

ラウラ「嫁も夫婦なのだから分かっておけ」

零「考えておくよ。つか、シャルも会社売った金あるだろ」

シャル「自分で稼いだお金じゃないけど」

零「まあ、そうか」

シャル「帰る前に城祉公園っていう公園があるから行こう」

ラウラ「公園？」

シャル「うん。昔お城があった公園なんだよね」

ラウラ「ほう。日本の城は守りやすいと聞く。城跡とはいえ一見の価値はあるな」

零「俺的には北海道の星形の城が好きだぞ。どの角度から向かってきても大砲の餌食だ。後は有名な大阪城。堀が2つあって大砲が」

シャル「ストップ！お城についてはもういいから」

ラウラ「興味深かったのだが」

シャル「実はその公園にクレープ屋さんがあるんだけど、ミックスベリーを食べれば幸せになるっておまじないがあるから食べようよ」

シャル（本当の噂はカップルで食べれば結ばれるっていう物なんだけどね）

零「随分安い幸せだな」

シャル「おまじないだから」

ラウラ「おまじないとはなんだ？」

シャル「ジンクスかな」

ラウラ「ああ、験担ぎか」

シャル「うー、間違っではないんだけどね」

零「クレープ屋あつたぞ」

シャル「本当だ。ミックスベリー3つください」

店員「ごめんね。今日はもう終わっちゃったの」

シャル「そうですか残念。零、ラウラどうする?」

ラウラ「イチゴとブドウを一つずつだ。嫁は?」

零「俺は珍しいブラックベリーで」

零とラウラはとっと注文して金を出し買う。

シャル「お金」

ラウラ「買い物の実戦だ。何点だ?」

シャル「100点だよ」

ラウラ「ふふ。そうだろ」

零「今度、日本刀買う時も安心だな」

ラウラ「うむ」



シャル「結局そうつところに着くんだ」

ラウラ「シャルロットはどっちがいい？」

シャル「うーん。じゃあイチゴで」

零「美味しいな。久しぶりに何か甘い物でも作るかな」

ラウラ「クレープの実物を食べてのは初めてだが美味しいと思っぞ」

シャル「今度はみんなでこよっか」

ラウラ「私は嫁と二人つきりで来たいな」

零「暇だったらな」

シャル「ズルい！僕も」

零「シャルも暇だったら付き合っよ」

ラウラ「シャルロット」

シャル「何？ラウ」

ペロッ

ラウラはシャルの唇を舐める。

シャル「なっ、なあっ、ななななっ！？」

ラウラ「ソースが着いてたからな」

シャル「だからって！」

ラウラ「両手がふさがっている」

ラウラは手の買い物袋とクレープを見せる。

零「なるほど。一夏に興味を示さないと思ったら百合なのか」

シャル「違うからね！どうしてそういう勘違いするかな？」

ラウラ「なあ、百合とはなんなのだ？」

シャル「知らなくていいから！ラウラにはまだ早いよ！」

ラウラ「むづ。今度クラリッサに聞いてみるか」

零「あのエセ日本通なら知ってそうだな」

ラウラ「シャルロット。一口やるから、私にも一口よこせ」

シャル「いいよ」

シャルロットとラウラは一口ずつ交換する。

零「やっぱり百合じゃん」

シャル「だから違うって」

零「そっぴゃ。あのクレープ屋にはミックスベリーはないぞ」

シャル「えっ？」

ラウラ「やはり嫁も気付いてたか」

シャル「ラウラは気付いてたの？」

零「メニューに無かったし、厨房にソースが無かった。いくつかの種類のソースをかけるタイプなら売り切れることはないからな」

ラウラ「嫁の言う通りだ」

シャル「そ、そうなの？よく見てるね」

零「料理は模倣から始まる。幸せになれるなら家で作りたいからな」

ラウラ「あのワゴンがテロリストの偽装だったらどうする？IS展開を行ったところで無傷では済まん」

シャル「2人ともそういう観点で見てるんだ」

零・ラウラ「当たり前だ」

ラウラ「だがミックスベリーは食べただろ」

シャル「???」

ラウラ「それは何味だ？」

シャル「イチゴだけど」

ラウラ「じゃあ、これは？」

シャル「何って、ブドウだよね？」

零「ブドウって普通はクレープに入れるか？」

シャル「ああっ！ストロベリーとブルーベリー！」

ラウラ「ご名答」

シャル「ってラウラ！ブルーベリーはブドウじゃないよ！」

ラウラ「似たような物だろ？それにブルーベリーと言ってシャルロットがすぐに気付いてつまらん。嫁がブラックベリーと言ったときはヒヤヒヤしたぞ」

零「少しくらいはヒントをやらないと可哀想だと思ってな」

シャル「そっかー。『いつも売り切れのミックスベリー』はそういう意味だったんだ」

シャルロットの頭の中でさっきのことがラウラを零に置き換えられ上映されていた。当分アンコールは止まないだろう。

零「どうする。ブラックベリーも食っておくか？」

ラウラ「ああ。交換だ」

シャル「ぼ、僕も！」

シャルロットとラウラは顔を赤く染め、一口ずつ交換する。

零「これで3人とも幸せだな」

――――

その日の夜

コンコン

シャル「はい」

零「邪魔するぞ」

シャルロットとラウラの部屋に入ると白猫と黒猫がいた。

シャル「な、なんで来たの!？」

零「さつき甘い物作ると言ったから、チョコレートケーキを作ったから一緒に食おうかと……………悪かった。2人はお楽しみ中だったのか」

シャル「いい加減その勘違いやめて!」

ラウラ「差し入れか。さすがは私の嫁だ」

ラウラは胸を張るが威厳がない。

零「くくっ」

シャル（笑われた！今日はたまたまなんだよ！いつもは大人っぽい  
の着てるんだから！）

零「いいんじゃないか。可愛いし」

シャル・ラウラ「可愛い」

零「さて、ケーキ結構甘いから飲み物出すか」

シャル「いいよ。お客さんにそんな事やらせられないよ」

零「いや、その手じゃ無理だろ」

シャル「あ」

シャルとラウラの手は肉球手袋を着けている。

零「そういや、本音の奴も着てたな。つーかなんであいつは肉球で  
箸を使えたんだ？」

謎過ぎるエセピカチュウ。

零「今日は子猫が二匹いるしホットミルクにするかね」

シャル・ラウラ（子猫）

子猫二匹に唐変木一人の不思議なお茶会が行われた。



## 織斑家（前書き）

感想を下さい。b yテスト期間なのにこんな事してる作者



## 織斑家

簪（うーん。どうしよう）

簪の目に映るのは『織斑』の表札。

チャイムに指を伸ばすが押さずに引っ込めるの繰り返し。

かれこれ一時間こうしている。

つか、よく警察来ねえな。ただの不審者だぜ。

零「簪。何やってんだお前は？」

家主の零が買い物袋を持って帰ってきた。

簪「ひゃっ！？零！？ええつと……これは……その」

現在、簪の頭の中ではちっちゃい簪達が急ピッチで会議を行っている。

その結果。

簪「来ちゃった」

まともな回答ではなかった。

零「そうか。もてなしが出来るかは知らんが、上がってけ」

簪「えっ！いいの？」

零「お前は何しに来たんだ？まあ、用事があるなら無理にとは言わんが」

簪「大丈夫！予定なんてこれっぽっちもないから！」

零「そ、そうか」

簪の妙な気迫に気圧される。簪はそれに気付き。

簪「……………用事はないです」

零「変な奴だな。上がってけ」

簪「うん」

簪（変な奴って言われた！。OTL）

ガチャ

零「ただいま」

簪「お邪魔します」

一夏「お帰り。おつ、簪も一緒か」

零「ああ。帰ってきたら家の前にちょうどいてな」

簪（そうだよね。一夏くんも家に居たんだよね）

零と二人つきりというシチュエーションを考えていた簪は少し残念がる。

一夏「俺ちよつと買い物に行つて」

零「買い物は俺が今行つてきたところだろ。だいたい客が来ているのに失礼だろ」

一夏「いやここにいるの気まずいんだけど」

零「何言ってるんだ？まあいいや。簪ソファ―に座ってる。飲み物持つてくる」

零は台所に行く。

簪「うん。ありがとう」

一夏「簪。一番応援してるのは千冬姉だけど頑張れよ」

簪「えっ！う、うん」

一夏に応援され、顔が赤くなる。

零「ほれ、冷茶」

ドキッ！？

零「お前ら何話してたんだ？」

簪「な、何でもないよ!」

零「隠し事か? まあ、構わねえが」

ピンポーン

零「宅配便か?」

一夏「俺が行ってくる」

一夏(この空気から少しでも離れたいからな)

――――

少し前

セシ「着きましたわ。ここが一夏さんのお家ですわね」

ピンポーン

ドタドタ

一夏「はい。おつセシリアが良く来たな!」

セシリアの手を取る。

セシ「一夏さんたらわたくしが来たことをそんなに嬉しがって」

一夏「早速上がってくれ」

セシ「はい！」

一夏（セシリアが増えればあの空気はなくなる！）

一夏「セシリアが来たぞ」

セシ（零さんの存在を失念してましたの）

零「いらっしやい」

簪「セシリアも来たんだ」

セシ「簪さんもいたんですね」

簪「今日は暇だったから」

セシ「奇遇ですわね。わたくしも暇でして」

簪・セシ「あはははは」

二人はお互い相手の考えを察知した。

セシ「お土産買ってきたのでどうぞ」

一夏「サンキューな。ケーキか、ちょうど4つあるな。今日は暑  
しアイステイーにするか」

セシ「そのケーキは美味しいって評判のお店の物ですわ」

簪（ヤバイ。お土産なんて零の家に来ることだけで頭いっぱい考

えてなかったよ。零に常識が無いって思われないかな？いや、もしかしてもう思われてる？どうしよう？」

久々に簪ネガタイプ。

一夏「持ってきたのはセシリアだし、一番始めに選べよ」

セシ「そうですか？じゃあタルトで」

零「次はお客さんから簪が選べ」

簪「抹茶のムースを」

零「一夏。お前はどっちにする？」

一夏「チーズケーキにするわ」

零「じゃあ、モンブランだな」

簪「このケーキ美味しい」

一夏「確かにな。うちでも作ってみたいな」

セシ「それは一夏さんでも無理だと思いますわよ。このケーキの店のパティシエは世界大会に出場者ですし」

零「それなら俺も出たことあるぞ」

一同『はい？』

零「ていうか俺優勝したし」

一夏「いつの間にそんな事したんだ!？」

零「いや束さんが甘い物食べたいって言ったから有名店で練習してたら出場の話が来たから出て優勝した」

一夏「相変わらずチートじみてるな」

簪「零らしいって言ったら零らしいんだけど」

一夏「零、そのモンブランと俺のチーズケーキを交換しないか？」

零「それじゃ口開ける」

一夏「あーん」

零は一口分取り、一夏の口に入れる。

一夏「モンブランも美味しいな。零も口を開ける」

零「ああ」

一夏も零に食べさせる。

その光景を簪とセシリアが羨ましそうに見ている。

零「なるほど隠し味に白ワインを……なんだお前らも交換したいのか？」

一夏「そうなら早く言えよ」

簪「いいの？」

零「全然問題無い」

セシ「お言葉に甘えて」

簪「私はモンブランを食べてみたいかな」

セシ「わたくしはチーズケーキが」

零「ほれ」

一夏「分かった」

零は簪に一夏はセシリアに食べさせる。

セシ「凄く美味しいですわ」

簪「うん。本当に。今度私も買ってみようかな」

零「それじゃ、そっちの一口貰うぞ」

一夏「俺も」

零と一夏は簪とセシリアのケーキにフォークを伸ばすが、

セシ「お待ちになって！」

簪「ここは礼儀的に私達もちゃんと食べさせないと」



零「そういう物なのか？」

簪「そういう物なの」

一夏「二人がそういうならいいが」

簪・セシ「はい、あーん」

――――

一夏「さて、これからどうする？」

零「どっか行くか？」

セシ「いえ！外は暑いですし、せつかくですからここで」

簪「そうだよ！それに出来れば零の部屋見たいなあ………なんて」

零「俺の部屋？ああ、ラボでも見たいのか？技術者として」

簪「ラボじゃなくて零の部屋が見たいんだけど」

零「ラボじゃないのか？部屋を見せるのは構わねえが」

セシ「わたくしは一夏さんのお部屋を」

一夏「俺の部屋？面白い物なんて無いぞ」

零「本棚の二段目の広辞苑のケースの中に俺や千冬さんに隠れて買

った面白い物があるぞ」

一夏「何言ってんだ!?!」

セシ「早く一夏さんのお部屋に向かいましょう!」

一夏「なんでそんな物に食いついてんの!?!」

零「俺達の部屋は二階だから行くぞ」

一夏「ちょっと待って――――――!?!」

一夏を置いて、3人は2階に上がる。

零「着いたぞ。右が俺の部屋で、左が一夏の部屋。ちなみに奥の部屋は千冬さんのだから、勝手に入ると殺されるぞ」

簪「あれがあの……」

セシ「当たり前ですが、織斑先生もここで暮らしてらっしゃるんですわね」

簪「セシリアはまだいいよ。ライバルじゃないんだから」

セシ「簪さん。心中お察します」

零「なんだ?やっぱ止めとくか?」

セシ「いえ!虎穴に入らずんば虎児を得ずと言いますし」

簪「そうそう。毒を食らわば皿までって言うし」

零「何言っただお前らは？そんなに広い部屋じゃないが、入れ」

簪「お邪魔します……」

簪は零の部屋にセシリアは一夏の部屋に入ってく。

零「椅子は一脚しかねえしな。あ、ベッドにでもかけてくれ」

簪（べ、べ、ベッドに！？もしかしてこのまま？まだ心の準備が出来て無いよ！うわ、うわ、うわあああああああああ！）

簪暴走！

ピンポーン

一夏「俺が出る」

零「頼んだ。そうだ、『ウルトラマン』でも見るか？」

簪「見る」

簪の暴走は沈静しやすかった。

ボタン

楯無「簪ちゃん！2人つきりで何やってんの！」

簪が最初に考えたそういう展開は諦めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0464t/>

---

IS カオスに原作ブレイク

2011年11月20日14時44分発行